
妖怪禪師

雨宮雨彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖怪禅師

【Nコード】

N4058I

【作者名】

雨宮雨彦

【あらすじ】

『妖怪禅師』とは、妖怪退治を専門とするお坊さんのこと。さまざまな妖怪や死者の霊に立ち向かってゆきます。

妖怪出現

「なんじゃと？ 君は駅の自動改札機に嫌われてしまった、と言うのかい？」

ゼロ禅師が目を丸くしたのも無理はないかもしれません。ススムが話した内容はそれほど奇妙だったからです。

ススムは毎日、学校へ行くのに電車を利用していました。定期券を持っていて、一日に何回か自動改札機を通ることになります。

「そのたびに毎回、僕は意地悪をされてしまうんです。今日だって、買ったばかりの新しい定期券なのに、『これは期限切れだ』とブザーを鳴らし、ゲートをボタンと閉じられてしまいました」

「ほう」

「まわりのお客さんからじろじろ見られて、僕はどれだけ恥ずかしかったか」

「駅員はなんと言ってるんだね？」

「駅員も首をかしげるばかりなんです。定期券を新しく作り直してくれたんですが、自動改札機に入れると、またブザーが鳴りました」

「自動改札機の故障ではないのかい？」

「僕と駅員が首をひねっている間にも、他のお客さんはみんなすいすい通り抜けていくんです。自動改札機にはまったく異常がないん

です」

「それで？」

「このあと何をやっても、やはりだめでした。自動改札機は、どうしても僕を通してくれません。これはもう、機械が僕を嫌っているとは思えないではありませんか」

この奇妙な事件をさっそくゼロ禅師が調査し始めたのは、いうまでもありません。数日後ススムの家を訪ね、ある知恵を授けたのです。

翌朝ススムは、胸をどきどきさせながら駅へと向かうことになりました。ポケットの中の定期券には、ある細工がしてありました。

スーパーマーケットへ行き、ススムはワサビを買ってきました。定期券にワサビをたっぷり塗ってしてから自動改札機の中へ入れるように、というのがゼロ禅師の指示だったのです。

もちろんススムはその通りに実行しました。

するとどうでしょう。いったんは定期券をのみ込んだのですが、ブザーを鳴らす間もなく、自動改札機の様子が大きく変わったではありませんか。

ランプをしきりに点滅させ、ゲートをバタバタと激しく開閉するさまは、まるでのどをかきむしっている姿に見えなくもありません。

次の瞬間、自動改札機が突然立ち上がるのを目の当たりにして、目を丸くするどころか、ススムは恐ろしさを感じるようになりました。

た。

自動改札機がフラフラと歩き始めるだけでなく、音を立てて鉄のボディーを床へ脱ぎ捨ててゆくのを、ススムは呆然と見つめたのです。

その下から姿を現したのは、なんと巨大なキツネだったではありませんか。

しかし、なんという大きさのキツネでしょう。

でもススムをぞっとさせたのは、それだけではありませんでした。怒りに満ちたその目がランランと輝き、彼をにらみつけているのです。

ススムは逃げ出さなくてはなりませんでした。

だけど足がすくんでしまい、駆け出すどころか、ススムは一步下がることすらできなかったのです。

背後から声が聞こえてきたのは、その瞬間でした。それを耳にして、ススムがどれほどほっとしたのか。

「もうあきらめい。おまえの悪事もそこまでじゃ」

もちろんゼロ禅師の声です。

どうやらキツネは、ゼロ禅師がいささか苦手だったに違いありません。

いかにも気に入らない表情で舌打ちをしたかと思うと身をひるがえらせ、妖怪ギツネはあっという間に姿を消してしまったのでした。

ススムは、やっと口をきくことができました。

「ねえ禅師」

「なんじゃなススム君？」

「あのキツネを何とかできないの？　今日はこれですんだけれど、いづれまた僕に嫌がらせを仕かけてくるんでしょう？」

「くるだろうな」

「ねえ、何とかしてよ」

「そう言われても困るな」

「だってさあ…」

「ならばススム君、やつを君の家族の一員として迎えてやってはどうじゃね」

「どうして？」

「ふふふ、それがやつの本心だからさ。そもそもこの悪さはすべて、はじめから君の関心を引くためのじゃよ。家の中へ受け入れてやれば、もう二度と悪さはせんじやろう」

「家の中へ入れるって？」

「興味があるのかな？　ならまず、君のご両親に相談しよう。そのほうが話が早い」

そのままススムは、ゼロ禪師を家へ案内することになりました。両親の前に通され、ゼロ禪師はすぐに口を開いたのです。

「おたくのススム君は、妖怪ギツネに目をつけられております」

「なんですって？」

手短に、ゼロ禪師はこれまでのいきさつを説明しました。両親が目を丸くしたのは、いうまでもありません。

「しかし、なぜうちの息子なのですか？」

「それは、このおうちの住所と関係がありましような」

「『ギツネ火ヶ丘』ですか？」

「そうです」

お父さんに向かって、お母さんが文句を言い始めました。

「だから私は、ここに家を建てるのはイヤだったのよ。何か悪いことが起こるんじゃないかという気がしていたわ」

ゼロ禪師は説明を続けました。

「いやいや奥さん、少しお待ちなさい。この家が『ギツネ火ヶ丘』

の中心に立っているのは事実です。名前の通り、ここはかつて妖怪ギツネのすみかだったのでしょうか。

古巣ですから、やつはここへ帰りたがっているのです。だからススム君に悪さをするのです。ならばこの家の中に住まわせてやればよいではありませんか」

「妖怪ギツネをですか？ 私たちはどうなるのです？」

「ははは、心配はごもつともですが、ご家族には何も起こりません。

それはそうとご主人、そこにあるのはなかなか立派な柱ではありませんか。私もいろいろなお宅にお邪魔するが、これほどのものはそうそうお目にかかれませんか」

立ち上がり、手を伸ばして、ゼロ禅師は家の柱に触れたのです。お父さんの顔がほころびました。

「新築する際に奮発して、特によい材料を選んで立てた柱ですよ。なにしろ私と同じで、一家の大黒柱ですから。それをケチってはいけません」

「ええ、この柱ならやつも気に入ることでしょう。どうでしょう？ やつをこの柱の中に住まわせてやってもらえますまいか？」

この話に一番強く反対したのは、お母さんでした。家の中に妖怪を置くなど、やはり不安なのでしょう。

しかしゼロ禅師には考えがありました。

「ところで奥さん、キツネを住まわせている家は大きな金運に見舞われる、という話をご存知ですか？」

「なんですって？」

「住まわせてもらうお礼として、キツネがあなた方にくれるものですよ。家賃のようなものと思えばよろしい」

「本当に大金が得られるのですか？」

「実を言うと、このわしがあやかりたいぐらいでしてな。うちの寺もなかなか貧乏でして、いつも苦しい生活しております」

「そんなお寺のことなんかより、お金の話は本当なんですか？」

もう同意は得られたも同じでしょう。おなかの中で、ゼロ禅師はニヤリと笑うことができました。

だからゼロ禅師は言葉を続けようとしたのですが、ここで邪魔が入ったのです。

最初に目に付いたのは、ゼロ禅師の服が突然大きくふくらみ始めたことでした。まるで中に風船でも入っているかのように、どんどん大きくなってくるのです。

これにはみんなびっくりしてしまいました。

「これこれ、まだじゃ。気の早いやつじゃな」

ゼロ禅師も驚いた顔で、ふくらむ部分をトントんとたたこうとし

ました。だけどふくれ上がるペースはおとろえようとしません。

バリン。

音を立てて、とうとうゼロ禅師の服は破れてしまいました。その中から、いったい何が姿を現したと思います？

もちろん妖怪ギツネでした。ゼロ禅師の言いつけを守って体を小さくし、服の下に隠れて会話に耳をすませていたのでしょう。

だけどついに我慢できなくなり、出てきてしまったのです。

悪気があったわけではないでしょう。ただあの柱の中に住むことを認めてもらえそうな雰囲気だったからです。

キツネは空中に飛び出し、ジャンプしてヒラリと向きを変え、あつという間に柱の中へと消えてしまったではありませんか。

本当に一瞬の出来事でした。

全員が驚き、息もできない様子でしたが、最初に口を開いたのはゼロ禅師でした。

「キツネもこの柱を気に入ってくれたようで、何よりですな」

だけでももちろん、お母さんの関心は別のところにありました。

「それよりも金運はどうなりました？」

「それは楽しみにお待ちなさい。キツネも悪いようにはしないでし

よう」

ゼロ禪師はウソつきではなかったようです。

翌日、思いがけずお父さんは道でサイフを拾い、もちろん警察に届けたのですが、なんと中には50万円も入っていたのです。

落とし主はとても喜び、1割のお礼をくれたのでした。

この日から、お母さんは日課が一つ増えることになりました。妖怪ギツネの大好きな油揚げを店で買い、家の柱の前に置くことです。

小皿に乗せてお供えするのですが、ほんの5秒でも目を離そうものなら、もう皿は空になっているのです。

この家での生活がギツネも気に入ったようでした。その後は二度と悪さなどしなかったのは、いうまでもありません。

お母さんの正体

異変の始まりは、朝早くから『猫坂市』中の人々が知ることになりました。テレビやラジオのニュースがそれ一色になってしまったからです。

学校も会社もこの日はすべて閉鎖され、市民全員の避難が決定されました。

両親と一緒に、もちろんススムも避難する人々の列に加わったのです。

持ち出すことが許されたのはカバンが一つきりで、ほんの少しの着替えや貴重品のほかは、そのまま家に残しておかなくてはなりませんでした。

それほどの緊急事態だったのです。

いささか信じがたいことですが、この日の朝から猫坂の町全体が、何百匹もの妖怪たちによって占領されていました。

まるで図鑑から抜け出てきたようなさまざまな妖怪たちで、雪女や狼男、牛鬼といった正体のわかる物も中にはいましたが、名前も知らず、ススムでさえ見たことのない妖怪も多かったのです。

それらが突然、猫坂の町を満たし、人々を追い出しにかかったのです。

武器も持たない市民たちは、町から逃げ出すほかありませんでした。

た。混乱はありましたが、夕方までには全員が安全な場所へ移動を終えることができたのです。

ススムたちも、無事に市の境界線を越えることができました。これを超えると、さすがに妖怪たちの姿はなかったのです。

両親と共に、ススムも親戚の家に身を寄せることができました。

ほっとしたのでしょう。家族と顔を見合わせ、思わずススムはため息をついたのです。

そうやって3日間があっという間にすぎたのですが、猫坂市の状況に変化はありませんでした。人をまったく寄せ付けず、市内で何が起きているのかを知る方法はなかったのです。

両親に話すことも相談することもできないまま悩み続け、とうとうススムは決心しました。

靴をはいて、ススムは親戚の家の玄関を出たのです。

もう夜遅い時間でした。家族にはついさっき「おやすみ」を言ったばかりです。ススムが家の外にいることは、誰も知らないはずでした。

ここは田舎の大きな屋敷です。庭のはずれの暗がりにも身を隠すのは簡単なことでした。

ススムは、ポケットの中にある物を隠していました。ゼロ禪師から教えられたとおりに、今から使用するつもりなのです。

それは危険な仕事であり、ゼロ禅師がこの場にいれば、絶対に反対したことでしょう。

しかしこれほどの緊急事態なのです。自分の身に降りかかることなど、もうススムは気にしている余裕がないのでした。

ススムがポケットから取り出したのは、なんと鏡でした。

丸い形をし、化粧に使うコンパクトのように小さなものでしたが、フタを開き、ススムは呪文をとなえ始めたのです。

となえ終わると、ススムは鏡の表面に目をこらしました。そして待ったのです。

ススムは待ち続けました。

でも何も起こらないではありませんか。ゼロ禅師の話とはだいぶ違うようです。

こんなはずはないのになあ。

ススムは思わず首をかしげましたが、背後から突然声が聞こえてきたのは、そのときのことでした。

「ススム、こんなところで何をしているの？」

振り返るとお母さんがいました。いつの間にやってきたのかそこに立ち、ススムを見つめているのです。

「ああお母さん。僕はどうしても気になったんだよ」

「おまえが何を気にするというの？」

「もちろん禅師のことだよ。『この異変の原因を調べる』と言って猫坂へ戻ったきり、もう何日も連絡がないじゃないか」

「その小さな鏡は何なの？」

「これは魔鏡といって、禅師からもらったちよつと不思議な道具なんだ。この魔鏡を手にも、ある呪文をとなえろと…」

「どうなるというの？」

「鏡の魔力が、一番近くにいた妖怪を僕の目の前へ連れてきてくれるんだ。」

妖怪ってね、よく人間に化けて、何食わぬ顔で町の中で暮らしていたりするんだよ。こんな田舎の町にも、一匹ぐらいいるに違いないもん。

魔鏡が、それを目の前に呼んできてくれる。呼ばれた妖怪は、僕の頼みを一つだけ聞いてくれるんだ」

「だがススム、妖怪に頼みごとをしたなら、後で礼をしなくてはならないだろう？ 悪い妖怪であれば、『おまえの命をよこせ』と要求してくることだってあるだろうに」

「それはあとで考えることにしたんだよ。とにかく緊急事態なんだもん」

「それで妖怪はやってきたのかい？」

「それが変なんだ。呪文をと覚えてだいぶたつのに、まだ気配もない。僕は呪文を間違えているのかな？」

「いや、呪文は悪くならうよ」

「どうしてわかるの？」

「なぜってススム、現に私が、ここへ来ているではないか」

「お母さん？」

次の瞬間、とても恐ろしいことが起こったのです。お母さんはあつという間に姿を変え、なんと巨大な妖怪ギツネになってしまったではありませんか。

毛は長くフサフサとし、身のこなしはまるで猫のようです。ゆっくりと顔を近づけ、妖怪ギツネはススムの匂いをひとしきりかぎました。

「驚いたかい、ススム」

「あんたは僕のお母さんじゃないの？」

「お母さんさ」

「どうして？」

「私がおまえの家の柱に住むようになったいきさつを覚えているか

「？」

「うん」

「その後もおまえの母は、毎日欠かさず私に食べ物を与えてくれたのだよ。そしていつしか、柱の中にいる私に話しかけるようになった。私たちは友人になったのさ。」

そしてある日、おまえの母は私に告げたのだよ。自分がある恐ろしい病気にかかっているということを。治療法のない病気であることを。おまえの母の命は、あと数週間に限られていた」

「お母さんは、それをお父さんに話したの？」

「いや、私以外の誰にも話してはおらぬ。彼女は家族に心配をかけたくなかったのだ。悲しみを与えたくないかったのだ。そして私にある頼みごとをした」

「何を？」

「自分の死後、自分に代わって家の主婦となり、家族の世話をし、見守り続けることさ」

「お母さんは死んだの？」

これには言葉を返さず、キツネはただうなずいたのです。

「そんなの…」

「事実であるから仕方がない。母が埋葬された場所は私だけが知っ

ておる。時が来れば、おまえを案内してやろう」

「いつ？」

「今ではない。とにかく今は、妖怪の手から猫坂を解放しなくてはならぬ。そのためにおまえは私を呼んだのだろう？」

「お母さんが死んでしまったことや、あんと入れ替わっていることを禪師は知っているの？」

「いや、知らぬであろう」

「だけど…」

「そんなことよりも、猫坂の話をしよう。おまえは何がしたいのだ？」

「ええっと、とにかくまず事件の原因を探りたい」

「町全体が突然、妖怪に占領されてしまった原因だな」

「うん」

「やれやれ、これは面倒な仕事だぞ。しかしその鏡によって呼び出された以上、私はイヤとは言えぬ。よしススム、ついて来い」

「どうするの？ ええっと、あんたの名前は？」

「ふふふ、そんなことはどうでもよいではないか」

「だけどお母…」

「そうさ。おまえは私をお母さんと呼ぶクセをつけるがいい。おまえが大人になる日まで、家の主婦としての私の役目はまだまだ何年も続くのだ。」

他の人間のいる前で、私のことを『おキツネさん』などと呼んでみる。どんなトラブルの元になるか。

だからおまえは、私を母と呼び続けるのだ。よいな？」

「うんわかった。お母さん」

こうしてキツネとススムの冒険が始まったのです。ススムを背中に乗せ、キツネは風のように夜の町を駆けたのでした。

市の境界線を越えて猫坂市に入ると、とたんに妖怪たちが襲いかかってきましたが、キツネのすばやさには、まるでかきませんでした。

妖怪たちの間を、キツネはすり抜けていったのです。ススムは目を見張らないではいられませんでした。

「ねえお母さん、町を占領して、妖怪たちは一体何をしているの？何が目的なのかなあ」

「やつらは探し物をしているのさ。猫坂の町のどこかに貴重な3冊の本が隠されているという話を聞いたことはないか？」

「ううん」

「その3冊を手に入れば、大きな魔力が自分のものになるのだよ。妖怪たちは、それを目当てに集まっているのさ。町中を手当たり次第ひっくり返して探せば、いずれ発見できるだろうとね」

「それでお母さん、僕たちはどこへ行こうとしているの?」

「これだけの妖怪をどうやって一度に呼び出したのか、見当のつく気がするのね」

「どうして?」

「これは、誰かが『呼び出しの呪文』を用いた結果に違いがないからさ。その呪文の力で妖怪を呼び出し、目的の本を探させている」

「呪文?」

「町全体に影響をおよぼしているわけだから、犯人は猫坂で最も高い場所に呪文を書いたに違いない」

「もっとも高い場所って、ビルの屋上かな?」

「そういうことだろうな。ススム、猫坂で一番背の高いビルはどれだ?」

「あっ、わかった」

ススムと妖怪ギツネは地上を駆け続けました。目ざすのは猫坂で最も背の高い建物、『猫坂ステートビル』だったのです。

ついにステートビルが見えてきました。直線的な美しい姿で、月光を受けて輝いているのです。

ビルの姿をチラリと見上げましたが、キツネは足取りをゆるめることさえありませんでした。

「ススム、私は一つ気になることがあるのだよ」

「何さ？」

「誰が『呼び出しの呪文』を書いたにせよ、呪文のそばには護衛の妖怪を置いているはずだと思ってな」

「護衛って？」

「誰かが呪文を消しに来るかもしれないではないか。それを防ぐための護衛だよ。巨大で強力な妖怪に違いないね」

「まさかあ」

「まさかであるものか。ステートビルの中に入ったら、私たちは必ずその妖怪と会おうだろう。まず一筋縄ではいかん。作戦を考えておく必要がある」

そんなことを言われても、ススムは何も思いつくことができませんでした。

二人はそのまま、ステートビルの入口へ飛び込んでゆくことになったのです。

ビルの中はもちろんひとけがなく、暗くひっそりしていました。

ススムは不安そうにキョロキョロしていますが、キツネは平気な様子で、トントンと階段を上がってゆくのです。

ついに気持ちを抑えることができなくなり、ススムは懐中電灯のスイッチに手を触れようとしてしました。

「それはおやめ、ススム。敵に気づかれることになる」

「うん。ねえお母さん、お父さんやその他の人たちは本当に何も気づいていないの？」

「おまえの母と私が入れ替わっていることかい？　もちろんさ。私がそんなへまをするものか」

「だけどさ…」

「さあ静かにおし。もうすぐ屋上に着くよ。私たちがすることは一つだけだ。呪文の書かれた場所を探すこと」

「うん」

「さあ着いたぞ。この扉を開けると屋上だ。強い風が吹いているかもしれないから、気をおつけ」

屋上は暗いけれど、月があるので懐中電灯は必要ありませんでした。

「ところでススム、まさかあの道具をどこかに落としてきてはいま

いな？　ないと困るぞ」

「ペンキのこと？　ちゃんとあるよ。ほら」

ポケットから取り出して、ススムはカラカラと振って見せたのです。黒いペンキの入ったスプレー缶でした。これで呪文を塗りつぶしてしまおうというのです。

「お母さん、僕はそんなドジじゃないよ。いつだって…」

「お黙り。いま何か音がしたぞ」

「どこ？」

「右手の物陰。物置小屋のむこうだ。くそ、屋上というから平らで開けた場所かと思っていたが、ごちゃごちゃして何も見えんではないか」

「ねえ僕たち、二手に分かれて探したほうがよくない？　ここは相当広いよ」

「妖怪に襲われたらどうする？」

「そのときは悲鳴を上げるから、助けにきてよ」

「まあそれでよいか。だがよく気をつけるのだぞ。ケガなどされたら、おまえの母に顔向けができません…」

☆

町が平和に戻ったあと、ススムがゼロ禅師の寺をすぐに訪ねたのは、いうまでもありません。

元気な様子で、ゼロ禅師は迎えてくれました。異変のさなか猫坂に潜入し、成果を上げることはできなかったけれど、無傷で脱出することに成功していたのです。

ススムは、妖怪ギツネと共に経験した出来事について話し始めました。

「それでね禅師、妖怪ギツネと一緒にステートビルの屋上へ上がると、呪文はすぐに見つかったよ。僕が見つけたんだ」

「ちゃんとスプレーで塗り消したかい？」

「うん。塗りつぶすのも簡単だった」

「呪文を護衛する妖怪はいなかったのかな？」

「いたよ。ものすごいのが」

「大丈夫だったかい？」

「やっつけたのはあのキツネで、手分けして呪文を探していたから、戦いの様子を僕は見ていないけど、護衛していたのは、石のこん棒を持った鬼だった。ものすごく凶暴なやつ。」

「だけど変なんだ。キツネの言うには、うまくおびき寄せて足を滑らせるように仕向け、屋上のフェンスを突き破って地上へ落下させたんだって。」

ステートビルを離れるときに見たけど、確かに鬼は地上に落ちて死んだ」

「そのどこが変なのだい？」

「だって僕ははっきり覚えているんだよ。呪文を塗りつぶし終わって、キツネと合流したとき、僕は見回したんだ。屋上のフェンスはどこも壊れてなどいなかった。奇妙に思っ、キツネの目を盗んでひとまわりしたから間違いないよ」

「すると、鬼が地上へ落とされて死んだのは確かだが、足を滑らせてフェンスを突き破ったというのはウソだとススム君は思うのだね」

「そうだよ。あのキツネは、何かとんでもない魔力を使って、鬼を空中へ一気に放り出したのだと思う。」

ねえ禅師、あんなに大きな敵をいっぺんに投げ飛ばしてしまうよ
うな、そんな呪文が存在するの？」

この質問には、さすがのゼロ禅師も表情をくもらせてしまいました。
た。

「存在するとは思うがね。しかし、たかだか妖怪ギツネに使うこと
ができるような呪文ではなかろう」

「でしょう？」

「ああススム君、あのキツネについては、わしももっと慎重である
べきだったよ。ススム君の家に簡単に住まわせてしまったが、思っ

た以上に力のある妖怪なのかもしれない。これからは十分気をつけなくてはならないよ……」

とはいえ、町を襲った異変が、あの妖怪ギツネのおかげで終わりを告げたことも事実だったのです。そのことには、ススムもゼロ禅師も感謝を感じているのでした。

敵の出現

ある夜、お母さんと一緒に、ススムは暗い夜のとおりを歩いていました。

ちょっとした用事で出かけ、思いがけず帰りが遅くなってしまったのです。しかも家はまだ遠く、これからまず駅へ行って電車に乗らなくてはなりません。

突然お母さんが、小さく声を上げました。

「おや？」

「お母さん、どうしたの？」

「気のせいかな、あるいは見間違いだっただけ？ いや、そうではないぞ……」

「僕たちの背後に誰がいるの？」

「ススム、今は振り返らないほうがいい。やつの正体がわからん。気がついていないふりをして、もう少し歩き続けよう」

やがて二人の前方に、駅の明かりが近づいてきました。

ここへ達するまでに、あとをつけてくる人物について、お母さんはもう少し話してくれていました。

「ススム、ついてくるのは一人で、年頃の若い娘のように見える。」

遠すぎて顔かたちはわからないが、すでに数百メートルも私たちのあとをつけている。

曲がり角や物影を利用して、ここまではうまく身を隠してきたが、駅のホームに出ればそうはいかないだろう。その姿をよく見せてもらおうじゃないか」

キップを買い、ススムたちはホームに上がりました。青白い蛍光灯が一行に長く、並んで光っています。その下で、ススムははじめて彼女の姿を見るようになりました。

娘といっても、日本人ではありませんでした。きれいな白人だったのです。

髪は金色で、瞳の色に合わせた青いリボンでふんわりとめられています。顔を伏せながら、ススムはチラチラ眺めていました。

やがて電車がやってきました。

ところがどういことでしょう。女の子は乗車するそぶりを見せないのです。ススムとお母さんだけが乗り込み、電車はドアを閉めることになりました。

そして何事もなく発車したのです。

遠く小さくなってゆく女の子の姿を、ススムはガラス越しに見送っていました。

「ねえお母さん、あの女の子はどうして乗ってこなかったんだろうね。てっきり追いかけてくると思ったのに」

「私もそれが気になる。何かいやな予感がする」

お母さんの予感は正しかったのかもしれませんが。駅を離れて、まだいくらかも走っていないのに、電車が突然、奇妙な具合に変化を始めたではありませんか。

最初に声を上げたのはススムでした。

「お母さん、電車の床がやわらかくなった。ほら、足がもぐりこんじゃう」

「いやススム、床だけではない。壁も天井もみなそうだよ。やわらかくなり、ぬれて光っているではないか」

お母さんはあわててススムを立ち上がらせようとしたが、うまくいきませんでした。足を取られ、ススムは転んでしまったのです。

「お母さん、床はなんだかヌルヌルしてるよ。変な匂いもある」

「これは胃酸の匂いだ。くそ、私たちは妖怪の体内にいるようだ。ここは胃の中だよ」

「僕たちは妖怪に食べられちゃったの？」

「何がなんだか、私にもさっぱりわからん。ススムはこっちへおいで。今から呪文で、横腹に穴を開けてやる。妖怪め、覚悟するがいい」

「お母さん」

「さあススム、私の後ろに隠れておいで。ちょっと派手な呪文になるからね。目をつぶっておいでよ」

お母さんの言葉に従ったので、呪文の効果で何が起こり、妖怪の胃の中からどうやって抜け出すことができたのか、ススムにはよくわかりませんでした。

ただ妖怪が苦しそうに身をよじり、足元が大きく揺れるのが感じられ、でも気がついたときには、ススムは安全な地面の上にいたのです。

妖怪ギツネの姿に戻ったお母さんが、背中に乗せて運んでくれたのに違いありません。

ほっとして、ススムはあたりを見回すことができました。そして驚いたのは、もう電車の姿などどこにもなかったことです。

ススムの目の前には、何かが横たわっていました。

それはもちろん死んでいました。腹を引き裂かれた、見たこともないほど大きなタヌキだったではありませんか。

翌日、ススムはさっそくゼロ禅師の寺を訪ねました。昨夜の経験を話したのです。

興味深そうに、ゼロ禅師はうなずきました。

「つまりススム君、そのタヌキ妖怪が電車に化け、君をのみこんだ

ということだね。そして胃の中で消化しようとした」

「だけど運良く、僕は妖怪ギツネと一緒にだったんだよ。ほら、僕の家の柱の中に住んでいるでしょう？」

「その妖怪ギツネの呪文でなんとか脱出できたというわけだね。タヌキ妖怪が死んだあと、女の子の姿はなかったのかい？」

「うん、どこにもなかった」

「状況から考えて、その女の子がタヌキをあやつっていたと見て間違いない。その子には、その後二度と会っていないのだね？」

「だけどタヌキ妖怪の死体のそばで、僕は変なものを拾ったんだ。だから見てもらおうと持ってきた」

「ほほう、何かな？」

ススムはポケットから取り出して見せたのです。

目にしたとたんに言葉を失い、ゼロ禅師は驚きを隠すことができませんでした。本当に奇妙な物体だったのです。

とがった長いツメでした。驚くほど大きく、しかもグルリと曲がってカーブしています。何者かの指から折れて外れたものでしょうが、眺めているだけで、この世のものならぬ恐ろしさを感じるではありませんか。

「禅師、これは何のツメなの？」

「タヌキのツメではないのは確かだね。おそらく、ススム君の言っていた娘の物だろう」

「あの女の子がこんなツメを残していったの？　あの時近くにいなかったのに？」

「いやいたさ。家来のタヌキがうまくやるかどうか、近くへきて様子を見ていたのだろう。だから妖怪ギツネがタヌキの腹を破ったときに巻き込まれ、衝撃でツメを折ってしまったのさ」

「女の子の正体は何なの？」

「このツメはとても珍しいものだね。しかも重要な手がかりになる。ススム君がどういう敵を相手にしているのか、わしはわかってきたような気がするよ」

「本当？」

「ああ本当さ。このツメの持ち主が敵なのなら、対抗して作戦を立てることができる。ススム君、ちょっと耳を貸したまえ……」

お母さんの野望

こんな大きな船に乗るのははじめての経験なので、ススムは少し興奮していました。乗船してまもなく甲板の上で風に吹かれながら、お姉さんのミチコもこう言ったほどです。

「まあ、ちょっとした体育館ぐらいの広さがあるわね」

本当にその通りでした。これに乗って数日間の航海ができるなんて、ススムは幸せな気持ちでいっぱいだったのです。

ところがその幸せも長くは続きませんでした。出航して夕方になり、ススムたちは船内のレストランへと出かけたのです。

白い布のかかったテーブルがいくつも並んでいます。空いているテーブルへと案内されながら、ススムがさっと顔色を変えたことに気がついて、ミチコは首をかしげました。

「ススム、あそこのテーブルがどうかしたの？」

「お姉ちゃん、見ちゃだめだよ」

「どうしてよ？　ははあお母さん、ススムのやつ、あのテーブルのきれいなお嬢さんに興味があるらしいわよ。金髪の女の子が好きなのね」

「違うよ、お姉ちゃん。振り返って見ちゃだめだよ。あの娘がこの間、タヌキ妖怪を差し向けて、僕をひどい目にあわせた犯人なんだよ」

ミチコの表情が一瞬で凍り付いてしまったのは、いうまでもありません。

「あの人が？　へえそうなんだ。ちょっとおもしろそうね。お母さんたちはここにいてね。近くへ行って、私は偵察してくるわ」

なんと無謀なことか、止める間もなくミチコは立ち上がり、娘がいるテーブルへと向かって歩き始めたではありませんか。

ミチコがその次にとった行動は、ススムを驚かせるどころか、恐ろしささえ感じさせることになりました。

娘に連れはおらず、大きなテーブルに一人で座っていたので、イスは余っています。ミチコはそこに勝手に腰かけてしまったのです。

「ちょっとここをお借りしてもいいかしら？」

返事はせず、娘はじろりと目玉を上げただけでしたが、ミチコは言葉を続けました。

「自己紹介をするわね。私はミチコというのよ。あそこのテーブルで目をむいているのが弟のススムで、その隣はお母さん。仕事があって、お父さんはこの旅行には来られなかったのよ」

娘は答えました。

「私の名はラセツというのだよ。ススムのことは以前から知っている。ゼロ禪師と一緒にあって、私の仕事の邪魔をするいやなやつだ」

「あなたは何をしようとしているの？」

「それはおまえには関係ない。いま話さなくても、明日の夜明けまでにはイヤでも知ることになる。ごらん。ついさつき日が沈んだところだ。今夜は楽しい夜になるぞ」

言葉をかわすのをやめ、ミチコがこちらのテーブルに戻ってくるまで、ススムは生きた心地もしませんでした。ほんの何分間かに過ぎなかったのですが、ずいぶん長い時間に感じられたのです。

食事は早々に切り上げ、自分たちの船室へと戻ってから、ミチコは話し始めました。

ススムは目を丸くしていますが、お母さんは落ち着いています。

「つまりミチコ、今夜のうちに攻撃を仕かけるつもりであるとなぜツは宣言したのだね。しかもススムを襲うつもりでいる」

「どんな攻撃を仕かけるつもりなのかしら？ お母さん、船員たちに助けを求めなくてもいい？」

「どうやって？ 怖い娘が呪文をあやつるので助けてくださいとも言うの？ 誰も信じてはくれないわ。それはそうとミチコ、ちょっと私の目を見てごらん」

もちろんミチコは言われた通りにしました。そして、お母さんとなえる呪文をまともに食らってしまったのです。

そのままミチコは石のように眠り、床の上にボタンと倒れてしまったではありませんか。ススムが思わず叫んだのも無理はないでし

よう。

「あっお母さん、何をするのさ？」

「ちょっと呪文で眠らせたただけだ。心配はない。目を覚まして、今夜のことは何も覚えていないだろう」

「だけど…」

「ススムは私と一緒に甲板へおいで。ラセツを迎え撃つ準備をしよう」

どうしていいかわからず、ススムは言葉に従うしかありませんでした。夜の甲板は暗く、ひとけありません。お母さんはサツと妖怪ギツネに姿を変えました。

「さあススム、私の背にお乗り」

「うん」

いつもどおりに、お母さんはすぐに駆け出すかと思えました。ところがそうはいかなかったのです。

どこへ通じるものなのか、二人のすぐそばにはドアがあったのですが、大きな音と共にそれが突然破られ、敵が姿を見せたのです。

これにはススムもびっくりしてしまいました。

敵は体が大きく、頭をかめないとドアをぐり抜けることができせん。いかにも鬼族らしい牛に似た顔つきですが、一番の特徴

は、なんといつても目玉が3つあることでしょう。

しかも3つ目の目玉は、額の中央で宝石のように輝いているのでした。

ススムは叫びました。

「お母さん、こいつがラセツだよ。ほら、手の指のツメが一つ欠けてるもん」

すでにお母さんは全力で駆け始めていました。うなり声を上げ、もちろんラセツはあとを追ってくるのです。

しかしここは船の甲板です。いつまでも逃げ続けることができないほど広いわけではありません。何を思ったのか、お母さんは突然走る方向を変えたではありませんか。

「お母さん、何をするの？ そっちは海だよ」

ススムは思わず身構えましたが、心配はなかったのかもしれない。

なんとお母さんは大きくジャンプし、船べりを飛び越えてしまったのです。

お母さんは、なんでもない顔で波の上にストンと降り立ち、沈んでしまうどころか、そのまま水面を走り始めたではありませんか。

それは信じられないような眺めでした。

なんでもない土の地面と変わらないかのように、お母さんは駆け
ていたのです。足の裏がぬれることさえなかったに違いありません。

「お母さん、これはどうなってるの？」

「世の中にはさまざまな種類の呪文があり、私はそれを自由自在に
使いこなすということさ」

「へえ」

「ラセツはどうした？」

「あいつも船べりから海へ飛び込んだよ。泳いで追ってくる」

「やつは、私ほど高度な呪文は使えぬということか」

「あつ、ラセツの姿が見えなくなったよ。水中へもぐった」

足の力をゆるめ、やがてお母さんは立ち止まってしまいました。

「お母さん、なぜ立ち止まるの？」

「私は前を見張るから、おまえは後ろをよく見ているのだよ。ラセ
ツがいつどこから現れるかわからないぞ」

「やつは水中から来るの？」

「おそろくな。しっかりと見張るのだよ。不意打ちを食らうのはご
めんだ」

「うん」

そうやって何分かがすぎました。波のせいでススムとお母さんはゆらゆらと揺れ続けましたが、それ以外はいっこうに何も起こらないのです。とうとうススムは我慢できなくなってしまいました。

「ねえお母さん、もうあきらめて、ラセツはどこかへ行っちゃったんじゃないの？」

「いや、やつはまだ私たちの真下にいるさ。気配を殺し、水中からチャンスをうかがっているのさ」

「チャンスって？」

「私たちがしびれを切らし、注意力を失うのを待っているのだよ。ステートビルの呪文を消してしまったことで、私たちはやつのうらみを買っているからね。そう簡単に復讐をあきらめてくれるものか」

「じゃあどうするの？」

「いい子だから、私と一緒にこのままお待ち。見張りをおこたるのではないよ」

「うん、あっそうだお母さん」

「どうした？」

「僕は今、ちょっと思い出したことがあるんだ。ラセツのことだよ」

「どんなことだ？ やつの弱点でも見つけたか？」

「タヌキ妖怪をやっつけたとき、僕はツメの小さなカケラを発見したんだ。それについて禅師から教えてもらってたのを、きれいに忘れてた」

「ゼロ禅師は何と言った？」

「それはここでは言えないよ。水の中で、ラセツが聞き耳を立てているかもしれないでしょう？」

「ああ、やつは確かにそうしているだろうな。それでススム、私にどうしろと言うのだね？」

「もしもラセツが水面に現れたら、逃げたりせずに、逆にやつに近寄ってくれる？ やつの鼻先をすっと通り抜けて欲しいんだ。できるだけ近くをだよ」

「なんだか知らんが、危険なことをさせようというのだな。まあいい。一度だけならやってやろう。だが二度は無理だ。ラセツもバカではないから、2回も出し抜くことは不可能だぞ」

「うん、一回で十分だよ」

海の上に立ち、ススムたちはさらに待ち続けました。

そしてついに、ラセツが行動を見せたのです。ススムたちからは少し離れた場所でしたが、突然波が割れ、水音と共に姿を現したではありませんか。

お母さんのように水面を歩く力はラセツにはありません。しかし

強い腕力で、イルカのように水面に飛び上がることができるのです。

水しぶきを飛ばし、サメのようにススムたちに飛びかかろうというのでしょうか。

このチャンスをお母さんが見逃すはずはありませんでした。ススムの言った通りに、ラセツへ向けてバネのように駆け出したのです。

両者の距離は、あっという間に縮まることになりました。お母さんが飛び込んでくるなど予想もしていなかったのでしょうか。ラセツは驚いている様子です。

それでも呆然とするようなことはなく、腕を伸ばして、ススムたちにつかみかかってくるのでした。

距離はもう何メートルもありません。ススムはこの瞬間を待っていたのです。

ススムの右手はポケットの中にあり、ある物をしっかりとつかんでいました。

ラセツへと向かってススムがそれを投げつけたとき、あまりの意外さにお母さんも目を丸くしたものでしたが、警戒心をゆるめることはありませんでした。

ススムと約束したとおり、ラセツの鼻先をかすめ、お母さんはさっと通り抜けたのです。

ラセツめがけてススムが投げつけたのは、なんと豆でした。

本当に大した物ではありません。どこにでもあるただの大豆だったのです。しかもたった20粒かそこらでしかありません。

妖怪世界の不思議の一つですが、鬼一族はみな豆が苦手だったのです。神話時代にまでさかのぼる話なので、理由は誰も知りません。

タヌキ妖怪のそばに残されていたツメの形から、敵の正体が鬼であることをゼロ禅師は探りだし、ススムに命じて大豆を一つかみ、いつでもポケットの中に入れておくように言ったのです。それが役に立ったわけでした。

ギャーッとラセツの叫び声が海の上に響きました。大嫌いな大豆というだけでなく、目の中にまで入ってしまったのです。

特に額の中央にある第3の目の痛みが激しかったようです。両手で顔をおおい、そのままラセツは海中へ倒れこんでゆきました。

水中に沈み、その姿は見えなくなりましたが、痛みと苦痛は続いていたに違いありません。身をのた打ち回らせるせいで、海面はまるで嵐のように波打っているではありませんか。

その後、ラセツが姿を見せることはもうありませんでした。やがて波は静かになってしまったのです。

ススムはおそろおそろ口を開きました。

「お母さん、ラセツは死んだと思う？」

「まさか死にはすまいよ。重要な第3の目をやられたので、一時的に逃げただけさ。またいつか戻ってくるだろう」

ススムがある方向を指さしたのは、このときのことでした。

「あれお母さん、あそこに何か浮いているよ」

ススムの指を追って目をこらしましたが、お母さんの表情の変化はとても急で、ススムは驚きを感じるほどでした。

「ススム、あれをお拾い。さあ今すぐお拾い。早く」

その物体が浮いている場所へと向かって、お母さんはすでに駆け出しています。いかにもあせているふうにお母さんがそばに立ち止まると、手を伸ばしてススムは拾い上げることができました。

それは一冊の本でした。お母さんの目の色がさらに変わったのは、いうまでもありません。

ススムの手には、そのずっしりとした重さが感じられました。表紙が革でできた本当に立派な本だったのです。

お母さんの声は少し震えています。

「ラセツめ、1冊目を手に入れていたのだな。ススム、表紙を開いてごらん」

ススムはその通りにしました。

本の中身はもちろん白紙ではなく、小さな文字がびっしりと書き込まれていました。

何ページめくっても、やはり同じでした。そしてススムは、妖怪たちが呪文を書くのに用いる文字と似ていることに気がついたのです。

「お母さん、これには何が書いてあるの？」

「おまえには関係のない内容さ。この本は私がもらっておこう」

「禅師にも見せようよ」

「人間なんぞにこれを読むことができるものか」

「でも禅師はいろいろ勉強しているから…」

「お黙り。私はこの本を誰にも渡すつもりはない。それともススム、おまえは力ずくで取り上げようというのかい？」

「だけど…」

「さあいい子におなり。いい子になって、今から10秒間だけ目を閉じていなさい。何も見てはいけないよ。そう、それでいい」

ススムはお母さんの言葉に従うしかありませんでした。そうやって目を閉じている間にお母さんが何をしたのか、知る方法はなかったのです。

ただ手の中から本が持ち上げられる気配があり、目を開くともうどこにもなかった。それが、ススムに感じることできたすべてでした。

ススムとお母さんは船に戻り、ミチコの呪文をといてやり、そのあとは何事もなく航海が続いたのです。

毛皮が消えた

学校から帰ってきて、自分の部屋の中に入るなり、ミチコは呆然としてしまいました。なんだか見慣れない物が、床の上に大きく広がってあるではありませんか。

どう見てもキツネの毛皮です。

こんなものが家にあるなんて、ミチコは聞いたこともありませんでした。誰が、何のために持ち込んだのでしょうか。

「これはいったい何に使うものなのかしら？」

ミチコの心の中で好奇心が頭をもたげました。手を伸ばし、震える指先でそっと触れてみたのです。

ススムが家に帰ってきたのは、ミチコよりも少し後のことでした。階段を登って自分の部屋へ行き、ススムも目を丸くすることになりました。自分の部屋の中に、妖怪ギツネの姿を見つけたのです。

「あれお母さん、僕の部屋で何をしているの？」

キツネは振り返り、口を開きました。

「ススムなの？」

「お母さん、お姉ちゃんはまだ帰ってないの？ もう帰ってくる時間だから、早く変身しないとまずいことになるよ」

「いったい私が何に変身するというの？」

「何言ってるの？ 元の人間のお母さんの姿にだよ。自分の母親が妖怪ギツネと入れ替わっていることを、お姉ちゃんは知らないんだよ。忘れたの？」

「いいえ、忘れてはいないわ…。そうだススム、郵便受けを見てきてくれないかしら？ 私は見るのを忘れていたのよ」

「郵便受けなんて、お姉ちゃんがいつも見てくれるじゃないか」

「いいえ、今すぐ行ってきなさい」

キツネの口調は思わぬ強さでした。首をかしげながらも、ススムは従ったのです。

郵便受けから二階へ戻ってきて、ススムはキョロキョロとまわりを見回すことになりました。キツネの姿がなかったからです。

ススムは首をかしげたのですが、思いがけない声が突然部屋の中に響き、びっくりして飛び上がることになりました。

「おい、ススム」

声は確かにそう聞こえたのです。

「だれ？ どこにいるの？」

キョロキョロしながらグルリと振り返り、やっとススムは相手の

姿を見つけることができました。

いつの間にどうやって入ってきたのか、なんとフクロウがいるのです。洋服のボタンのように大きな丸い目をして、こちらを見つめているではありませんか。

ススムは不思議そうな顔をしました。

「今のはあんたがしゃべったの？」

「当たり前じゃないか。フクロウにだってちゃんと口があるんだぜ。ところでススム、オレはおまえに伝言を伝えにきたのだよ」

「伝言？ 誰から？」

「オレの偉大なお師匠様からさ」

「お師匠様って？」

「お師匠様とはこの家に住み、おまえの母親に化けている方のことだ。オレはその弟子なのさ」

「何を習う弟子なの？」

「魔力やら変身術やら、宇宙の秘密やらいろいろさ」

「ふうん」

「ではおまえに、偉大なお師匠様の伝言を伝える。お師匠様はおっしゃった。」

『ススムよ、家へ帰るのが予定よりも遅れる。すまないが、ミチコの部屋に干してあるキツネの毛皮を片付け、押入れの中に隠しておいてくれ』」

ススムは、首をかしげないではいられませんでした。

「キツネの毛皮って？」

「今日はいいい天気なので、脱いで部屋の中に広げ、干しておられたそう。学校から帰ってくるミチコに見られる前に、それを片付けておいて欲しいということさ」

「お姉ちゃんの部屋？」

廊下を後戻りし、ドアを開けてススムはのぞき込んだのです。

「ほらね。お姉ちゃんの部屋は空っぽだよ。キツネの毛皮なんてないよ」

「おや本当だ。ススム、おまえが帰ってきたとき、すでに毛皮はなかったのか？」

「このドアが開いていたから、部屋の中はよく見えたけど、何もなかったよ。そのとき、お母さんは家の中にちゃんと言ったよ」

「そんなはずはない。お師匠様は、朝からずっと家を留守にしていたはずだ」

「そんなことないよ。僕はついさっきお母さんに会ったもん。その

あと郵便受けを見にいった、2階に戻ってきたら、あんたがいたんだよ」

「オレはお師匠様には会っておらぬぞ」

「じゃあ入れ違いになったんだね」

「いや、お師匠様がお帰りになったはずはない。外で大切な用事をしておられるのだ。途中でちょっと抜け出すなど不可能な用事だ。

なあススム、これは大事件かもしれないぞ。何かの理由で、ミチコがおまえよりも早く学校から帰ってきたということは考えられぬか？」

「まさかあ」

でもそれを確かめるのは簡単なことでした。ミチコの学校カバンを探せばいいのです。

それが部屋のすみに落ちているのを見つけたとき、ススムとフクロウは顔を見合わせないではいられませんでした。

「ねえフクロウさん、これはどういうことだと思う？」

「おまえには想像がつかぬか？ これは本当に困った事態だぞ。ミチコは普段よりも早く学校から帰宅し、お師匠様が脱いでおいた毛皮を見つけたのだ」

「その毛皮って何なの？」

「なあススム、まさかおまえは、あのキツネの姿がお師匠様の正体であると思っているのではあるまい？」

「えっ違うの？ 僕はてっきり…」

「お師匠様の正体がキツネなどであるものか。毛皮を着て、お師匠様は妖怪ギツネに化けているだけなのだよ」

「どうして？」

「そのほうが、人間たちの目をごまかしやすいからさ。妖怪ギツネなど、猫坂では珍しくないからな。ゼロ禅師の目をあざむくのに、お師匠様も苦勞しているのだ」

「なぜ禅師をだます必要があるの？」

「今はそんなことを話している暇はない。学校から早く帰宅し、ミチコは毛皮を見つけたのだろう。そしてほんの好奇心からかもしれないが、毛皮を自分で着てしまったのだ。」

つまり今は、ミチコが妖怪ギツネの姿をしているわけだ。さっきおまえがしゃべったというキツネはお師匠様ではなく、ミチコだったのに違いないぜ」

「そんなまさか…」

「そうとしか考えられぬではないか。おまえが郵便受けを見にいつている間に、ミチコはどこかへ行ってしまったのだよ」

「どうして？」

「すでにミチコは、ミチコではなくなっていたからさ。あれは普通の毛皮ではない。魔力に満ちたとても不思議なものだ。」

お師匠様のような方なら、問題なく着こなすことができる。しかしただの人間に過ぎないミチコが着たときには…」

「どうなるの？」

「ミチコは逆に、毛皮によって支配されてしまったということさ。ミチコはこの指輪をはめていなかったからな」

そういつてフクロウは、翼の下から器用に何かを引っ張り出したではありませんか。

ススムが目をこらすと、確かに指輪でした。こういう材質なのか、サンゴのような赤い色にぶく光っているのです。

「それは何をする指輪なの？」

「これを指にはめてさえいれば、普通の人間でもあの毛皮を着て自由に動くことができ、毛皮から支配されたり、乗っ取られたりすることがないのさ」

「じゃあお姉ちゃんは？」

「今も言っただろう？ あの毛皮に乗っ取られ、取り付かれてしまったのだ。自分がいま何をしているのかもわかっていないだろう」

「お姉ちゃんはどこへ行ったの？」

「見当はついているさ。とにかくススム、おまえはこの指輪をはめてみる」

「うん」

よくわからないまま、ススムはフクロウの言葉に従ったのです。まるであつらえた物のように、指輪は彼の指にぴったりと納まりました。

フクロウは満足そうです。

「よし、それでいい。ススム、おまえはミチコが生まれた場所を知っているか？」

「猫坂市民病院だよ。僕も同じところで生まれたもん」

「その病院は今でもあるのか？」

「うん」

「町の地図を持ってこい。その病院の場所を確かめたいのだ」

さっそく1階へ降りてゆき、お父さんの部屋からススムは地図を持ち出したのです。それを手に再び階段を上がり、自分の部屋の中をのぞきこんだとき、ススムは目を丸くすることになりました。

部屋の中央に、巨大なキツネの毛皮が置かれていたのです。

でもこの毛皮が、お母さんのものではないことは明らかでした。

色がまったく違っていたからです。

これは黒に近い暗い銀色をしていました。でも光をはね返し、ところどころまぶしく輝いてもいるのです。

ススムは思わず声を上げました。

「これは何？　なんだかとてもきれいな物だね」

パチリとウインクをし、フクロウは答えてくれました。

「気に入ってよかったよ。これからおまえはこれを着て、ミチコのあとを追いかけてゆくんだから」

「僕が？　どうして？」

「他に行く者はおるまい？　だが心配するな。おまえはその赤い指輪をしているし、ミチコの行き先はわかっている」

「どこ？」

「猫坂市民病院さ。さあ地図を見せろ。ははあ、ここか。おまえは運がいいな」

「どうして？」

「下水道の中をはっていかずにすむからさ。こんな昼間の明るい時間に、この毛皮を着て町の通りを歩くわけにはいかんだろう？」

「それはそうだけど」

「地図を見ろ。この家から病院まで、ずっと川沿いに川原を歩いてゆくことができるじゃないか」

「川原にも人はいるよ」

「人の目にとまるのは、ある程度は仕方がないさ。おまえは病院へ先回りして、ミチコを待つんだ」

「もしもお姉ちゃんが先に病院に着いていたら？」

「それはありえない。あのキツネは町の地図など持っておるまい？
いいかススム、あの毛皮はミチコではなく、もはやただの妖怪ギツネだということを忘れるな」

「でもやつが病院へ向かうと、どうしてわかるの？」

「それは魔力の秘密に関することだ。やつはミチコが生まれた場所へ行き、ある呪文をとえようとしている。そうすると…」

「どうなるの？」

「ただの毛皮ではなく、やつは一匹の妖怪ギツネとして完全に復活することができる」

「生き返るの？」

「だがそのときには、ミチコは死んでしまうのだぞ」

「まさか」

「まさかではない。さあ早く行け。ミチコの命がかかっているのだ。オレはお師匠様に連絡して、手助けをお願いしてみよう。」

おまえは病院へ行き、やつが呪文をとなえるのをなんとしても邪魔するのだ。さあ行け。無駄にしている時間は1秒もないのだぞ」

素晴らしい終わったかと思うと羽音を響かせ、フクロウはあつという間に窓の外へと見えなくなっていました。ススムは一人になってしまったのです。

でもグズグズしている暇はありません。心を決め、毛皮に手をかけました。

毛皮を着る方法について、フクロウは何も説明してくれませんでした。しかし心配は要らなかったのかもしれない。さっと持ち上げて肩にかけるだけで、毛皮のほうから勝手に動き、ススムの体をすっぽりと包み込んでくれたのです。

あつという間にススムの姿は、一匹の妖怪ギツネへと変わったのでした。

これで準備は整いました。大きく息を吸い、ススムは窓の外へと体を投げ出したのです。

あとは4本の足に任せ、病院を目指して駆けてゆくだけでした。

毛皮の魔力に、ススムはただ驚きを感じるばかりでした。まるで本物の野生動物のように、すばやく力強く行動することができたのです。

体の大きさゆえ、目撃した通行人を何人か、もう少しで気絶させてしまうところでしたが、それ以外はスムーズにススムは病院へやってくる事ができました。

太陽はもう沈みかけています。塀を乗り越え、ススムは簡単に敷地へ足を踏み入れることができました。

ところがここで、ちょっとした驚きが待っていたのです。病院には人影一つなく、もうそろそろ灯っていいはずの明かりさえ一つもなく、建物の窓はすべて真っ暗なままではありませんか。

これではまるで廃墟のような眺めです。

いったんは首をかしげましたが、ススムはすぐに納得する事ができました。建物が古くなったので、病院を改築することが決まったというニュースを思い出したのです。

そのためにみな退去したあとなのでしょう。あと数日で工事が始まるに違いありません。

グズグズしている暇はないのです。ガラスの割れている窓を見つけ、ススムは建物の中へと入ってゆきました。

内部は暗く、薄気味悪く感じないではいられませんでした。ベッドや診察器具はすべて運び出され、どの部屋もガランとしています。

分厚い毛皮の中にいるのに、ススムは思わず体を震わせてしまいました。でも気味悪がってばかりもいられません。

「お姉ちゃんが生まれた場所といえば、やはり分娩室かな？」

ススムは、院内の案内看板を見つけることができました。

「なんとまあ、分娩室は地下にあるのか」

これはあまりうれしい話ではありませんでした。地上の階ですらすでに暗いのです。地下など、鼻をつままれてもわからないほどでしょう。

だけど心を決め、ススムは階段を降りていったのです。

地階にはすぐに着くことができました。しかし階段が終わり、最初の曲がり角を曲がろうとしたところで、とうとうススムは立ち止まってしまいました。

ここから先はもう町の明かりも届かず、インクでも流したような闇が広がっているのです。目をこらしても何をして、もはや何一つ見ることができないのです。

「どうしよう」

前進しなくてはならないとは思いますが、どうしても足が前へ出てくれません。ススムの前足は、何回か足踏みを繰り返すことになりました。

「おいススム」

暗闇の中から突然声が聞こえてきたのは、そのときのことだったのです。

「ひいっ」

ススムは思わず悲鳴を上げました。背中の毛まで一本残らず逆立ってしまいました。

だけど謎の声がやむことはなかったのです。なんと声は、いかにもおかしそうに笑い始めたではありませんか。

「ふふふ。ススムよ、おまえはなんと臆病なのだ」

その声に聞き覚えがあることに、ススムはやっと気がつきました。

「お母さんなの？」

「もちろんそうさ」

暗闇の中に足音が聞こえ、肩に手が置かれるのをススムは感じました。

「お母さん、もう来てたの？　僕はもう少しかかるのかと思ってた」

「ミチコの命がかかっているのだ。フクロウから知らされ、飛んできたのさ」

「やつはどこで呪文をとなえと思う？」

「分娩室のある地階であることは間違いない。この廊下の先は少し広くなっていて、そこならやつにも広々として便利だろう」

「暗闇の中でも、お母さんは物を見ることができるの？」

「もちろんできるさ。妖怪はみなそうだよ」

「お母さんも妖怪なの？」

「当たり前さ。人間だとも思っていたのかい？」

「それはそうだけど…」

しかしススムは、最後まで言葉を続けることができませんでした。お母さんの手が伸びてきて、突然口をふさがれてしまったのです。

「静かにoshi。上の階で何か物音がしたぞ」

ススムの体をまるで電気のように緊張が走り、今度は背中どころか、体中の毛が逆立ってしまったのは、いうまでもありません。

だけどもあることに気づき、ススムはお母さんにささやいたのです。

「あれは妖怪ギツネじゃないよ。かすかに光が見えるもん。きっと懐中電灯だよ。禅師が来てくれたのかもしれないよ」

「ここにゼロ禅師が来るものか。私は知らせてなどいない」

そのころにはススムも、状況のおかしさに気がつきはじめていました。階段の上から差し込む光は懐中電灯とは違い、なんだか緑色がかっているのです。いかにも不自然な感じではありませんか。

自分の背中にお母さんがまたがるのをススムは感じました。お母

さんがささやきました。

「これはまずいぞ。思ったよりも魔力の強いキツネのようだ。尾をあんなに光らせているではないか」

やがて角を曲がり、妖怪ギツネが姿を見せました。お母さんの言うとおり、長いしっぽをまるで蛍光灯のように光らせているのです。

こんな光景は、ススムは話に聞いたこともありませんでした。本当に不気味な眺めです。まるでこの世のものとは思えません。

「お母さん、どうするの？」

「やつをまず、どこかへ誘い出すほかあるまい」

「どうやって？」

「おまえが何かして、やつを怒らせればいい。あの目をごらん。ランランと輝いているではないか。いかにも短気そうだ」

「僕、そんなことできないよ」

「ええい困った子だ。そこに落ちている古いバケツをおよこし」

ススムはその通りにし、お母さんはバケツを受け取りました。

「お母さん、そんなものをどうするの？」

「決まっているさ」

なんとお母さんは、バケツを妖怪ギツネめがけて投げつけたではありませんか。

ススムは悲鳴を上げそうになりました。バケツは妖怪ギツネの鼻に命中したのです。

青白かった妖怪ギツネのしっぽの輝きが、あっという間に焼けた鉄のように赤く変わり、ススムをさらに驚かせることになりました。

「それススム、ぼやぼやしているとかみつかれるぞ」

お母さんを背中に乗せたまま、地上へと続く階段にススムはとっさに飛び込んだのですが、妖怪ギツネが駆け出すのももちろん同時だったのです。お母さんの声がススムの耳に届きました。

「ススム、やつを屋上へ誘い出すのだよ」

「誘い出して、どうするの？」

「私の得意技を使う。やつを地上へ投げ落としてやるさ」

「そんなことをして大丈夫？ お姉ちゃんが死んじゃわない？」

「そのくらい加減はするさ。妖怪ギツネの毛皮はとても頑丈なものだ。ちょっとやそつとのことでケガなどしない」

「ああお母さん、屋上へ続くドアが見えてきたよ。あのドアにもしも鍵がかかっていたらどうするの？」

「どうもしないさ」

お母さんは自信に満ちた様子です。手にしていた魔力の杖をお母さんは大きく振りました。

魔力は空中を伝わっていき、ドアを簡単に吹き飛ばしてしまったではありませんか。ススムは足をゆるめる必要さえありませんでした。

妖怪ギツネの鼻先をかすめるようにして、二人は屋上へおどり出ることができたのです。

もちろん妖怪ギツネもすぐ追いついてきます。

お母さんの指示で、ススムは屋上のすみに位置を取り、妖怪ギツネを迎え撃つことになりました。

妖怪ギツネはさっきよりもさらに強くしっぽを光らせ、目玉もギラギラ輝いています。背中の毛はすべて逆立っていますが、4本の足はしっかりと床をつかんでいるのです。

いつ床をけて飛びかかってくるかと、ススムは生きた心地もしませんでした。

ところがお母さんは落ち着いているのです。戦いを楽しんでいるのかもしれない。

「ススム、昔の騎士は、こうやって1対1で決闘をしたものだよ。馬に乗って長いヤリを突き出し、互いに突撃するのだ」

「お母さん、僕は馬じゃないよ」

「雰囲気を壊すようなことを言うものではないよ。せつかく私は騎士の気分でいたのに、情けないやつだ」

「あの妖怪ギツネの内側にはお姉ちゃんがいるんだよ。忘れちゃったの？」

「忘れるものか。しかし騎士同士の決闘とは、それはそれは勇壮なものだったのだぞ」

「お母さん…」

ススムは口を開きかけたのですが、続きを言うことはできませんでした。床をけり、とうとう妖怪ギツネが突っ込んできたからです。

ところが勝負は、あっけなくついてしまいました。

妖怪ギツネが駆け出すのと同時に、お母さんの指示で、相手めがけてススムも駆け出したのはいいのですが、怖くなって、なんと途中で立ち止まってしまったではありませんか。

おかげでお母さんは、相手までまだまだ距離があるのに魔力の杖を振るう羽目になりました。

だけど魔力に距離は関係ありません。

杖を離れて魔力は妖怪ギツネへと飛びかかり、あっという間に持ち上げ、屋上のへりを越えて、地上へと投げ落としてしまったのです。

妖怪ギツネの上げる長い悲鳴が、ススムの耳に届くことになりました。樹木にでもぶつかったのでしょうか。バリンと大きな音も聞こえてきました。

ススムがあわてて屋上のへりへ駆け寄ったのは、いうまでもありません。

地上では大きな木が一本、見事にへし折られていました。そのわきに妖怪ギツネが転がっているのを見ることができます。

でもピクリとも動きません。しっぽも光を失い、ダラリとしたままです。

落下の衝撃で破れたらしく、毛皮のおながが裂け、ミチコの姿が見えています。

ミチコはケガをしているようには見えず、ほっと息をつきかけたのですが、不意に聞こえてきたキンキン声に驚き、ススムはあわてて振り返ることになりました。

そこには、またあのフクロウがいたではありませんか。

「やあススム、ご苦労だったな」

自分の背中の上にもはやお母さんがいないことに、ススムは突然気がつきました。

「あれ、お母さんは？」

「お師匠様か？ とっくにお帰りになったわい。お忙しい方なので

な。おまえももう家へ帰ってよろしい」

「お姉ちゃんはどするの？ 毛皮は？」

「後始末はオレがしてやるよ。ミチコを家へ連れて帰るぐらいの魔力なら、オレだって持っているさ」

「へえ」

こうやって今回の冒険は終わったのです。毛皮を脱いで病院を抜け出し、バスに乗ってススムは家へと急ぎました。

家に帰るとミチコがすでにいたというのは、驚くべきことではないかもしれませんが。自分の部屋でイスに腰かけ、うたた寝をしている姿を見つけることができました。

ススムの足音でミチコは目を覚ましたのですが、彼女が本当に何も覚えていないらしいことは、二言三言かわすだけですぐに確かめることができたのです。

台所へ降りてゆくと、お母さんの姿を見つけることもできました。ちようど夕食のしたくを終えようとしているところでした。

ススムと目が合うとお母さんは口を開きかけましたが、そこへミチコが顔を見せたので、先ほどの冒険について語るのはあきらめるしかありませんでした。

でも今夜のおかずにはススムの大好物を選んでいることから、お母さんの感謝は十分に感じ取ることができたのです。

2冊目の本

普段の年であれば、猫坂の町にはあまり雪が降りません。

でもあの冬は違っていたのです。まだ12月も終わらないというのに、すでにひざの深さにまで達していました。

ススムの家は問題なかったのですが、古ぼけたゼロ禅師の寺は大丈夫だろうか、雪の重みでつぶされていないだろうかと突然気になって、ススムは出かけたのです。

だけど寺はしっかりと立っていました。

ゼロ禅師は歓迎してくれたのですが、そのとき訪れていたお客さんの姿が、ススムをひどく驚かせることになったのです。

ジェームスという人はアメリカ人でしたが、何十年も前に日本に帰化し、最後は猫坂の市長にまでなったことはススムも知っていました。

部屋の中でゼロ禅師と話していたのが、このジェームスの幽霊だったのです。ピンク色のとがった鼻や白い口ひげには、ススムも見覚えがありました。

ゼロ禅師とジェームスの会話は、ちょうど終わるところだったようです。

「では禅師、勝手に申し訳ないが、この件についてはくれぐれもよろしく願います」

「ええ、ジェームスさん。わしもできるだけ努力してみましよう」

その言葉にうなずきながら、ジェームスの幽霊はゆっくりと消えていったのでした。

ほっと息をつき、ススムは口を開くことができました。になりました。

「禪師、今は元市長のジェームスさんだよね」

「そうだよ。しかし大変なことを頼まれてしまったな」

「どうして？」

「気象台の予想では、この雪はこれからも降り続け、毎日数センチずつ積もってゆくそうだよ」

「今だって、もうかなり積もっているもんね」

「いまに猫坂の町は、完全に雪の下に埋もれてしまうだろう」

「それとジェームスさんが関係あるの？」

「そうらしい。ジェームスさんによると…」

ゼロ禪師は説明を始めました。

家へ帰ってから、お母さんの予想外の頑固さに、ススムは当惑することになりました。ゼロ禪師からの相談をさっそく持ちかけたの

ですが、まるで聞く耳を持たないのです。

「でもねえ、お母さん…」

「お黙りススム、私はゼロ禅師が苦手なのだ。協力する気などないぞ」

「だけとお母さん、このままでは猫坂の町は、あと一週間で雪の下に完全に埋もれちゃうんだよ」

「それがどうした？」

「お母さんは、そんなに禅師が嫌いなの？」

「ああ嫌いだね。私の口の中にワサビを入れさせたのは、あいつではないか」

「でもさあ…」

「ああうるさい。とにかくお黙り」

クルリと背中を向けて、お母さんは自分の部屋の中へと消え、ドアをピシヤリと閉めてしまいました。

もちろんその後も雪は降り続いたのです。会社や商店までが次々に閉じられ、市民の生活は不便さを増してゆきました。

日々の食べ物の入手にも困るようになり、しぶしぶながら、とうとうお母さんも承知してくれたのでした。

「だがススム、私はゼロ禪師と行動を共にする気はないぞ」

「だけど魔力エンジンの停止方法は禪師しか知らないんだよ」

「禪師の代わりに、おまえが私についておいで。エンジンの操作方は、おまえが禪師から習えばよい」

他に方法はありませんでした。雪をかき分けて、ススムは寺へと急いだのです。

こういう事態を予想していたのかもしれませんが。ススムの口から事情を聞かされても、ゼロ禪師は驚いた顔を見せませんでした。すぐに紙とペンをとり、機械の停止方法を説明してくれたのです。

古来から、猫坂は魔力の強い町でした。

魔力研究所とはもう何十年も昔、ジェームスが市長だった時代に作られたものでした。魔力エネルギーを人類の生活に役立てる研究を行っていたのです。魔力エンジンと呼ばれる装置を開発しようとしていました。

この研究所は、猫坂の地下深くにありました。そのほうが研究に都合がよかったのです。

でもおかげでススムとお母さんは、長い長いトンネルを歩いていたかなくてはなりませんでした。さっそくお母さんが不満を口にしたのは、いうまでもありません。

「ススム、まだ着かないのか？ 私は足が疲れてしまったぞ」

「文句言わないでね。僕だって歩いてるんだから。ねえお母さん、気のせいかな？　なんだか暑くなってきたんじゃない？」

「気のせいではなからうよ。魔力エンジンとは、まわりの魔力を一ヶ所に集める装置なのだろう？　魔力が集まる場所には、自然と熱も集まる性質がある。」

だから逆に町の上空には寒気が集まり、あのような大雪になってしまったのだよ」

「へえ」

二人は歩き続けましたが、トンネルの温度はゆっくり上昇を続け、とうとうススムは上着を脱がなくてはならなくなりました。

「お母さんは暑くないの？」

「この毛皮を着ているかぎり、少々暑さは平気さ。考えてみれば、まわりの温度に敏感な人間とは不便な生物だな」

二人はトンネルを進み続けました。

お母さんと一緒に歩くことに、ススムは不安を感じませんでした。お母さんはとても強く、魔力の使い手でもあるのです。お母さんを打ち負かすことができる者など、そうそう存在するとは思えません。

ところがお母さんにも弱点があったのです。数分後、ススムは驚きを隠すことができなくなりました。

突然お母さんが立ち止まってしまったのです。

「お母さん、どうしたの？」

お母さんは苦しそうに答えました。

「ああススム、私はこれ以上前へは進めなくなった」

「どうして？」

「トンネルの中がさらに暑くなったことに気がついただろう？ 魔力エンジンが、猫坂中の魔力を吸い集めているからだ」 魔

「そのスイッチを切りに僕たちは行くんだよ」

「だが私は、これ以上一步も前へ進むことができない。周囲の魔力が強すぎ、体にまとわりついて、苦しくてたまらないだよ。今にも気を失ってしまいそうだ」

「お母さん！」

「これ以上前進しなければ、気を失うことまではないだろう。この先はススム、おまえが一人で行くしかないね」

「えっ？」

思いがけないことでしたが、お母さんの言うとおりにするほかないようでした。しぶしぶススムは首を縦に振ったのです。

「だけとお母さん、この先は僕一人で大丈夫かなあ」

トンネルの中に、ススムの声が不安そうに響きます。お母さんはとうとう腹ばいになってしまいました。

「お母さん」

「私なら心配いらない。おまえが戻ってくるまで、ここで休んでいることにしよう。これを持っておいき。きつとおまえを守ってくれるだろう」

毛皮のおなががサツと左右に割れるのがススムの目に入ったのは、このときのことでした。思わずドキリとして、ススムは見つめないではいられませんでした。

でも毛皮の中にいる者が姿を見せたのではなく、ススムに見ることができたのは腕だけだったのです。

だけど肌の白い、女らしいきれいな腕ではありませんか。その手は魔力の杖をつかんでいました。

魔力の杖が、ススムの前に差し出されたのです。

「ススム、この杖を持ってお行き。きつとおまえを守ってくれるだろう」

「それがなくてお母さんは大丈夫なの？」

「ふふふ、杖がなくても多少の呪文は使えるさ。自分の身を守ることはできる。さあ、早くおとり」

魔力の杖とは学校で使う定規ほどの長さで、あまり大きなもので

はありません。手の中に握り、ススムは何回か振り回してみないではいられませんでした。

だけど振り回して何が起ころというわけではなかったのです。光を発するわけでも、火花が散るわけでもありません。

「お母さん、これは本当に魔力の杖なの？」

「私の命よりも大切なものさ。ていねいに扱いなさい」

「うん」

「では行っておいで。妖怪の相手は、みなその杖に任せるがいい。おまえはただ、魔力エンジンのスイッチを切ることだけ考えればいいのだよ」

「わかった」

ススムは歩き始めました。たった一人の冒険が始まったのです。

最初の曲がり角を曲がってしまうと、振り返ってもお母さんの姿は見えなくなりました。ススムは本当に一人になったのです。

トンネルはしばらくそのまま続きました。だけどやがて少しずつ広くなり、いつの間にか大きな部屋の中にいることにススムは気がついたのです。

目の前には壁があり、ドアがあるのを見ることができます。

このドアのむこうに魔力エンジンがあるのだということは、ゼロ

禅師から教えられていました。ドアに鍵がかかっている様子はありませんでした。

ノブに手を伸ばしかけたのですが、ススムは一瞬ためらうことになりました。ドアの脇に誰かが立っていることに気がついたからです。

「お姉ちゃん」

それは本当にミチコだったのです。学校帰りなのか、地底のこんな場所なのに制服を着て、カバンまで持っているのが奇妙でしたが、見間違いではありません。ススムの目には本人に思えました。

「ススム、こんなにもしろい地底の大冒険に私を誘わないなんて、ひどいじゃないの」

「だってお姉ちゃん」

「あんた一人なの？ ゼロ禅師はいないの？ ねえススム、ジェームスさんに頼まれて、あんたはゼロ禅師と一緒に来たんでしょう？」

「ううん、僕は一人だよ」

「うそおっしゃい。ゼロ禅師はどこに隠れているの？ 見つけ出して、背中をけつとばしてやるわ」

「お姉ちゃん黙れ」

魔力の杖を取り出し、ミチコに向けてススムは軽く振ったのです。

思っていたとおりこのミチコは偽者で、杖の魔力を受けてあつという間に正体を現し、毛むくじやらの真っ黒なコウモリに変化したではありませんか。そしてバタバタと羽ばたき、あわてて逃げたのです。

ため息をつき、今度こそ手を伸ばして、ススムはドアを開けました。

魔力エンジンとは、思っていたよりも小さな機械でした。洗濯機ほどの大きさしかなく、部屋の中央に置かれていました。

形は少しヒョウタンに似ています。鉄でできたボディーの上にスイッチが並んでいるのを見ることができます。

ゼロ禅師の説明から、ススムが切るべきスイッチは一番右にあるやつだとわかっていました。さっそく手を伸ばしたのです。

ところがススムの指は、スイッチに触れることができませんでした。まるでウサギのように、突然魔力エンジンがピヨンと前方へ飛んで、逃げたからでした。

驚くというよりも、ススムは思わず笑い声を上げてしまいました。

「こら、逃げるんじゃないよ」

もちろんススムは追いかけてました。だけど魔力エンジンは、またピヨンと飛んで逃げるのです。

ススムが再び追いかけたのは、いうまでもありません。しかし魔力エンジンも逃げ続けました。

ススムもあきらめるわけにはいきません。息をはずませながら、後ろを走ってゆくことになりました。

だけどついに、魔力エンジンはドアを突き破り、部屋の外へと出てしまったのです。

もちろんあとを追って、ススムも元のトンネルへと飛び出してゆくことになりました。

「待てえ」

魔力エンジンが姿を変え始めたことに気がついたのは、このときのことでした。

最初ススムは自分の目を信じるができなかったのですが、魔力エンジンは二つのタイヤを生やし、とうとうオートバイへと姿を変えてしまったではありませんか。

アクセルを吹かすものだから、ススムは顔いっぱい排気ガスを引っかけられることになりました。

オートバイが相手では、ススムは追いつけません。かといって立ち止まるわけにもいきません。あとを追いつ、ドタドタと駆けていったのです。

お母さんと別れた場所までは、すぐに戻ってくることができました。

突然現れたオートバイには、さすがのお母さんも驚いたのでしょ

う。目を丸くして見送ったところへススムがやってきたのです。

「お母さん」

「ススム、今のオートバイはなんだ？ 誰も乗っておらぬのに、風のようにかけて行っただぞ」

「あれは魔力エンジンが変身した姿なんだよ。早く追いかけてくちや」

「なんてことだススム、私の背中にお乗り」

お母さんはすぐに全力で走り始めたのですが、ススムはおかしなことに気がつきました。

「あれお母さん、魔力が濃すぎて苦しいんじゃないの？」

「それが突然楽になったのさ。オートバイに変身するときに、魔力エンジンは相当量の魔力を消費してしまったらしい。あつという間に薄くなった。もう心配はないさ」

オートバイのあとを追い、ススムとお母さんは走り続けたのです。

「お母さん、この道の先はどうなってたっけ？」

「一ヶ所、地底の裂け目を渡る橋がある他は、ずっと一本道のトンネルだったよ」

「うん、あれはすごい橋だったね」

ススムはありありと思い浮かべることができました。大地が大きく裂け、まるで渓谷のようになった場所があるのです。

ススムたちが進んでいる道は、細い橋になってそこを渡るのです。

「だからススム、やつが私たちを待ち伏せするとしたら、あの橋だろうよ」

「どうして？」

「狭くてやたら高くせにガードレールもない。私たちはトンネルから出た直後で、見通しはきかぬ。『わっ』と飛びかかれたら、反撃できないではないか」

「その橋まであとどのくらい？」

「ああトンネルの出口が見えてきたぞ。気をおつけ」

そうやって二人はトンネルから飛び出していったのです。

橋は長く、本当に狭く、まるでワリバシの上に乗せられたような気がススムはしたものでした。

お母さんの言うとおり、ここで襲われたらひとたまりもありません。そしてそれはまったく正しかったのです。

二人は身構えながら橋にさしかかったのですが、誤算の一つは、敵が上からやってくるとは想像もしていなかったことでした。

突然のエンジン音に、二人は思わず上を向いたのです。そして音の正体に気がつきました。

もちろんオートバイではありません。二人をめがけて飛行機が一機、かなりの速度で飛びかかってくるところだったのです。

大きな音で翼を鳴らして、プロペラをブンブン回転させています。体当たりしようというのかもしれない。

あまりのことにお母さんでさえ立ち止まり、思わず頭を引っ込めてしまいました。

翼の先とはいえ、まともにぶつけられたのでは、ススムはひとたまりもありません。あっという間に、お母さんの背中から振り落とされてしまいました。

しかもここは、ガードレールもない狭い場所なのです。すぐに橋からも転げ落ち、悲鳴を上げながら、どこまで深いかわからない暗闇へ向かって、ススムは落ちていったのでした。

☆

雪がとうとう降りやんだことは、地上の人々にもすぐにわかりました。おもてへはい出して、みんなほっとした表情で空を見上げたものでした。

ゼロ禅師もその一人だったのです。今日あたり屋根の雪下ろしを始めなくてはならないと思っていたところなので、本当に胸をなでおろしました。

雪がやんだということは、ススムが魔力エンジンの停止に成功したからに違いありません。

ところがゼロ禅師の安心も長くは続きませんでした。部屋のすみの暗がりには何者かが潜んでいることに気がついたのです。

「おや、どちら様かな？」

返ってきた返事はトゲトゲしいものでした。あの妖怪ギツネが姿を現したのです。

「おいゼロ、おまえのせいでススムは大変なことになってしまったのだぞ」

「ススム君が？ 魔力エンジンはどうなった？」

「ふん」

鼻息も荒く、ギツネはゼロ禅師の足元へ何かを放り出しました。床にぶつかって、ガチンと音を立てます。

ゼロ禅師が目をこらすと、大きく変形した機械部品のようなものでした。でもスクラップ同然ではありませんか。

「これは何かね？」

「魔力エンジンの成れの果てさ。私がめっちゃくちゃに壊してやった。ススムにあんなことをされて、冷静でおられなかったのね」

「ススム君はどうなった？」

「魔力研究所の手前に、巨大な大地の割れ目があることを知っているよう？ それを渡る橋の上で襲われたのだよ」

「それで？」

「あの底なし穴の中へ、ススムは落ちていったのさ」

「まさか」

「まさかではないぞ。しかしススムもケガはしておるまい。私が魔力の杖を貸し与えていたからな」

「魔力の杖だって？ あんたはそんなものを持っているのかい？」

「そんなことは今はどうでもよい。問題なのは、あの底なし穴からどうやってススムを助け出すかということだ。おまえのせいで、私はこれから泥棒をしに行かねばならんのだぞ。」

「本当ならおまえを食い殺してやりたいところだが、ススムのことを考えると、そうもいかぬわ」

「待て Kittens さん、もしやあんたは、大野家に所蔵されている『ムササビ笠』を盗みにいくつもりかね？」

「よくわかったな。だが止めても無駄だぞ。あの穴を飛び降りるには、どうしても必要なのだ」

「止めはせんよ。わしにいい考えがあるのさ。おや、あれはどこに置いたのだったか。確かこの物置の中だと思ったが」

戸を開け、ゼロ禪師はゴソゴソと中を探し始めたではありませんか。そして古ぼけた笠を取り出したのです。

本物のワラでできていて、手で持つのではなく、帽子のように頭にかぶる笠でした。

「ほらキツネさん、見つかったぞ」

「それは何だ？　ずいぶん汚いものだな」

「古いものだから仕方がないさ。しかしよくごらん。これはムササビ笠にそっくりではないかな？」

「まあな。しかしそんなものをどう使うのだ？」

「それを今から説明するさ。まあよくお聞き…」

☆

「いたあ」

そのころススムは、しきりに自分の腰をさすっていました。

魔力の杖がいくらブレーキをかけてくれたといっても、あの高さから落ちてきたのです。多少の痛みはあって当たり前でしょう。

でも幸運にも、どこにもケガはないようでした。少し休んで痛みがやわらぐと、やっと立ち上がる気持ちになりました。

「ここはどこなんだろう？」

ススムはキョロキョロとまわりを眺めました。

地底だからもちろん暗いのですが、杖が蛍光灯のようにぼんやりと輝いて、光を作り出してくれました。

足元には道があるではありませんか。ハイキング道のようにちやちなものだけれど、道には違いありません。

「この道をどっちへ行けばいいんだろう？」

手がかりはなく、ススムは困ってしまったのですが、頼りになるのはやはり杖でした。

まずススムはあてずっぽうに左へ行こうとしたのですが、どういうわけか杖は光るのをやめ、あたりは真っ暗になってしまったのです。

当惑して、ススムは体を右に向きました。するとどうでしょう。杖はすぐに光を取り戻したのです。

「ははあ、右へ行けということなんだね」

ススムは歩き始めました。

こんな地底の穴の底だといっても、周囲に音がなかったわけではありません。右手のどこかでサラサラと水が流れているのをススムは耳にすることができました。

「ふうん、この穴の底にも小川があるんだな」

ススムは歩き続けました。やがて前方に小さな家が姿を現し、彼は目を丸くすることになったのです。

それは小屋のように小さな家でした。一軒だけポツンと立ち、あまり立派にも見えません。だけど窓からは光が漏れているではありませんか。

足音を忍ばせて近寄り、ススムはそつと中をのぞき込んだのです。

思いがけない光景に、ススムははっと息をのみました。四角い部屋中央にいろりがあり、そこで燃える炎がまわりをオレンジ色に照らしているのです。

こんな地底にも動物がいて、住人はそれを狩って生活しているのでしょうか。毛皮が何枚か壁にかけられています。

でもススムを驚かせたのは、住人の姿だったのです。

「あれをやマンバというんだな」

声には出しませんでした。ススムは思ったのです。

いつから切っていないのか、バサバサした髪は腰に届く長さがあります。顔も手足もしわだらけで、いったい何歳なのか見当もつきません。

着物はぼろぼろで、毛皮を使って、あちこちにツギが当てられています。牙はとがり、ツメもクギのように長い恐ろしい妖怪なのです。

した。

ススムはヤマンバの小屋の中をのぞき込み続けたのですが、次の瞬間にはあるものを発見して、胸をドキンとさせることになりました。

部屋のすみには棚があり、道具類が雑然と乗せてあります。その中に分厚い本が混じっていることに気がついたのです。

表紙は革で作られ、立派すぎて、この場にはどうも似つかわしくありません。ただススムを驚かせたのは、その本にはどこかで見覚えがあることでした。

すぐに思い出すことができました。お母さんが手に入れ、大切にうに毛皮の中に隠している1冊です。あの本は3巻でセットになっていて、そもそもお母さんは、それを探しに人間世界へ来ていたのです。

あの棚の上にあるのは、そのうちの1冊に違いありません。

体が熱くなるような興奮をススムは感じました。あの本を手に入れ、手渡すことができれば、きっとお母さんは喜んでくれるに違いありません。

『どうすればあの本を手に入れることができるだろう』とススムは考え始めたのです。

頭をしばらくしましたが、いい知恵はなかなか浮かびませんでした。

相手はあんなに恐ろしい妖怪なのです。正面からぶつかっても、

まず勝ち目はないでしょう。

足音をしのばせ、ススムはゆっくりと後ずさりを始めました。そしてすぐに、さっき水音を聞いた小川のそばまでやってくることができましたのです。

地面に腰かけ、ススムは考え続けました。

だけど何の結論も出ませんでした。頼りになりそうなのは、結局杖の力以外になかったのです。

ススムがあることを思いついたのは、この瞬間でした。

「なんとかして、この杖を使いこなすことはできないかな」

もちろんススムに魔力の心得があるわけではありません。だけど、とにかく試してみることにしたのです。

☆

日がすっかり暮れたことを確かめてから、ゼロ禅師とお母さんは寺を出ました。目指すのは、もちろん大野の屋敷です。

屋敷の前に着きました。あたりに人影はありません。何かをこっそりやるには好都合ではありませんか。

お母さんが驚いたのは、雪の上に指で、ゼロ禅師が屋敷の見取り図をさっと描き始めたことでした。いかにもテキパキとしているのです。

「ゼロ、どうしておまえが屋敷の中の様子を知っているのだ？」

「この屋敷の主人から、少し前に妖怪退治を頼まれたことがあったのさ。結局は断ったのだがね」

「なぜ断った？」

「今はそんなことよりも、屋敷の中のことを話そうじゃないか。値打ちのある古い道具をコレクションすることを、ここの主人は趣味にしていた。」

そのコレクションを、小さな博物館のようにして飾っているのだよ。ムササビ笠が展示してあるのは、ほれこの部屋さ。」

鍵のかかるガラス戸棚に入れてあるが、ガラスを壊すのは簡単なことじゃろう？」

「おまえは何をする？」

「わしはここに残って、物音を聞きつけた家人が飛び出てきたら、一芝居打つことにしよう。なあに、まず失敗はしないさ」

ゼロ禅師の予想は正しかったようです。足音をしのばせ、お母さんは屋敷に忍び込むことに成功しました。教えられたとおりの場所でムササビ笠を見つけ、盗み出したのです。

戸棚のガラスを割るときには、もちろん大きな音がしました。それだけでなく、警報ベルまでが屋敷中に鳴り響いたではありませんか。

笠を口にくわえ、お母さんは身をひるがえらせることになりました。もう一度ガラスを割ってお母さんが外へ飛び出してきたのが、さっきゼロ禪師と示し合わせていた窓だったのです。

雪の上に降り立ってさつと駆け出し、お母さんがあつという間に姿を消してしまったのは、いうまでもありません。

屋敷の人々はもちろんすぐに追いかけてきました。でもこの人たちが発見したのは妖怪ギツネではなく、なんと雪の上でしりもちをついているゼロ禪師の姿だったのです。

「ゼロ禪師、どうなさったのです？　泥棒の姿を見ませんでしたか？」

起き上がるのを助けてもらいながら、ゼロ禪師は頭をかきました。

「いやいや、ひどい目にありました。あんなに大きな妖怪ギツネは見たこともありません。おたくの窓を突き破って突然飛び出してきたのです。妖怪ギツネにとっても思いがけないことだったらしく、わしと正面衝突してしまいましたな」

「そのキツネは、この屋敷から大切なものを盗んでいったのですよ。すぐに捕まえないと」

「いや、あとを追う必要はありませんまい。わしとぶつかったショックで、せっかく盗んだ物をやつは落としていきました。ほら、ここにありますよ」

そういつてゼロ禪師は、古ぼけたあの笠を取り出したのです。

こんなに暗い中では、当然かもしれません。人々はすっかりだまされ、お礼まで言ってゼロ禪師から笠を受け取り、屋敷の中へ戻っていったのでした。

そのころお母さんは地下トンネルを進み、もうあの橋までやってきていました。

その頭にはムササビ笠が乗り、あごのところではヒモが器用に結び合わされています。大きく息を吸い、お母さんは橋の上から身をおどらせたのです。

もちろんいったんは落下を始めたのですが、ムササビ笠には強い魔力があります。すぐに風をはらみ、まるでパラシュートのように働き始めたのでした。

名前のとおり本当にムササビのようではありませんか。ゆっくりとした速度で、お母さんは降下してゆきました。

☆

そのころススムは、杖の使い方をいろいろと試しているところでした。しかし、なかなかうまくいきません。

「おい魔力の杖、なんとか言え」

でも何も起こらないのです。光が消えることはありませんでしたが、武器が現れるわけでも、頼もしい味方を呼んでくれるわけでもないのです。

ススムは、だんだんイライラしてきました。

「おいおまえ、僕をバカにするんじゃないぞ。お母さんに言いつけるぞ」

だけどやはり何も起こりません。ススムは杖を振り回し続けました。ところが突然、背後から誰かの声が聞こえてきたのです。

「ほう、おまえはなかなかよい道具を持っているじゃないか」

ススムは飛び上がって驚き、あわてて振り返りました。

なんとそこにはあのヤマンバがいたではありませんか。いつの間忍び寄ったのか、ススムはまったく気づいていませんでした。

何一つ行動を起こすことができないうちに、長い腕がさっと伸びてきて、杖はもぎ取られてしまいました。ススムにはどうすることもできなかったのです。

5分後には、ススムはヤマンバの小屋へと引きずり込まれていました。手足をしばられ、抵抗することもできなかったのです。

小屋の中の様子はさっきと変わらず、オレンジ色の炎があたりを照らしています。

ところがヤマンバは、思わぬことで目をパチクリさせることになりました。何の予告もなく杖の光がすうっと薄くなり、ついには消えてしまったからでした。

杖を振り回し、ヤマンバはススムに迫りました。

「おい小僧、この明かりはどうやって使うのだ？ どうすればもう一度光らせることができるのだ？ わしに呪文を教えい」

「呪文って？」

「これを光らせるための呪文だよ。暗闇の中で、この棒はとても役に立つに違いない」

「ああ、その呪文ね」

ススムは急いで頭を回転させなければなりませんでした。うまい答えを返さなくてはなりません。その答えが、彼の運命を決めるのです。

だけど幸運にも、ススムは思い出すことができました。

魔鏡という不思議な道具を、ススムは以前、ゼロ禅師からもらったのです。それ以来、いつもポケットの中に入れていたのですが、それをお母さんに見せたときに、こんな言葉を聞かされたのでした。

「ススム、おまえは鼻歌を歌うクセはないだろうね」

「どうして？」

「魔鏡をポケットに入れておくのはいいが、不用意に歌うと大変なことになる」

「なぜさ？」

「事情があって、魔鏡はある歌がとても嫌いなのだよ。ポケットに

入れたまま、それを口ずさんだりしてごらん…」

「どうなるの？」

「それはおまえ…、とにかく大変なことになるのさ。よく覚えておき。魔鏡が最も嫌う歌を、おまえだけに聞こえるように、これから歌ってやろう」

そういつてススムの耳に口を近づけ、ささやくようにしてお母さんは歌い始めたのです。

「お母さん、それって誰でも知っている歌じゃないか」

「だから危険なのさ。この歌を不用意に聞かせた結果ときたら、タシコブの一つや二つではすまないのだからね」

そういう会話をお母さんと交わしたことを、ススムは思い出したのです。

ヤマンバはまだしゃべり続けていました。ススムの肩をつかみ、大きく揺さぶるのです。

「やい小僧、この棒を光らせる呪文を教えろ。教えないとひどい目にあわせるぞ」

「ああ教えるよ。教えるよ」

「では早く言え」

「だけど呪文じゃないんだよ。その棒を光らせるには、あんたが歌

を歌わなくちゃならないんだ」

「歌だって？ どうしてわしが？」

「だって、その棒はあんたが使うんでしょ？」

「ああ、言われてみればそうじゃな。では一体、何の歌を歌うのだ？ 早く言え」

☆

本物のムササビのようにクルクルとカーブを描きながら、お母さんは地底へと降下してゆきました。

穴の底があっという間に近くなり、ストーンとうまく着地することができたのです。

お母さんはあたりを見回しました。サラサラと水の流れる音がすることに気がついたのです。

小川はすぐに見つけることができました。水に乗って、岩にぶつかりながら何かが流れてくることに気がついたのは、このときのことだったのです。

拾い上げてみると、なんとハンカチだったではありませんか。

もちろん見覚えがありました。この日の朝、ススムの手に持たせたものだったのです。

ヤマンバにつかまるまいと暴れたときに、ススムのポケットから

落ちたに違いありません。

小川にそって、お母さんは全速で走り始めました。

すぐにススムの匂いを見つけることができました。それをたどってヤマンバの小屋を見つけるのは、簡単なことでした。

まずお母さんは、用心深く内部の様子を探ることにしました。そして、聞こえてくる物音に眉を上げたのです。

家の中では、誰かが泣いているようです。泣き声に混じって、なんとススムの声が聞こえてくるではありませんか。

泣き声を立てているのは、年取った女のようにです。

「ああ痛い、おお痛い。坊ちゃん、お願いだから、わしをたたくのをやめさせておくれ」

「今さら坊ちゃんなんて言っても遅いよ。このヤマンバめ」

「悪かった。わしが悪かった。あやまるから、この乱暴な鏡をなんとかしておくれよ。光る棒も返すよ。あんたが欲しがっている物もあげるよ。さあ持っておいき」

「よし。じゃあ魔鏡よ。僕のところへ戻っておいで。

おいこら、違うよ。僕はヤマンバじゃない。かみつくやつがあるか。持ち主の顔を見忘れたのかい？」

その後もしばらくドタバタと騒ぎは続いたのですが、やがて静か

になりました。

少しして小屋の戸が開き、元気な顔でススムが姿を見せました。お母さんが目を丸くしたのは、いうまでもありません。

「ススム、おまえは中で何をしていた？　これは誰の小屋なのだい？」

「これはヤマンバの小屋だよ、お母さん」

「ヤマンバ？」

「でも大丈夫。魔鏡が守ってくれたからね。ヤマンバがあんたの歌を歌うように仕向けたら、魔鏡が怒ってね。まるでコウモリみたいに飛び回って、ゴツンゴツンとヤマンバを体中こづきまわすんだよ」

「おまえはケガをしなかったのかい？」

「魔鏡がひどく興奮して、ちょっとかみつかれたけど大丈夫だよ」

「それならよいが…」

「そうだお母さん、これを返すよ」

「ああ、私の杖だね。役に立ったのならよかった。ところでススム、おまえは疲れていないかい？　ヤマンバももう悪さはしないだろうから、よければ私は、この穴の中を少し調べてみたいのだよ」

「どうして？　何か探し物でもあるの？」

「なんだススム？　なぜおかしそうに笑う？　ああ、もちろん私は探し物があるのさ」

「何を探すの？」

「ある場所で噂を聞いたのだよ。私が探している本の一冊が、猫坂のもっとも深い地下に眠っているとね。それがなんと、サラサラと小川の流れている穴の中だそうだ」

「ふうん。小川ならそこにあるよね。でもお母さん、苦労して探す必要はないと思うよ。ほら」

体の後ろに隠していた物を、このときススムはさっと取り出したのです。

目を丸くし、続いてお母さんが瞳を小さくするのは、見ていて楽しい眺めでした。

「ススム、この本をおまえはどこで見つけたのだい？」

「話は帰ってからにしようよ。僕はおなかがすいちゃった。禅師も心配しているだろうし」

「ゼロ禅師のことなど、私にはどうでもよい。さあ私の背にお乗り。早く家へ帰ろう」

もう地底には用はないのです。ススムもうなずきました。

降下してくるときにはムササビ笠が必要でしたが、今は魔力の杖があります。

杖の魔力で、ススムとお母さんは、あっという間に橋の上まで戻ってくる事ができました。あとはトンネルを抜け、地上へ戻ってゆくだけでした。

こうして今回の冒険は終わったのです。二人の無事な帰りを、もちろんゼロ禅師は喜んでくれました。でもそれだけではなかったのです。

お母さんの頭からはずされ、ムササビ笠はゼロ禅師に手渡されました。だからゼロ禅師は、どういう理由をつけてこれを大野家に返したのか、頭を悩ませることになったのです。

でも禅師のことです。きっと何かいい手を考えることでしょう。

町をおおっていた深い雪もすっかり消え、猫坂は再び平和を取り戻すことができました。

追跡者

お母さんの背中に乗って、共に駆けるのがススムはとても好きでした。

お母さんは風のように速く、何回もジャンプを繰り返しながら、家々の屋根づたいに飛ぶように走ることができたのです。

お母さんのしなやかな足は、着地してもコトリとも音を立てず、瓦を１ミリ動かすことだってありませんでした。

「さあススム、我が家が見えてきたぞ」

その言葉に身構え、ススムも着陸する用意をしたのです。でもそれは無駄になってしまいました。

お母さんの体に突然緊張が走るのが感じられたからです。

「お母さん、どうしたの？」

「ススム、しっかりつかまれ」

そう叫んだかと思うと、お母さんはもう一度大きくジャンプしたのです。

家の屋根はあっという間に小さくなり、二人は道路の上空に出ました。

そこからはなんと電柱の頂上をつたい、まるで忍者のようにして、

お母さんは再び走り始めたではありませんか。

電柱の頂上から頂上へと、お母さんはジャンプを続けたのです。ススムがそつと口を開いたのは、少したってからのことでした。

「お母さん、僕たちは誰かに追われてるの？」

「家の近くまで来たとき、気配に気がついた。今も追ってきているよ」

「本当に？ 僕には何も見えないや」

「魔力で姿を隠しているのだろう。よくごらん。やつが足をついた瞬間、電柱が震えることがわかるよ」

本当にお母さんの言うとおりだったのです。振り返って目をこらし、ススムも見ることができました。見えない敵が足をついた瞬間、たしかに電柱がピクリと震えるのです。

「電柱の震え方がすごいや。かなりの大物だね」

「どんな妖怪か知らんが、私たちの家を知られるわけにはいかない。うまくまいてしまわないと、家には帰れない。それはおまえも覚悟をおし」

「うん」

しばらくの間、ススムとお母さんは走り続けました。それでも敵はピタリと着いてくるのです。

「しっかりつかまっているように」とススムにささやき、お母さんは何度かサーカスのように急な方向転換や、右左折をやってみました。

それでも敵は離れず着いてくるのです。まるで機械のように正確ではありませんか。

次第にお母さんは、薄気味悪く感じ始めました。

「ススム、どうも敵の様子がおかしいとは思わないか。いくらなんでも正確に追ってきすぎるではないか」

「本当にそうだね。僕も不思議な気がしてきた」

「少し実験してみよう。おまえも協力おし」

「実験って？」

「あそこにある閉店してしまったレストランの看板が見えるか？」

「うん」

「看板に書いてある電話番号を覚えておきなさい」

「どうして？」

「いいから覚えておおき。次に前方のあの大きなビルをごらん。あのビルの陰に入って敵の目から見えなくなる一瞬、私はおまえを地上に降ろす。その後、私はまた電柱の上に戻って走り続けるが、おまえは……」

「何をするの？」

「公衆電話を探して、さっきの空き家のレストランに電話をかけるのだよ。電話番号を間違えるな。10円玉は持っているね？」

「うん」

「さあススム、ビルが近づいてきたぞ。用意はいいな？ 行くぞ」

一瞬息を止めるようにして、ススムとお母さんはビルの裏側へと飛び込んでいきました。

作戦はうまくゆきました。地面に降りてススムは駆け出し、お母さんはジャンプして、電線の上に戻ったのです。

敵が頭上を通り過ぎるとき、電柱が揺れ、電線が重そうにたわむのをススムは見ることができました。

公衆電話もすぐに見つけることができました。受話器を取り、ダイヤルを回したのです。

電話線のむこうで、ベルが鳴り始めるのがわかりました。誰もいないレストランの中で、電話機がけたたましい音を立てているさまを、ススムは想像することができました。

だけど、のんびりしている暇はありません。受話器をダラリとぶら下げたまま、お母さんと別れた場所まで、ススムはまた駆け戻ったのです。

お母さんは1分もしないうちに姿を見せました。再びススムを背に乗せ、電柱の上へと飛び上がりました。

「お母さん、どうだったの？」

「私たちは間違っていたようだ。やつはまだ着いてきているか？」

「ううん、もういないよ。電柱もしならないし、電線も揺れてない」

「やつは電柱の上ではなく、なんと電線の中を走っていたのだよ」

「まるで電気みたいじゃないか」

「おまえが電話をかけた後、やつがレストランをたたき壊すさまを見せてやりたかった。やつは、おまえが家へ電話したと思ったのさ」

「じゃあやつは、僕がかけた電話を追いかけて、電話線の中を通って、あのレストランまでたどっていったというの？」

「そうとしか考えられまい？」

「やつの姿は見えた？」

「いいや、何もわからなかった。姿を見せぬままたたき壊したのさ。まるで透明な巨人に踏みつぶされるかのような眺めだったよ」

「でもとにかく、やつをまくことには成功したんだね」

「いやススム、安心はできぬぞ」

「どうして？」

「敵の正体がまだわからないからさ」

翌朝になりました。お母さんが口を開きます。

「ススム、今日は学校へ行くのはおやめ」

「どうして？」

「昨日のバケモノに警戒しなくてはならないからさ。やつはおまえの顔を見ているのだよ。今も町の中をうろつき、おまえを探しているに違いない」

「でも今日は、学校でテストがあるんだよ。休むわけにはいかないよ。0点になっちゃうもん」

「テストなどほっておおき」

「だめだよ。僕は行くからね。電車に乗り遅れちゃう」

「ええいお待ち。仕方がない。今日は私も着いていくことにしよう」

「お母さんも学校に来るの？ そんなのだめだよ」

「うるさい。私はもう決めたのだ。今日のおまえは、とても危険なのだぞ」

こうなったら、何を言っても、もう絶対に聞いてくれないことはススムもよくわかっていました。

「だけどお母さん、どういう格好で学校へ来るの？ その毛皮のま
まじゃだめだよ」

「こうするのさススム。少しの間、むこうを向いていなさい」

ススムは言われた通りにしました。10秒後に再び振り返り、目
を丸くしたのです。

「あれお母さん、女の子に変身したの？」

ススムの言葉どおり、そこには女の子がいたのです。黒い髪をお
下げにあんでいます。セーラー服まで身につけているではありません
か。

「どうだススム、おまえの同級生に見えるか？」

「見えるけどお母さん、本当にその姿で学校へ行くの？」

「そうさ。一日中おまえのそばにいて、目を光らせなくてはならん
しぶしぶだったのですが、お母さんを連れてススムは家を出たの
です。そのまま駅へと急ぎました。」

校門を入りながら、お母さんが呪文をとなえていることに気がつ
き、ススムは小さな声でささやきました。

「お母さん、何の呪文をとなえているの？」

「私の姿を見ても、誰も怪しまないようにしたのだよ。ずっと以前

からいるただの女子生徒に見えるようにした。誰も気がつきはしないさ」

「ふうん」

こうして、ススムの長い一日が始まったのでした。

いろいろとトンチンカンなお母さんの言動がありはしましたが、午前中の授業はなんとか無事にすみました。問題が起こったのは、午後の理科の授業のときだったのです。

「雲の観察をする」ということで、先生は生徒を屋上へ連れ出しました。

さっそくお母さんがささやきました。

「雲だと？　なあススム、あの教師は雲の何を教えるつもりなのだよ？　雲に乗って空を飛ぶ術か？」

「セキラン雲とかイワシ雲とか、雲にはいろんな種類があるんだよ。それを勉強するんだ」

「そんなおとなしい雲よりも、どうせならカミナリ雲を眺めるほうが、よほどおもしろいではないか。よし、一つ呼んでやろう」

「お母さん、そんなことしちゃだめだよ」

「なぜだ？　せっかく勉強に協力してやろうというのに」

「だって…」

ところがもう遅かったのです。お母さんは、すでに呪文をとнаえていたのです。

あれほど明るかった空が一瞬で暗くなり、夜の闇のように黒い雲が遠い空から走ってくるではありませんか。

「ススム、よく覚えておおき。雲にはこの呪文がよくきくのだよ」

けどそんな言葉も、ススムの耳には届いていませんでした。突然光り始めた稲妻に驚き、表情を変えていたのです。

「ススム、何をしている？　せつかく私が教材を呼んでやったのに……」

お母さんの言葉も途中で止まってしまいました。なにやら異常なことに気がついたからです。

呪文に呼ばれてやってきたのは、カミナリ雲だけではなかったのです。なんと雲の上には妖怪の姿があるではありませんか。

これはお母さんもまったく予想していない出来事でした。一瞬ぽかんと口を開けてしまったほどです。

「ススム、あの妖怪の姿が見えるか？」

「なんという妖怪なの？　変な格好をしてるね」

本当にススムの言うとおりだったのです。

手足は長くてシマ模様があり、ヘビのようにウロコのあるしっぽとサルのように赤い顔があるのです。胴体は犬に似ていますが、もつとずんぐりした形です。

「ススム、あれはヌエというのだよ」

「ヌエ？」

「電気とカミナリの妖怪でな……。そうか。電気の妖怪だから、電線の中を自由に走ることができたのだな」

「あれが昨日の敵の正体なの？」

「そうらしい。電気妖怪らしくカミナリ雲の中に潜んでいたのを、知らずに私が呼び出してしまったということか。さあススム、私の背にお乗り」

ヒューイ、ヒューイと奇妙な声が聞こえました。ヌエが鳴いているのです。

「これはまずいぞ、ススム」

「どうして？」

「ヌエのやつ、カミナリ雲をもっとたくさん呼ぶつもりだ。電気はやつのエネルギー源だからな。あまり強く、凶暴になられても困る」

「じゃあどうするの？」

「カミナリ雲が集まってくる前に、なんとかせねばなんというこ

とさ」

ヌエはドンドン近づいてきます。大きな目玉で二人を見下ろし、カミナリ雲は稲妻を光らせ、大粒の雨をシャワーのようにまき散らし、ゴロゴロと雷をとどろかせているのです。

「ススム、よくお聞き。もうすぐヌエがこの屋上へやってくる」

「うん」

「やつの弱点はしっぽの付け根にある。ヘビそっくりのしっぽをしていることに気がついたかい？」

「うん、ウロコにおおわれたしっぽだね」

「あれがやつの本体なのさ。カミナリに打たれて死んだヘビの魂が、サルやタヌキやその他の動物の魂と出会い、合体して生まれた妖怪だからね」

「へえ」

「エネルギーの中心はヘビの魂だから、しっぽを切り離せば、ヌエはすぐに死ぬさ。そこでおまえに頼みがあるのだよ」

「何をすればいいの？」

毛皮の下から、お母さんは魔力の杖を取り出しました。

「これをおまえに渡すから、肌身離さず持っていなさい。この杖がおまえを守ってくれるだろう」

「お母さんはどうするの？」

「私は物陰に隠れ、気配を殺していよう。ヌエのやつが目の前に出てきた瞬間、うまく見計らってしっぽをかみちぎってやるさ」

「僕は何をするの？」

「おまえは屋上の中央に立ち、ヌエの注意をひきつけるんだ。なあに、やつはまず電気で攻撃してくることだろうが、すべてその杖が引き受けてくれるさ」

「電気以外の攻撃をしてきたらどうするの？」

「それは…、そのときに考えよう。あまり気にすることはない。その杖はとにかく強力なのだから」

お母さんに自信を持って言われてしまうと、ススムは首を縦に振るしかありませんでした。

それにもう時間がないのです。雲を離れ、大きくジャンプしてヌエが校舎へと飛び移ってきたのは、この直後のことでした。

ススムは杖を強く握りしめました。どこへ隠れたのか、お母さんの姿はもうありません。

さすが電気の妖怪ということなのでしょうが、ヌエが口を開くと、キバとキバの間に火花が散るのを見ることができます。

静電気的作用かもしれません。ススムは自分の髪の毛が逆立つの

を感じました。

ヌエがそこにいるだけで、コンクリートの床までが電気を帯びるのでしょうか。巨大な足が動くたびに、バチバチと気味の悪い音が聞こえるではありませんか。

ヌエが最初の攻撃を仕掛けてきたのは、次の瞬間のことでした。

まるでヤリのようにススムめがけて、まっすぐにカミナリが飛んだのです。幽霊のように青白い色でススムを照らし出したのでした。

だけどカミナリはススムを感電させるどころか、ショックを与えられることだってありませんでした。お母さんの言葉どおり、杖がススムを守ってくれたのです。

なんと杖は、カミナリをすべて吸い取ってしまったではありませんか。

この杖には電池のような能力があるに違いありません。平気な顔をしてペロリと電気を飲み込み、平らげてしまったのです。

これに驚いたのはヌエだけではありませんでした。ススムも同じように目を丸くしていたのです。

2度3度とヌエは攻撃を繰り返しましたが、結果は同じでした。底なしの胃袋のように、杖はカミナリをどんどん吸い込んでゆくのです。

ヌエはくやしそうな顔をしています、ススムはだんだんおもしろくなってきました。

「おいヌエ、もう電気は品切れかい？」

意外にもススムの言葉は正しかったのかもしれませんが。口を開いても、もはやヌエのキバの間を火花が飛ぶことはありませんでした。

逆立っていたススムの髪もいつの間にか元に戻り、ヌエが足を動かしても、気味の悪い音はもう聞こえません。

使いつくし、ヌエの体からは電気がほとんどなくなっていたのです。この瞬間をお母さんが見逃すはずはありませんでした。

物影から姿を現し、お母さんはヌエの背中へサツと飛び移ったではありませんか。まるでサーカスのような身軽さだったのです。

お母さんのねらいが、ヌエのしっぽの付け根なのは明らかでした。

もちろんヌエも黙ってはいません。かっと振り返り、お母さんにかみつこうとしますが、うまくゆきません。

お母さんは、すばやく身をかわしてしまおうのです。

腹を立て、ヌエは最後の電気を振りしぼる気になったようでした。あの短距離なのです。カミナリのすばやさの前には、さすがのお母さんもよけきれはありますがありません。

なんとかしなくちゃ。

ススムはあせりを感じました。

「おい魔力の杖、なんとかしろ。おまえのご主人がピンチなんだぞ」

お母さんはすでに又エのしっぽにかみつぎ、アゴに力を込めて締め上げています。しっぽは、いかにも苦しそうに、のたうっているではありませんか。

しかし一方で、又エの表情はとても冷静だったのです。牙の間に再び火花が飛び始めるのを見ることができました。

又エが体のすみずみから電気の最後のカケラをかき集めているのがうかがえます。一瞬後には、それがお母さんめがけて発射されるのでしょうか。

ところが、ここで意外なことが起こったのです。魔力の杖が突然、まるで折りたたみ式の傘のように、するすると長くなり始めたではありませんか。

握りしめているススムも、思いがけなさに目を丸くしたものでした。

杖は、あっという間に又エのすぐそばまで達したのです。そしてそれは、又エが最後の雷撃を放つのと同時だったのです。

なんとか間に合わせることができました。又エが送り出した最後のカミナリも、杖は簡単に吸い込んでしまったのです。

ついに戦いに結末のつくときがきたようです。突然プツンと大きな音が聞こえ、又エのしっぽは切断され、床に落ちてしまったのです。

でもヌエはまだ完全には死んでいません。最後の捨て身の攻撃です。大きくジャンプし、屋上の外へと飛び出していったのです。

その背中の上には、まだお母さんが乗ったままではありませんか。ススムはあわてて屋上のへりに近寄りました。そして目を丸くしたのです。

お母さんの体は、すでにヌエの背中を離れていました。ポンとジャンプしたのでしょうか。

妖怪ギツネのすばやさと筋力は、本当にすばらしいものでした。気がついたときにはお母さんは、もうススムのすぐ隣にいたのです。

一方でヌエは、どんどん下へと落ちてゆきました。

しっぽが切り取られたことで結びつきが弱まったのでしょうか。プラモデルが壊れていくときのように、サルの頭、トラの足、タヌキの胴とばらばらになっていったのです。

そのすべてが地面に激突したのは、いうまでもありません。

「お母さん、大丈夫？」

「もちろんさ」

「とうとうヌエをやっつけたね」

「だがススム、おかしいではないか。どこにヌエの死体があるのだね？」

「えっ？」

ススムは目を丸くしてしまいました。ついさっき確かに地面に激突したのに、もうどっちを向いても、死体は影もないではありませんか。

振り返って屋上を探しても同じで、ヌエのしっぽも手品のように消えているのです。

「ススム、ヌエは何者かにあやつられていたのだよ」

「どうしてわかるの？」

「その黒幕が、死体をあつという間に隠してしまったのさ。悪事が人目については困るのだろう」

「誰がそんなことをしてるの？」

「ラセツに決まっているさ。ラセツもあの本をねらっているのだから」

「お母さんが探している3冊のこと？」

「そのうちの2冊を、私はすでに手に入れたさ。ラセツは私からそれを奪おうとしている」

「どうして？」

「あの3冊を手に入れた者は強い力を得て、妖怪世界を支配するこ

とができるからさ。その野望に燃えているのは、私だけではない」

「それで？」

「ただラセツは、私のすみかをまだ知らないのだろう。知っているのは、私が妖怪ギツネの毛皮を着て、この町のどこかに住んでいるということだけなのさ」

「だから又エに町を探らせていたの？」

「そうだろうね。もちろん、こんなことでラセツがあきらめるはずはない。まだまだ攻撃を仕かけてくるだろう。ススム、おまえも気を抜くのではないよ……」

食人鬼

猫坂の町に食人鬼の噂が広がったのはごく最近のことで、もちろんススムの耳にも入りました。さびしい暗い道を一人で歩いている子供を捕まえては、バリバリと食べてしまうというのです。

ススムがゼロ禅師の寺を訪れたのは、そんなころでした。当然話題は、この食人鬼のことになりました。

「ねえ禅師、食人鬼に食べられた子供って、もう何人ぐらいになるの？」

「ああススム君、とても困ったことだねえ。新聞によると、すでに4人にのぼるそうだよ」

「食人鬼の正体は何だと思う？」

「それがねススム君……」

ゼロ禅師の口から出た説明は、ススムをひどく驚かせることになりました。寺を出て、家へ向かって歩き始めながらも、何度となく思い返さないではいられなかったほどです。

「もしかしたら、食人鬼の正体は僕のお母さんかもしれない」

事件には、一人だけ目撃者がいたのです。子供の悲鳴を耳にし、駆けつけようとした人なのですが、犠牲者をくわえて立ち去る犯人の影を見ていました。

それがなんとオオカミかキツネに似た毛むくじゃらで、妖怪としか思えない巨大な怪物だったということです。

この日からススムは、今までとは違う目でお母さんを見るようになりました。お母さんと話をしたり、近寄ったりすることが怖くなつたのです。

夜だって、恐ろしい夢をいくつも見るようになりました。

敏感なお母さんが、そのことに気がつかないはずがありません。ある日とうとう、話しかけてきたのです。

「ススム、話があるからここへおいで」

「なんなのお母さん」

「おまえはどうも最近様子がおかしい。何かあるのなら、話してごらん」

ススムはごまかそうとしたのですが、うまくいきませんでした。結局、白状させられてしまったのです。

するとお母さんは、おかしそうに笑い始めたではありませんか。

「おまえはそんなことで悩んでいたのかい？　この私が食人鬼だって？　ははは、これはおかしい」

「だってさ…」

「考えてごらん。キツネは本来、ネズミなどを捕まえて、頭から丸

のみにして食べるのだよ。

それとは逆に、人間のように大きな獲物をバリバリと引き裂いて食べるのなら、おそらくオオカミの仕業だね。事件の目撃者は、オオカミかキツネのような影を見たと言っているのだろうか？」

「それはそうだけどさ」

「おや私の言葉が信用できないのかい？　では私の腹をさいて、中から子供の骨が出るか調べてみるかい？」

「そんなこと、できるわけじゃないじゃないか」

「では私を信用おし。しかし気になる事件ではあるな。ススム、事件は何日おきに起こっているのだい？」

「禅師の話では、ほぼ1週間ごとだって」

「事件が起こるのは、どこなのだい？」

「それが猫坂中に散らばっていて、パターンがないんだよ。禅師からもらった発生現場のリストがあるよ。ほら」

「これかい？　ふうむ、なかなかおもしろいな。よしススム、私は決めたぞ」

「何を？」

「自分にかけられた疑いを、自分の力で晴らすことにしたのさ。真夜中前に出かけるから、そのつもりでおいで」

「真夜中って、今夜なの？」

「最後の事件が起こってから、今日でちょうど一週間じゃないか。食人鬼は今夜あたり再び活動するのではないかね？」

「だけどどこを探すの？ 猫坂の町は広いよ」

「それは私に任せておおき。少し考えがあるのさ…」

真夜中になりました。まだ眠かったのに、ススムは布団から引っぱり出され、お母さんの背中の上にいたのです。夜の風に吹かれ、やっと目が覚めてきたところでした。

「ねえお母さん、僕たちはどこへ向かってるの？」

「おまえは『妖怪街道』を知っているかい？」

「ううん」

「妖怪街道とは、猫坂に人間がやってくる前から存在する古い道だね。妖怪の通り道なのさ。律儀な妖怪なのだな。食人鬼は、その道にそって犠牲者を選んでいる」

「禅師はそんなこと言ってなかったよ」

「さすがのゼロ禅師だって知らないことがあるのさ」

「ふうん」

「妖怪街道について知ってさえいれば、食人鬼が次にどこで子供を襲うか、だいたい見当がつく。今日は猫坂神社の裏手あたりだろうよ」

「まさかお母さん、僕がおとりになるんじゃないだろうね」

「他にどんな方法がある？　だが安心おし。誰にも知られぬよう足音を消して、私はおまえのあとをついていくさ」

「でもお母さん…」

「おまえには指一本触れさせぬわ。私を信用おし」

こうまで言われてしまうと、ススムも口を閉じるしかありませんでした。

ススムがお母さんの背中から降ろされたのは、月の光をシルエツトに、猫坂神社の屋根を遠くに見ることができたあたりでした。

どの方向を見回しても、本当に人っ子一人いません。家々はドアにも窓にも固く鍵をかけ、コトリという物音一つ聞こえないのでした。

ススムは歩き始めました。自分の足音が、いやに大きく響くのが気になります。

お母さんは本当に見ていてくれるのだろうか、と不安になったのですが、街灯の近く以外は暗闇が広がるばかりで、何もわかりませんでした。

ススムはビクビクしながら歩き続けたのですが、突然の出来事が起こったのは、数分後のことでした。暗がりから、不意に敵が襲いかかってきたのです。

驚きのあまり、ススムは何の行動も起こすことができませんでした。

ススムには、相手の姿さえよく見えませんでした。真っ暗な毛の色が、暗闇に溶け込んでいるのです。

でも相手の目玉だけは見ることができました。オレンジ色に輝きながら、ススムをにらんでいるのです。口の中に並ぶとがったキバが、月の光を反射しています。

お母さんが姿を見せたのは、その瞬間のことでした。足音もなく忍び寄り、ススムの前に立ってくれたのです。

「おやおやおや」

お母さんの笑い声が、あたりに響きました。

敵とお母さんのにらみ合いは、少しの間続きました。でも不意に終わってしまったのには、ススムもあっけなく感じたほどです。

敵もお母さんも、相手に飛びかかるどころか、呪文をとなえることさえしませんでした。そんな必要はなかったのです。なんと敵は突然、プイとむこうを向き、背中を見せて歩き始めたではありませんか。

敵の姿は、そのまま暗闇の中へ消えてしまいました。

ほっとしてススムが口をきくことができるようになったのは、何秒もたってからのことでした。

「お母さん、今の妖怪はなんだったの？」

「なんだススム、おまえには見えなかったのかい？」

「うん。暗くてよくわからなかった」

「やれやれ、光がないと見ることでできない人間の目とは不便なものだね。あれはやはりオオカミだよ」

「えっ、日本のオオカミって、もう100年前に全滅したんだよ」

「私が言っているのは人狼のことさ。ただの動物ではなく、妖怪化したオオカミなのだよ。さあ相手の正体はわかった。おまえも納得しただろう？」

「うん、なんだか疲れちゃった。早く家に帰りたい」

「何を言う？ 夜はまだまだこれからだ。あの人狼がどこへ行っているのだね？」

「どこ？」

「私を発見したことを、やつは主人に報告に行ったのさ。主人はもうすぐここへ現れるだろう」

「主人ってだれ？」

「もちろんラセツさ。町中で子供を襲わせれば、正義にかられたバカな私が乗り出してくると踏んだのだろう。そしてそれは正しかったわけだ」

「まさか」

「まさかではないよ。ススム、あの屋根の上をごらん」

お母さんの視線を追いかけて、ススムは息をのむことになりました。そこには本当にラセツの姿があったのです。屋根の上に立ち、憎々しげにこちらを見下ろしているではありませんか。

月光を受け、3つの目玉は宝石のように美しく輝いています。それでもラセツが恐ろしい姿をしていることに変わりはありません。

お母さんが振り返りました。

「ススム、今夜私は家へは帰れそうにない。おまえは一人で先にお帰り。私のフクロウを護衛につけてやろう。おいフクロウ、どこにいる？ 姿を見せい」

「でもお母さん…」

「いいやススム、おまえはお帰り。でないと私は、安心してラセツと戦うことができないではないか。ごらん。屋根の上からラセツはさかんに手まねきをしている。今夜こそ、私と決着をつける気なのだろう。」

ああフクロウ、やっときたか」

パタパタという羽音が聞こえたので、ススムは目を向けました。フクロウはお母さんの目の前に降り立ち、うやうやしくお辞儀をしたのです。

「御用でしょうか、お師匠様」

「ああフクロウ、私はちよつと急用ができた。おまえの責任でススムを家まで無事に送り届けるのだ。できるな？」

フクロウは自信たっぷりにうなずきました。

「お任せください、お師匠様」

ススムは何か言おうとしたのですが、その暇はありませんでした。全身の筋肉をバネのように使って、あつと気がついたときには、お母さんはラセツと同じ屋根の上にいたではありませんか。

あれだけの高さを、お母さんは一気にジャンプしたのです。

屋根の上で何秒間かにらみ合っていました。戦いの舞台を変える気になったのでしょうか。ラセツとお母さんは、どちらからともなく駆け出し、夜の闇の中へと見えなくなっていました。

フクロウが口を開きました。

「ススム、お師匠様が言っていたように、おまえは早く家へ帰ったほうがいい」

「でもフクロウさん、あんたはお母さんのことが心配じゃないの？」

「心配は心配さ。だがオレたちがここで気をもんでも仕方がない。それに妖怪世界では、ラセツと並んでお師匠様の名も知られているのだよ。簡単に負けてしまうようなことはないさ」

「そうかなあ」

「そうさ。さあススム、オレを肩にとまらせてくれ。急いで飛んできたので翼が疲れてな」

「うん」

そうやってススムは歩き始めたのです。お母さんと違い、フクロウはおしゃべりでした。

「ああススム、これは楽チンだ」

「ねえフクロウさん、お母さんはどうしてラセツと争ってるの？」

「あれあれススム、あの3冊の本のことを、おまえはお師匠様の口から聞いていないのか？」

「聞いているよ。でも僕にはさっぱりわからないや。そんなに大切な本なのかなあ。ねえフクロウさん、あんたはお母さんの弟子になって長いのか？」

「オレはお師匠様の一番弟子だぜ。もう100年近くにならあ」

「へえ」

「それで3冊の本の話だったな。ススム、おまえは妖怪王国というのを知っているか？」

「ううん」

「地底にある強力な国でな、『妖怪王』様が治めている。よい王なのだが、一つだけ困ったことがあった」

「何なの？」

「跡継ぎの息子がいないのさ。王には娘が二人いたが、妖怪王国では、女が王位を継ぐことは許されていない」

「ふうん」

「そしてこの娘たちには、それぞれ息子がいるのさ。王から見れば孫になるな。だから次の代の王は、この孫二人のどちらかということだ」

「そうだろうね」

「そこで王は、まず猫坂のどこかに3冊の本を隠した。どこに隠したかは誰にも教えず、もちろん簡単に見つかるようなやり方ではない。

3冊とも、魔力の奥義をしるしたとても貴重なものだ。二人の男の子のうち、この3冊を見つけ出し、手に入れた者が後継者になると王は決めたのだ。

だから母親二人が、3冊を血まなこになって探しているのだよ」

「ねえ、それってまさか…」

「そうとも。ラセツには息子がいる。お師匠様にもいる。そしてもちろん、自分の息子を王位につけてやろうと必死なのさ。」

先日、ラセツが猫坂の町を妖怪でいっぱいにしたのも、この本を探すためだったのさ」

「ラセツとお母さんは姉妹なの？」

「当たり前じゃないか」

「じゃあ妖怪ギツネの毛皮の中にいるお母さんも、実はラセツと同じようにあんな恐ろしい姿をしているの？」

「えっ？ あー、なんだ。いやそのつまり、おおススム、家の前に着いたぞ。じゃあおやすみ」

翼を大きく動かし、フクロウはあわてて飛び去ってしまいました。ススムは独りぼっちになってしまったのです。ため息をつき、玄関のドアに手をかけました。

この夜、お母さんのことが心配で、ススムはなかなか眠ることができませんでした。

やっとウトウトしたと思ったら、怖い夢を見て何回も目を覚ますことになりました。

それでも朝はやってきます。やっといさつき眠りについたばかりなのですが、ススムは起き出さなくてはなりませんでした。

着替えてススムは、トントンと階段を降りてゆきました。でも階段の途中で、ススムは立ち止まってしまったのです。

皿や食器がぶつかる耳慣れたカチャカチャという音が台所から聞こえてくるではありませんか。

思わずススムが駆け出したのは、いうまでもありません。そして台所では、いつものようにお母さんが迎えてくれたのです。

「おはよう、ススム」

「お母さん、大丈夫だったの？」

「ラセツのことかい？　あまり大丈夫ではないな。結局逃げられてしまった。多少のケガは負わせておいたけどね」

「お母さんはケガをしなかったの？」

「かすり傷だけさ。さあおかけ、ススム。早く食べなさい。今日も学校があるのだろうか？」

「お母さんとラセツは姉妹なんだってね」

「なんとフクロウのやつが余計なことを言ったのか。あのおしゃべり鳥め」

「ねえ本当なの？」

「ああ本当さ。もともとあまり仲はよくなかったが、今回の件で争いが決定的になった」

「ねえお母さん…」

「しゃべってばかりいないで早くお食べ。でないと学校に遅刻してしまうよ」

時計をのぞき込むと、お母さんの言うとおりでした。話をやめ、ススムは大急ぎで学校へ行くしたくをしなくてはならなかったのです。

ラセツの最期

いつもの朝と同じように、家を出てススムは学校へ向かっているところでした。

もうそろそろ校門が見えてくるあたりでしたが、驚きのあまり、ススムはもう少しで腰を抜かしそうになりました。物影から突然妖怪が飛び出してきたのです。

だけど悲鳴を上げる必要はありませんでした。よくよく眺めると、見知った顔だったではありませんか。

「お母さん、何してるの？」

「ああススム、しばらくの間、これを預かってくれるかい？ 私は敵に追われているのだよ」

お母さんがそう言ったかと思うと、毛皮のおながが割れ、白い手と共に本が差し出されたのです。もちろんあの大切な2冊です。

すぐに受け取り、ススムは自分のカバンの中へ入れました。

「ススム、いうまでもないが、とても大切なものだから、大事に扱おうのだよ」

「でもお母さん…」

「話している暇はないのだよ。ほら、もう敵が追いついてきた」

その言葉と共に、お母さんは電柱の上へとサッと駆け上がり、風のように消えてしまいました。

ススムは、敵の姿を目撃することはできませんでした。

家々の屋根すれすれに低く飛んで、敵がお母さんのあとを追っていったことがわかっただけでした。でもその大きさに太陽の光がさえぎられ、あたりは薄暗くなるほどだったのです。

ため息をつき、カバンをかかえなおして、ススムは校門をくぐることになりました。

この日は一日中、授業中も休み時間も、ススムはカバンから目を離す気になりませんでした。それでも時間はすぎ、ついに放課後になったのです。

「お母さんからの連絡は一度もありませんでした。何かあったのではないかと、ススムは心配になり始めたのです。

しかしその心配も、長くは続きませんでした。

学校をあとに、駅で電車を降りて、人通りの少ない道を歩いていたとき、物影から突然お母さんが姿を現したからです。

「ススム、私の本は無事か？」

「うん、カバンの中にあるよ」

「それならいい。さあ私の背にお乗り」

ススムがそうすると、お母さんがすぐに駆け出したのは、いうまでもありません。

背後へと流れる景色に目を細めながら、ススムは口を開きました。

「ねえお母さん、ラセツは妹なんでしょう？　なんとか和解して、仲直りすることはできないの？」

「それはつまり、私かラセツのどちらかが、息子に王位を継がせることをあきらめろ、ということかい？」

「うん」

「そんなことができるものか。母親とはおろかなものでね。息子のためならどんなことでもするのだよ」

「僕のお母さんも、生きているときにはそんな気持ちだったのかなあ」

「それは間違いないさ。私が保障してもいい」

「どうしてお母さんが保障するの？」

「えっ？　いやなに、つまりなんだ。息子に対する母親の気持ちとは、どこへいっても変わらぬものだということさ。」

それよりもススム、あの怪物を追い払う方法について相談しようじゃないか」

「ずいぶん大きな妖怪みたいだね」

「ああ、あれほどの大物は珍しい。ススム、私の首のまわりには鉄製のロープが巻きつけてあるだろう？」

「うん、何だろうとさっきから思ってた」

「それを手にお取り」

「あれ？ 鉄なのにずいぶんやわらかいね。それに糸のように細いし」

「その鉄はやわらかいが、呪文がかけてあるから、見かけ以上に丈夫なのだよ。何十トンという重さに耐えることができる。それを使って、おまえは私の手助けをするのだ」

「どうやるの？」

「よくお聞き。今回の敵はウロコに包まれた巨大な体をしている。このウロコはヨロイのように硬く、少々の攻撃にはびくともしない。だがやつにも、一つだけ弱点があつてな」

「どんな？」

「やつの胸にはただ一枚だけ、他とは逆さまに生えた奇妙なウロコがあるのだよ。このウロコに傷を受けると、さすがのやつもすぐに死んでしまう」

「まさか、このロープをその逆さウロコに引っかけて、はぎ取ろうというの？」

「はぎ取ることまでは無理だろうよ。そのウロコはゲキリンというのだが、ちょっとロープをかすらせることぐらいしかできないよ」

「それじゃあ敵は死なないよ」

「死ななくてもいいさ。ぞっとさせ、おびえさせるだけでいい。やつが妖怪王国へ逃げ帰るように仕向けるのさ」

「そんなにうまくいくかなあ」

「うまくいかなければ、また別の手を考えるよ。さあススム、作戦を実行する場所が見えてきたぞ。あそこにある大木が見えるか？」

「うん、ずいぶん大きな木だね」

「猫坂神社の神木だからさ。もう2000年も前から、この地に立っているのだよ」

それは本当に、ススムが目を丸くするのも当然な眺めだったではありませんか。

2000歳といえば相当なものです。ただ一本の木に過ぎないのに、広く張りめぐらされた枝は葉が濃く、分厚く生え、まるで緑色のピラミッドのような姿なのです。

この木の頂上あたりに、ススムは降ろされることになりました。お母さんと協力して、ワナを仕掛けたのです。

2本の枝の間に、ロープをピンと強く張り渡したのです。木の葉のカーテンの下にうまく隠れ、ちょっと見ただけではわからない

ようにしたのは、いうまでもありません。

準備がすむと、お母さんはサッと姿を消してしまいました。高い木の上にススムは独りぼっちになったわけですが、お母さんはこう言い残したのです。

「ススム、私はやつをおびき寄せるから、おまえはおとなしく待っているのだよ。絶対にここを動くのではないよ」

「いつまで待てばいいの？」

「そうはかかるまいよ」

そう言ってお母さんは出かけてしまったのです。腰を下ろし、ススムは待つことにしました。

目をこらすと、葉と葉の間からは猫坂の町の風景が、見渡すかぎり遠くまで続いています。あまりにも平和で、何かが起こるような気はともしませんでした。

だけどその気分も長く続くことはありませんでした。巨大な怪物の恐ろしい鳴き声が、風に乗ってついに聞こえてきたからです。

敵を引き連れて、お母さんが戻ってきたに違いありません。その姿が見えてくるのに、時間はかかりませんでした。

敵の姿を目にして、目を丸くするどころか、ススムは恐ろしささえ感じるようになりました。

いつものようにお母さんは、電柱の頂上を全速力で駆けていまし

た。そのお母さんと比べても、敵のサイズは圧倒的だったのです。

頭からしっぽの先まで入れれば、100メートルはあるに違いのない竜だったではありませんか。巨大な翼で空を飛び、お母さんを小ネズミのように追いかけてまわしているのです。

竜とお母さんは、ドンドン近づいてきます。ついにお母さんは、神木の中へと身を隠したではありませんか。

もちろん竜も追跡をあきらめはしません。

竜に触れて、鉄のロープがまっすぐになるのが見えました。ロープは竜の胸の表面を滑っていったのです。そして：

その結果を、ススムは目の前で目撃することになりました。

例のゲキリンにも、ススムはすぐに気がつきました。胸の中央で一枚だけ上を向き、本当に逆さまに生えているのです。

だけどなんということでしょう。ススムの目の前でロープはそのゲキリンにちょうどぶつかり、まるでギロチンのように、あっという間にむしりとってしまったではありませんか。

耳をおおいたくなるような悲鳴が、あたりに響くことになりました。猫坂中に聞こえたに違いありません。

ゲキリンは竜のエネルギーの中心であるというお母さんの説明は、間違っていなかったのでしょう。まるでスイッチでも切れたかのよう、に、竜は一瞬で力を失ってしまったではありませんか。

頭は力なくたれさがり、翼は羽ばたくのをやめ、神木へと真正面からぶつかっていったのです。

あれほど大きな怪物ですから、とんでもなく強い衝撃だったに違いありません。地割れのように太いヒビが幹の中心を走り、なんと神木は崩壊を始めたのです。

激しくゆすぶられ、ススムは枝につかまろうとしたのですが、うまくいきませんでした。ついに足まで離れてしまい、どうすることもできなくなったのです。

お母さんがやってきてくれたのは、次の瞬間のことでした。ススムの体の下へ、お母さんはサッと飛びこんだのです。

「ススム、私の首につかまれ」

神木の崩壊は、まだ続いていました。

細い枝はムチのように空気を切り、太い枝は、牙をむいたオオカミのように襲いかかってきます。幹はバラバラのカケラになり、雷に打たれた岩山のように崩れ落ちてゆくのでした。

それでもお母さんは、幹から幹、枝から枝へとジャンプし続けたのです。

二人は、ついに安全な地面に降りることができました。立ち止まって、ほっと息をつき、背後を振り返ったのです。

ウロコは相変わらず美しく輝いていますが、竜はもはやピクリともしませんでした。長々と地面に横たわっているのです。

まるで眠っているような姿ですが、胸から流れ出す血は見落としてようがありません。

「お母さん、竜は死んだのかな？」

「ゲキリンがちぎれ飛んでしまうとは、まさか私も思わなかったよ。ああ、確実に死んださ」

「これからどうするの？」

「ラセツがどう出てくるかが見ものだが…、おやススム、あれをもらん。なんてことだ」

その言葉に、ススムも思わず息をのむことになりました。竜の体にある変化のきざしが見えたのです。

「お母さん、あの竜はラセツが変身したものだっただ」

ススムの言うとおりでした。二人の目の前で、竜の死体はゆっくりと縮んでいったではありませんか。同時に形も変え、ついにはラセツの姿となってしまったのです。

胸から血を流して、ラセツは横たわっているのです。死んでいるのは間違いありません。まぶたを閉じているので、宝石のように輝く瞳を見ることはできませんでした。

お母さんが口を開きました。

「ラセツのやつめ、かなり無理をしていたのだな」

「どうして？」

「みずから竜に変身するなど、なかなかできることではないからさ。命と引き換えの覚悟が必要な大変な術だよ」

「自分の息子のために、ラセツは大きな賭けをしたんだね。恐ろしい姿だけど、こうしてみるとラセツもかわいそうだね」

「まあな。しかしこれで、私の息子が王位を得ることに決まったわけだ。めでたいといえば、めでたいではないか」

「めでたいって、ラセツが死んだのに？ 妹なんでしょう？」

「だからどうしたというのだね？ しかしススム、私たちはここに長くとどまらぬほうがよからう」

「どうして？」

「仮にも妖怪王の娘が死んだのだ。やがて家来たちが集まり、死体を王国へ連れ戻ることだろう。葬儀には私も出席せねばなるまいな」

「お母さんが殺したのに？」

「妖怪の名誉をかけた戦いだったのさ。勝っても負けても、何も恥じることはない。だがススム、とにかく騒がしくなる前にこの場を離れることにしよう」

お母さんの背中に座り、家へ向かって駆けながら、ススムは口を開かないではいられませんでした。

「ねえお母さん、お母さんの息子が次の代の王になると決まったから、もう本を探す必要はないんでしょう？ お母さんは妖怪王国へ帰っちゃうの？」

「いいやススム、まだ帰りはしないさ。おまえとミチコが大人になる日まで母親の代わりをすると、私は約束したのだ。約束は守らねばならぬ」

「お母さんの息子はどうなるの？ 一人でさびしがらない？」

「ふふふ、あの子はさびしがったりせぬさ。それにススム、妖怪王はまだまだ元気なのだ。私の息子が即位するのは、まだまだ先の話だ」

「ふうん。あのね…」

「どうした？」

「ううん、なんでもない」

お母さんにききたいことは、まだまだたくさんあったのですが、ススムは次の機会を待つことにしたのです。

今日のところは、お母さんがこの先もまだ何年間か一緒にいてくれる、ということがわかっただけで、満足することにしたのでした。

妖怪王の出現 その1

ラセツの葬儀は数日後に行われました。

ススムだけにそっと耳打ちをし、真夜中の数時間だけ家を抜け出し、お母さんは地底へ帰っていたのです。

でも朝になって、お母さんの表情が暗いことにススムは気がつきました。

「お母さん、どうしたの？ 何かあったの？」

「ああススム、実は昨夜の葬儀で奇妙なことがあったのだよ。ラセツの息子のことだ」

「うん」

「息子の名はナユタというのだが、その姿がなぜか葬儀会場になかったのだよ。家来たちはもちろん探したが、妖怪城の中にも外にも見つけることができなかった」

「どうして？」

「それがわからないから困っているのだよ。部屋には置手紙すらなかったが、どうやらナユタは、どこかへ行ってしまったようだ」

「ラセツが死んだから、ショックだったのかなあ」

「そんなしおらしいやつであるものか。昨夜、王が言ったのだが、

ラセツが死んだからといって、まだ私の息子が跡継ぎと決まったわけではないそうだ。やはりあの3冊をすべて集めた者が勝者になる」

「じゃあナユタが3冊とも集めてしまう可能性がまだあるわけだね。ナユタは、そのために姿を消したんだ」

「おそらくそうだね。ナユタは、私が持つ2冊を盗み出そうと必ずやってくるに違いない」

「やれやれ、お母さんも大変だね」

「なんだススム、他人事のように言うのではないぞ」

「どうしてさ？ 僕から見れば、悪いけど全部、他人事だよ」

「ん？ ああそうか。そうだったな。忘れていたよ」

「何言ってるのさ。変なお母さん…」

その2

その日もいつものように、ススムはゼロ禅師の寺の門をくぐったところでした。

「やあススム君、きたね」

「うん禅師」

「そうだススム君、あのニュースを聞いたかい？」

「猫坂城のことでしょう？ 電車の中でもみんな噂してたし、学校でもその話ばかりだった。でもそうだよ。お城の中を夜な夜な妖怪が歩きまわっているなんてね」

「それがススム君、噂で聞いたのだが、なぜだか花の匂いのする妖怪らしいのじゃよ」

「花って？」

「文字通りの花だよ。菊とか桜といったあの花さ」

「そんなにいい匂いがする妖怪なの？ そんな妖怪が猫坂城で何をしているのかなあ」

「それが、屋根のカワラを一枚一枚はがしているらしいのさ。多少は腕力のある妖怪らしいが、猫坂城はあの大きさだからね。すべてのカワラをひっくり返すのに時間がかかっているのさ」

「カワラを全部裏返して、何の意味があるの？」

「うん、どうやらカワラの下に隠されている物を探しているのではないかという気がするね」

「カワラの下に宝物でもあるの？」

「ははは、それはわしにもわからないさ。でもススム君、その妖怪が昨夜まで、2晩続けて猫坂城に姿を見せているのは事実なのだよ」

家へ帰ってから、もちろんススムは、この話をお母さんに伝えたのです。

「ふうん」とはじめは気のないふうでしたが、話の途中で、お母さんの表情は大きく変化することになりました。

「なんだってススム？ 花の匂いのする妖怪だって？」

「ゼロ禅師がそういつてたよ。妖怪が現れると、あたりにとてもいい匂いがただようんだって」

「その妖怪が、猫坂城のカワラを毎夜毎夜、一枚ずついていねいにはがしているというのかい？」

「そうだよ」

「なんとススム、これは大変なことだぞ」

「どうして？」

「花のような体臭とは、ナユタの特徴だからさ。その妖怪はナユタかもしれぬ。妖怪の姿を目撃した者はいないのか？」

「真夜中だから一人もいないんだって。でも屋根の上に黒い影が乗り、バリンバリンとカワラを一枚ずつ調べているのは確かなんだって」

「ええいススム、ナユタに先を越されるわけにはいかぬぞ」

「あの最後の1冊が、猫坂城のカワラの下に隠されているというの？」

「そうとしか考えられないではないか。よしススム、今夜、私たちも出かけよう」

「猫坂城へ行くの？」

「決まっているさ。最後の1冊を、どうしてもナユタよりも先に見つける必要がある」

その3

真夜中になりました。

いつものようにそつと家を抜け出し、お母さんは妖怪ギツネの姿になり、ススムを背中に乗せて、電柱の上を駆けていました。

ススムが口を開きました。

「ねえお母さん、今夜も猫坂城にナユタがやってくると思う？」

「もちろんさ。ゼロ禅師も言ったとおり、猫坂城はとても広い。カワラは何万枚もあるに違いない。本の隠されている場所など、そう簡単に見つかるものではないさ」

「だけど、ナユタと戦いになったらどうするの？」

「ふふふ、私が負けるのではないかと心配しているのかい？」

「ナユタって強いのか？」

「それがなススム、ナユタはろくな腕力もなく、呪文すらあまり使えないのだよ。赤子の手をひねるようとは言わぬが、正面から対決することになっても、私はあまり心配しておらぬ」

「へえ」

猫坂城までは少し距離がありました。その後は二人とも黙ったまま、走り続けたのです。

やがて家々の屋根のむこうに、猫坂城の姿が見えてきました。星の光る空に、真っ黒なシルエットがギザギザに浮かび上がっているのです。

猫坂城は町で最大の建物で、闇の中で見ても息をのむほどの大きさがありません。内部は博物館もかねていて、小学生のときにススムも遠足できたことがありました。

「お母さん、どこでナユタを待つのか？」

「ああ、あそこがいい」

お母さんが見上げる先を目で追って、ススムは口をポカンと開けることになりました。なんとお母さんが視線を向けていたのは、城内で最も背の高い建物、天守閣だったからです。

「本当にあの上に登るのか？」

「高い場所のほうが、見張るのには都合がよいではないか」

「それはそうだけどさ…」

ススムはあまり気が進まなかったのですが、あつと思ったときには、お母さんはもう屋根づたいに登りはじめていたではありませんか。

まるでリスのように、ひさしからひさし、屋根から屋根へ飛び移ってゆくのです。背中毛にギュツとつかまり、ススムは思わず目を閉じないではいられませんでした。

でもお母さんの足はバネのように力があり、足の裏はやわらかいゴムのようで、スリッパする気配すらありませんでした。

気がつくとススムは、天守閣の頂上にいたのです。

「さあススム、目をお開け」

お母さんの言葉におそろおそろ従ったのですが、目の前に広がる景色に、ススムは思わず声を上げてしまいました。

ここからなら、文字どおり町全体を一目で見渡すことができるのです。きらめいている街灯やネオンサインは、まるで黒い布の上にガラスのカケラをまき散らしたかのような眺めではありませんか。

「うわあ、お母さん見てよ。とてもきれいだよ」

「そうかい？ それならおまえを連れてきたかいがあったというものだね。しかし油断をするのではないよ。いつナユタが現れるかわからないのだからね」

「うん」と返事をしましたが、ススムはよくわかっていなかったのかもしれない。お母さんの背中にもたがったまま、景色に見とれていたのです。

そういう二人の姿を、よく訓練された目が見逃すはずはありませんでした。

その4

ススムの耳に聞こえたのは、ヒュツという小さな音でしかありませんでした。空気を切って、突然何かが飛んできたのです。

次の瞬間には前足を折り、お母さんの体が苦しそうに大きく傾いたではありませんか。

「お母さん、どうしたの？」

「誰かが矢を放ってきたのだ。ススム、私の体の右側にお隠れ」

意味に気がつき、ススムはぞっとするような恐ろしさを感じるようになりました。鉛筆ほどの長さしかない小さなものですが、お母さんの左肩には本当に矢が突き刺さっていたのです。

「お母さん、どうしよう」

「いいから早く私の影に隠れるのだ。おまえまで矢を受けてしまうぞ」

「でもこれを引き抜かないと」

「触るな。呪文の書かれた妖怪封じの矢だ。おまえまで魔力を受け、体がしびれてしまうぞ」

そういって、お母さんは強引にススムの左側に割り込んだのです。そうすればお母さんの体が盾になり、ススムは安全でいることができます。

首を後ろに曲げ、お母さんは矢の先を口にくわえました。そして一気に引き抜いてしまったのです。

「誰がお母さんを攻撃したのか、僕見てくる」

お母さんが振り返る前に、ススムはもう駆け出していました。お母さんには止める暇もなかったのです。

矢を放った敵がどこに隠れているのか、大体的見当はついていました。暗がりをついて身を隠しながら、ススムは近づいていったのです。

天守閣の屋根は広く、体育館にも負けない面積がありました。急斜面なので、足を滑らせないように注意しなくてはなりません。

それでもススムは進んでゆくことができました。たまたま黒い服を着ていたことも役に立ったかもしれませんが。

屋根の一部には切り立った高い崖のような部分があり、敵はそこに身を隠していたのです。

矢を受けてお母さんが動けなくなった後、第二の矢を放ったものかどうか、様子を探っていたのでしょう。そこへ突然ススムが現れたものだから、敵はひどく驚いたに違いありません。

「ススム君、こんなところで何をしているのだい？」

びっくりしたのは、もちろんススムも同じでした。

「禪師こそ、こんなところで何をしているの？」

「市長に頼まれて、カワラを壊す妖怪を退治しにきているのだよ。体のしびれる呪文を書いた矢を、たった今、放ったところさ」

「その矢が、僕の家に住んでいる妖怪ギツネの肩に命中したんだよ」

「なんだって？」

すぐにススムが事情を説明したのは、いうまでもありません。

「なんだってススム君？ 物好きにも君はあのギツネの背に乗って、猫坂城を荒らす妖怪を見物に来ていたというのかい？」

「そうだよ」

「そこへわしの矢が当たってしまったというのだね」

「矢を射るなんてひどいよ。呪文のせいで、ギツネは動けなくなっ
てしまったんだ」

「これは困ったことだぞ。市長から頼まれ、わしはここで待ち伏せていたんじゃない。妖怪に軽いケガを負わせて、二度とこの城を荒らす
気を起こさせないようにするためさ」

「禪師一人だけなの？ 仲間はいないの？」

「市の職員たちとは意見が合わなくて、わしは単独行動をとったのだよ」

「どうして？」

「職員たちは『そんな迷惑な妖怪は殺してしまうべきだ』と主張した。わしは反対で、殺さずとも追い払うだけでいいと言った。」

互いにゆずらず、その結果わしはここに一人でいるわけだが、職員たちは城内に隠れて散らばり、妖怪が姿を見せるとただちに集まり、いっせいに攻撃を始める手はずになっているのだよ」

「職員たちは、僕とキツネがこの屋根の上にいることに気づいていると思う？」

「もちろん気づいているさ。見張りが何人もいて、双眼鏡で監視を続けているからね。ほらススム君、あの下をごらん。広場に人が集まっているのが見えるじゃないか」

「あそこ？ 30人ぐらいいるね。みんな手に棒を持ってる」

「ただの棒であればよいがね。あれは猟銃ではないかな。しかもその猟銃には、銀の弾丸が込めてあることだろうよ」

「銀の弾丸って？」

「妖怪退治の道具さ。普通の弾丸で妖怪を倒すのは難しいが、銀の弾丸ならばまったく効果が違う」

「僕のキツネは殺されちゃうの？」

「それもありえない話ではない。だがススム君、わしに少し考えがある。とにかくまず、ケガをしたキツネのところへ行こうじゃない

か
「

その5

お母さんはとても機嫌を悪くしていました。

「おい禅師、おまえが私に矢を放っただど？ 体さえしびれていなければ、おまえを頭からガリガリかじってやりたい気分だぞ」

「わしなんぞを食ってもうまくはないよ、キツネさん。それよりもススム君のことが心配じゃな」

「どういうことだ？」

ゼロ禅師は、手短に事情を説明したのです。お母さんが顔色を変え、るのに時間はかかりませんでした。

「禅師、その市職員たちとやらは、いつこの屋根に上がってくる？」

「あと15分というところかな。この城は古くて、エレベーターなどないからな」

「そもそも禅師、おまえはなぜ矢に呪文など書いておいた？ おどかして追い払うだけなら、矢を当てるだけでよい。呪文など必要ないであろう？」

「敵がどんな妖怪かわからなかったからさ。思わぬ巨大な怪物かもしれないではないか。だがキツネさん、強い呪文ではないから、そのしびれももう消えてきたのではないかな」

「ああ、その通りだ。だがススムを背に乗せるほどにはまだ回復し

ていない。私一人なら、なんとかこの場から逃げ出せるだろうが」

「うーん、それは本当に困ったな」

3人の間で相談が始まったのですが、ゆっくりしている時間はありませんでした。市職員たちが、もういつ姿を現しても不思議はないのです。

ススムはキョロキョロとまわりを見回しました。

「禅師は、どこからこの屋根の上に上がってきたの？」

「あそこさ。小さなドアが見えるだろう？ ハシゴがあって、一つ下の階につながっているのだよ」

お母さんが口を開きました。

「そんなことよりも禅師、ススムをここから安全に逃がす方法を考えよう。どうやら私とススムは、ナユタのワナにはまってしまったようだ」

「どういふことなのかな？」

「3冊の本をめぐって、ナユタと私が争っていることは知っているな？」

「そうらしいね。ススム君から聞いたよ」

「そのナユタがこの城でさかんにカワラを壊し、わざと私をおびき寄せたのだと思う。おまえや市職員たちに私を殺させようという計

画なのだろうよ」

「やれやれ、わしは何も知らずに矢を放ってしまったわけか。申しわけのないことをした」

「その責任は、後でじっくり取ってもらうさ。とにかく今は、ススムの安全を第一に考えよう」

「何か作戦があるのかい？」

「そんなものあるものか。市職員たちをひきつけ、私が大暴れするから、そのすきにススムを連れ、禪師はここから逃げてくれ」

「いや、それには賛成できないな。いくらあんたでも、銀の弾丸にはかなうまい」

「そんなことを言って、他にやり方があるか？」

「あるともキツネさん、わしのすることをまあ見ておいで」

そう言ってゼロ禪師はカバンの中に手を入れ、しばらくゴソゴソと探していたかと思うと、何かを取り出したではありませんか。

手の中にすっぽりと納まるほどで、あまり大きなものではありません。ススムは目をこらしました。

「禪師、それは何なの？」

「妖怪花火さ」

お母さんが鼻を鳴らしました。

「そんなおもちゃが何かの役に立つのか？」

ゼロ禅師はにっこりと笑いました。

「まあ、ごらんあれ」

妖怪花火には小さな導火線があり、ゼロ禅師はそれに火をつけました。次に、広場に集まっている職員たちめがけて、ポンと放り投げたのです。

風を切り、カーブを描きながら妖怪花火は落ちてゆきました。うまい具合に広場の中央に着地したのです。

大きな音や煙と共に花火が破裂したのは、その瞬間のことでした。

職員たちは、腰を抜かしそうなほど驚いたに違いありません。

妖怪花火とは昔からある道具で、火をつけると煙を出し、その煙の中に妖怪の姿が映し出され、牙をむき、恐ろしい声でうなるというものにすぎません。

でもそんなおもちゃでも、役に立つときがあるのです。妖怪退治のために神経を張り詰めていた職員たちは、簡単に引っかかってしまいました。

すぐに猟銃の音がパンパンと、天守閣の頂上まで聞こえてきたではありませんか。

最初は顔を見合わせていましたが、ススムたちはすぐにクスクスと笑い始めました。

ススムが言いました。

「ねえ見てよ。みんな煙の中の幻の妖怪をねらって撃ってるよ」

お母さんはあきれた声を出しました。

「しかしまた不細工な妖怪だな。禪師、もっと恐ろしげな姿にできなかったのか？」

「いやあキツネさん、恐ろしい姿の妖怪というのは、薬品の調合が難しくてね。失敗して、あんな姿になってしまったのじゃよ。だが役に立ったのだから、よいじゃないか」

それにはススムも同意することができました。

「そうだよキツネさん、役に立ったんだもん。あれでいいよ。笑っちゃう姿の妖怪だけどさ」

すぐにススムたちは、天守閣の屋根から降り始めました。ゼロ禪師が道案内をし、長く続くハシゴや階段をたどっていったのです。

広場から聞こえていた銃声や物音は、やがて静かになってしまいました。

ただ花火の火が消えてしまっただけなのですが、妖怪を追い払うことに成功したと思い込んでいるのでしょう。職員たちの機嫌のよい話し声や笑い声が聞こえてくるではありませんか。

窓からのぞくと、市職員たちはすっかり安心して、帰りじたくを始めているようです。もうこれで心配はないでしょう。

ススムたちも、このまま暗闇にまぎれて家へ帰ればよいと思えました。ところが実際には、天守閣の外へ出ることさえできなかったのです。

最初に声を上げたのはススムでした。

「あれ？ あそこに誰かいるよ」

すぐにゼロ禅師とお母さんも目をこらすことになりました。そしてススムの言うとおりだとわかったのです。

広間のように大きな部屋の中央なのですが、誰かが立ち、ススムたちを待ちかまえているではありませんか。

その6

姿は普通の少年のように見えました。年齢も、ススムとあまり変わらないうちかもしれません。

下の階へと続く階段には、この広間を横切らないと行くことができません。ゼロ禪師が口を開きました。

「ススム君、あれは君の友達かな？」

「ううん、知らない人だよ」

このときになってやっと、少年は一人ではなく、連れがいるらしいことに気がつくことができました。

連れは二人いて、暗がりにはまぎれてわかりにくかったのですが、一人は古めかしい服を着た小柄な老人、もう一人はなんと、お母さんにも負けないとんでもない大きさの猫だったのです。

この猫はネコマタという妖怪なのですが、動物園にいるトラよりも大きな体をしているではありませんか。

お母さんの声があたりに響きました。

「やあナユタ、元気になっていたのだな」

目を丸くし、ススムとゼロ禪師が思わず顔を見合わせたのは、いふまでもありません。この少年がナユタだったのです。

ナユタの隣にいる老人が口を開きました。

「さあ坊ちゃま、今こそ母上のカタキを取るチャンスですよ」

お母さんが言いました。

「カタキだと？ 確かにラセツは死んだが、あれは事故のようなものだぞ」

「坊ちゃま、あの者の言葉に耳を貸してはなりません」

困ったような顔でゼロ禅師が振り返ったのは、このときのことでした。

「わしにはよく意味がわからないのだが、誰か説明してくれんかな」
ついにナユタが口を開きました。

「説明も何もあるものか、ゼロ禅師。僕はそのキツネと戦い、母のカタキを取る。禅師の相手はこの老人がする。ススムの相手をするのはネコマタだ。3人とも覚悟はよいか？」

「何だって？」とススムは口を開きかけたのですが、最後まで言葉を続けることはできませんでした。その前にお母さんが言ったからです。

「ススム、これは逃げるわけにはいかないようだよ。ナユタがああまで自信たっぷりなのは、この天守閣がすでに呪文で封印され、誰ひとり外へ出ることができないようにしてあるからに違いない」

ナユタはゆっくりとうなずきました。

「その通りさ。天守閣の外へ出たければ、おまえたちは僕を殺すしかない」

ゼロ禅師が言いました。

「やれやれ、聞いたとおりだよススム君。ここは一つ、覚悟を決めて戦う以外になさそうだ」

お母さんがもう一度口を開きました。

「ススム、私が貸してやった魔力の杖は、今もポケットの中に入っているね？ ネコマタとの戦いは、すべて杖にまかせるのだよ。おまえは、ただ杖の言うとおりに動けばいい。いいね？」

もちろんススムはうなずきました。それ以外にできることは何もなかったのです。

ついに戦いが始まりました。

その7

最初ススムは、ネコマタとは一対一で対決するものと思って緊張していました。いくら魔力の杖の助けがあっても、もちろん自信がなかったのです。

しかしそれはお母さんも同じだったかもしれません。

ススムを一人にするのが不安だったのでしょうか。ナユタたちが何か行動を起こす前に、そでをくわえてクイツと引かれ、気がついたときには、ススムはお母さんの背中の上にいたではありませんか。

そしてお母さんは駆け出したのです。

「お母さん、体はもう大丈夫なの？」

「もうとっくに直っているさ。そんなことよりもススム、ナユタのやつはどうした？」

「ネコマタの背中にまたがって、もちろん追いかけてきてるよ。あの変なじいさんと禅師は、向かい合ってなにやら呪文をとえ始めてる」

「あのジジイの名はガゴジというのさ。ナユタの家庭教師だが、ゼ口禅師のことは気にしなくてよからう。呪文をかなり使えるからな」

「僕たちはどうするの？ ほら、もうすぐナユタとネコマタが追いついてくるよ」

「それは気にするな。ナユタの呪文の力など知れているし、ネコマタはただ大きな猫でしかない。さあススムつかまれ。窓を破って飛び出すぞ」

お母さんの言葉にススムが身構えることができたのは、本当にギリギリのタイミングでしかありませんでした。

体当たりをして窓を突き破り、雨戸をコナゴナに壊して、ススムとお母さんは建物の外へ身をおどらせることになりました。

だけど強力な呪文がかけてあるのです。屋根に出ることはできません、ススムもお母さんも、天守閣の敷地を離れることは一歩もできないのでした。

ネコマタに乗ったナユタに追われ、結局お母さんは屋根の頂上で立ち止まるしかありませんでした。

お母さんがささやきました。

「さてススム、ここからが問題だ。ポケットから魔力の杖をお出し」

「うん、出したよ。ナユタも魔力の杖を持っているの？」

「もちろんさ。ナユタの腰をごろん。帯に突き刺してあるのが見えるだろう？」

「あの杖とお母さんの杖と、どちらが強いのか？」

「ほぼ互角であろうな。どちらも、父が私たち姉妹に与えたものだ」

「ああそうか。ナユタはお母さんの『おい』なんだね。それでも戦うの？」

「戦いたくなどないが、ナユタが仕掛けてくる以上、選択の余地はない。さあススム、ナユタが自分の杖を手にとったぞ」

正直に言って、ススムは杖を持つ手が小刻みに震えて仕方がありませんでした。張りのあるナユタの声があたりに響いたのは、このときのことだったのです。

「伯母上、おとなしく僕の手にかかるのだ。そうすればススムの命だけは助けてやろう」

これに対するお母さんの返事はあまり上品ではなく、こんなときなのに、ススムは目を丸くすることになりました。

「ふん、おととい来やがれ」

ナユタは表情を変えましたが、何も言いませんでした。そのままお母さんとにらみ合いを続けたのです。

このあと何が起こるのでしょうか。

胸をドキドキさせながらススムは待ったのですが、どうもおかしいのです。にらみ合うばかりで、ナユタもお母さんも何の行動も起こさないではありませんか。

ネコマタも同じようで、飛びかかってくる気配はありません。

そのまま30秒近くたったところで、とうとうススムは奇妙に感

じ始めました。

「どうなってるの？ お母さんもナユタもどうして動かないのかなあ」

それでも何も起こりません。キョロキョロして、ついにススムはお母さんの目の中をのぞき込んだりしましたが、お母さんは目玉を動かすどころか、まばたきだっしてしないではありませんか。

ナユタも同じ状態らしいと、ススムは気がつきました。ススム一人を残して、みんな凍りついたかのように動かないのです。

「一体どうなっちゃったのかなあ」

ススムはつぶやいたのですが、答えは意外なところからやってきました。

聞き覚えのある甲高い声が、突然頭の上から聞こえてきたのです。

「おいススム、それはオレのしたことだよ」

見上げると、あのフクロウがパタパタと舞い降りてくるところでした。

「やあフクロウさんか」

「ススム、オレをおまえの肩にとまらせてくれよ。お師匠様の体にとまると、呪文の魔力がオレにもかかってしまうんだ」

「呪文って？」

「オレが呪文をかけたから、お師匠様もナユタも凍りついたように動かなくなったのさ。ちょっとおまえに相談したいことがあってな」

「僕に？」

「そうさ。お師匠様とナユタのそれぞれの杖だが、この2本は本当に互角で、戦ってどちらが勝つかは誰にも予想がつかん。お師匠様が勝てばよいが、負けることだって十分考えられる」

「へえ」

「だからオレとしては、この戦いはなんとかやめさせたい」

「どうやって？」

「そこで相談なのさ。この戦いをやめさせ、仲裁することができないのは、どう考えても妖怪王様をおいて他にない」

「お母さんとラセツのお父さんだね」

「そうさ。怖い怖いカミナリ親父だ。妖怪王様を呼んで、この戦いをやめさせたいとオレは思う。そのためにオレは地底へ行ってくるが、勝手なことをしたと後でお師匠様に怒られるのはかなわん」

「そんなにお母さんが怖いのか？」

「ああ怖いね。あのラセツの姉だぞ。恐ろしくないわけがなからう？」

「ははあ」

「そこでだススム、後になって、もしもお師匠様が怒ったら、そのときはオレをかばって、おまえが味方になってくれるかい？ 味方になると約束してくれるのなら、オレは今すぐ妖怪王様を呼びにいつてくるよ」

もちろんススムは首を縦に振りました。お母さんが傷つくかもしれない戦いなど、うれしくもなんともなかったからです。

大きくうなずいてフクロウは飛び立ち、パタパタと音を立てましたが、こげ茶色をした姿は、夜の闇の中にすぐに見えなくなっていました。

フクロウがいなくなってから、お母さんとナユタはピクリともしませんでした。

どちらともまばたきをすることも、息をすることさえなく、再び動き始める気配を見せません。

お母さんの背中から降り、ナユタに近寄って、ススムは二つの魔力の杖を見比べてみたりもしました。二つの杖は、双子といったいほどそっくりでした。

ススムはもうすっかり退屈していたのですが、妖怪王がついにやってきたときには、心臓が裏返ってしまいそんな怖い気持ちがあったものでした。

地底に住み、何千もの妖怪たちを支配している王なのです。恐ろしく感じないはずがありません。

でもススムは、妖怪王の姿を見ることができたわけではないのです。親切心からでしょうが、真っ黒な煙の中にすっぽりと姿を隠して、妖怪王はススムの前へやってきたのです。

それはまるで、煙でできた生きた柱のような眺めでした。

妖怪王の声が、あたりに響きました。

その8

「ススム君といったかな？」

声がしわがれているので、やはり妖怪王は老人のようです。でも張りがあり、力を失っている様子はまだまだありません。

おそろるおそろるススムは返事をしました。

「うん」

「じかに会うのはこれが初めてだね。わしは姿を隠していて申し訳ないが」

「うん」

「君には、わしの娘が世話になっているね」

「あんまりしつけのいい娘さんじゃないね。さっきも『おととい来やがれ』なんて言ってたよ」

「ははは、きつとわしに似たのだよ。それはそうとフクロウの言うとおり、この争いをなんとかやめさせたいものだね」

「そうだよ。なんとかしてよ」

「ああ、このケンカはわしが責任を持ってやめさせよう。約束するよ。呪文がとけて、わしの娘が再び動けるようになったら、君からこれを手渡してくれるかい？」

黒い煙の中から、白い紙に書かれた手紙が差し出されたのは、このときのことでした。手袋をした手がつかんでいるということだけは、ススムも見ることができました。

「うんわかった。お母さんに手渡すよ。でもナユタはどうするの？」

「ネコマタと一緒に、今すぐわしが地底へ連れ帰るよ。ほらススム君、ごらん」

その言葉と共に黒い煙が大きく伸び、ヘビのように長くなって、あっという間にナユタとネコマタを包んでしまったのです。

このまま妖怪王は地底へと帰ってしまうようです。

「じゃあな、ススム君」

「あっ、ちょっと待ってよ。一つだけ質問してもいい？」

「どんなことかな？ わしだって、この世のすべての質問に答えることができるわけではないのだよ」

「お母さんのことなんだ。あの毛皮の下にいるお母さんの本当の姿を、僕は一度も見ることがない。でもお母さんはラセツの姉なんでしょう？ お母さんも、ラセツと同じあんな恐ろしい姿をしているの？」

「ふふふ、ススム君はそれが気になるのかい？」

「うん、少し」

「しかし困ったな。娘がどういう姿をしているかということとは、父親のわしですら軽々しく口にできないのだよ。それが妖怪世界の礼儀というもののさ」

「どうして？」

「妖怪とはそういうものなのだよ。だからススム君、わしの娘の姿のことは、本人にききたまえ。ああ、本人の口から聞くのが一番いいさ」

「なら、この質問には答えることができるでしょう？ お母さんは、妹であるラセツとよく似た姿をしているの？」

妖怪王がクスリと笑うのが、ススムの耳に届きました。

「今度はそう来たか。その質問ならわしも答えることができるよ。答えはノーさ。わしの娘は、ラセツとはまったく違う姿をしている。

ススム君、これで気がすんだかい？」

「うんわかった。ありがとう」

「どういたしまして」

その言葉を最後に、妖怪王は姿を消しました。黒い煙はあっという間に薄くなり、風に吹き散らされてしまったのです。同時に、ナユタやネコマタの姿も見えなくなったのは、いうまでもありません。

お母さんはすぐに動き始めました。そしてナユタの姿がないこと

に驚いたのです。

「ススム、ナユタはどこへ行った？」

ススムの口から事情を説明されて、お母さんはもつと驚くことになりました。

「なんだって？ 父が？」

「妖怪王は、お母さんにこの手紙を渡してくれと言ったよ。ほら」

「おまえは父と平気で口をきいたというのか？ 父は妖怪王だぞ。おまえは、なんとまあとんでもない子供ではないか」

「そう？」

「そうさ。父の前へ出ると、私ですら恐ろしさで身がすくむことがあるというのに。まあいい。まず手紙を読もう」

カワラの上にサッと広げ、お母さんは目を通し始めました。

「ねえお母さん、なんて書いてあるの？」

「ふふふ、私とラセツの間の戦争には、さすがの父も困っていたようだな。王国の妖怪たちまでが、ラセツ派と私派に分かれて、いがみ合いをはじめているときさ」

「それはよくないね」

「だから父はルールを変える気になったらしい。あの本を3冊全部

ではなく、最後に残った1冊を先に手に入れた者が王の跡取りになると決めたそうだ」

「それじゃあ、お母さんは不利になるね。せつかく2冊まで集めたのに」

「仕方がないさ。ラセツが死ぬという大事件があったのだ。ルール変更もやむをえないだろうよ」

「今までの2冊は骨折り損になったね」

「そうでもない。最後の1冊を父がどこに隠したのか、2冊の中に手がかりが書かれているかもしれないではないか。この競争は、依然として私が少し有利なのさ」

ススムは「ふうん」と言いかけたのですが、背後から突然ガタンと音が聞こえ、驚いて振り返ることになりました。

「あっ禅師」

その言葉どおり、下の階へ続くハシゴの扉を押し開け、ゼロ禅師が顔をのぞかせていたではありませんか。

「やあススム君、戦いはどうなったのかな？」

「ガゴジはどうなったの？」

「わしと呪文合戦を続けていたのだがね。なぜか突然姿が見えなくなってしまったのさ。そんな呪文をかけた覚えはわしにはなく、不思議に思っているのだよ」

「呪文合戦かあ。おもしろいだろうね。見たかったなあ」

「いやいやススム君、そんなに期待してもらえないものではなかったのだよ。ガゴジが呪文で大グマを作り出したものだから、わしもさっそく対抗しようとしたのだが、呪文を間違えてね。」

出てきたのはなんと、小さなイタチだったじゃないか」

「へえ」

「だから負けを覚悟したのだが、意外にもこのイタチが健闘してくれてね。大グマの背にのぼり、ひっかくは、かみつくは、なかなかの勝負だったのだよ」

お母さんが口を開きました。

「ススムの話では、ついさっきここへ妖怪王がやってきてな。家来ともどもナユタを地底へ連れ帰ったそうだ」

「すると、あんたとナユタの間の争いは決着がついたということかな？」

「とんでもない。最後の1冊をめぐって、これから続くのさ。まあしかし、今夜はこれですんだ。さあススム、私の背にお乗り。家に帰ろう」

「禅師はどうするの？」

ゼロ禅師はにっこりと微笑みました。

「わしは歩いて帰るよ。市職員たちに会って、妖怪退治の自慢話でも聞かせてもらおうことにしよう。ススム君たちは気にせずお帰り」

ススムたちは、その言葉に甘えることにしました。本当の話、疲れきってススムは、もう少しでまぶたがくつついてしまいそうだったのです。

猫坂城から家まで、お母さんは普段よりもずっと静かに、体を揺らさないように走ったに違いありません。お母さんの背中の上で、ススムはいつの間にか眠り込んでいたではありませんか。

寝息を立てながら、ススムは夢を見ていたかもしれません。

それがどんな夢であったのか知るすべはありませんが、お母さんの背中でゆりかごのようにゆられ、小さな声で口ずさまれる子守唄に包まれていたのです。

とても楽しい夢だったのは、間違いありません。

本を見つけた

学校で授業を受けているススムのところへ、ある日なんと、お母さんから電話がかかってきたのです。

担任の先生に呼ばれ、どうしたのだろうと首をかしげながら、ススムは職員室へと走ってゆきました。

「もしもし、お母さん？」

受話器を耳に当てると、間違いなくお母さんの声で返事がありました。

「ススム、ちょっときくのだが、まさかおまえのところへ私の毛皮が来てはいまいね？」

「毛皮って、妖怪ギツネの毛皮のこと？　また部屋の中に干していて、行方不明になったの？」

「そう人を責めるものではないよ。小さなほつれができたので、修理しようと道具を探していたのさ。目を離したのは、ほんの何分間かにすぎないのだよ」

「またお姉ちゃんが着ちやったのかなあ」

「しかしミチコは、今朝もいつものように学校へ出かけたろう？　原因は何か他のことに違いない。まあいい。おまえのところへ行っていないのなら、他を探してみよう。邪魔をしたね」

「うん」

電話はここで切れてしまいました。

教室へと戻りながら、お母さんの毛皮のなぞを解こうと頭を悩ませたのですが、ススムはいやな予感がして仕方ありませんでした。

電話がかかって来たり、訪問者があったり、学校にいても、この日はススムにはとても忙しい一日でした。

訪問者があったのは授業中のことで、開いたままだった窓からパタパタと飛び込んできたのです。

もちろんあのフクロウでした。先生や同級生たちに見つからないように、ススムは大急ぎで机の中へ隠さなくてはなりませんでした。狭苦しい場所に押し込まれ、不満そうでしたが、フクロウは文句を言いませんでした。ススムだけに聞こえる声で、そつとささやいたのです。

「おいススム、大事件だぞ」

「どうして？ お母さんの毛皮のこと？」

「もちろんさ」

「お母さんから大体のことは聞いたよ」

「ミチコがちゃんと学校にいることは、オレ自身が行って、いま見てきたところだ。今回はミチコは関係ない」

「うん」

いつの間にかススムは、フクロウとの会話に夢中になっていたに違いありません。知らず知らず声が大きくなっていることに気がつかなかったのです。

それが先生の耳に入らないわけがありません。

ジロリと目を上げ、先生はススムをにらみつけたのです。そして声を上げました。

「そこの君、何をコソコソしゃべっているのだね」

ススムは胸がドキンとしたのですが、もう手遅れです。ひどく怒られるに違いありません。

ところがここで意外なことが起こりました。

「うるさいよ。話の邪魔をしないでくれ」

そういう声があたりに響いたのですが、声の主はもちろんフクロウでした。ススムの机の中からピョンと飛び出し、教室中を見回したのです。

「だめだよ、フクロウさん」

ススムは止めようとしたのですが、遅すぎました。小さなクチバシを動かし、フクロウはあっという間に呪文をとнаえてしまったではありませんか。

何が起こるのでしょいか。

いろいろと悪いことを想像して息をのみましたが、何秒もたつてから、ススムはおそろおそろまわりを見回すことができました。

そして気がついたのです。先生をはじめ、同級生の誰一人として、身じろぎもしません。息をすることも言葉を発することもなく、凍りついたように動かないのです。

まるで人形ばかりが並んでいる部屋のような眺めではありませんか。

ススムはまだキョロキョロしていますが、フクロウは平気な様子です。

「ではススム、話の続きをしよう」

「この魔力はあんたがやったことなの？」

「先生や同級生たちを黙らせたことかい？ もちろんオレの仕業さ。人間を黙らせるのは得意中の得意なんだ」

「それならいいけど……。それで、なくなった毛皮をお母さんは探してるの？」

「そうとも。かなりの大騒ぎになりつつある」

パタパタと羽ばたき、石像のように動かない先生の鼻にフクロウがとまったので、ススムはクスリと笑ってしまいました。

「フクロウさん、その鼻はとまり心地がいいかい？　大騒ぎって何なの？」

「お師匠様は、例の本を2冊ともあの毛皮の内部に隠しておられた」

「うん」

「ナユタなら、こう考えるのではないかね？　毛皮ごとあの2冊をどこかへやってしまえば、3冊目を探すにあたり、お師匠様はかなりの苦勞を強いられるであろう。なにしろ、有力な手がかりを失うのであるから」

「あの2冊の内容が、3冊目を探すのに役立つの？」

「お師匠様はそう考えておられる。ナユタもそう考えておろう」

「じゃあ何かの呪文を使って、ナユタはお母さんの毛皮を遠くからあやつったんだね」

「その可能性が高い。毛皮の行方を探すため、お師匠様は地底から家来たちを呼ぶことにした。だからススム、おまえもお手伝いをするのだ」

「僕が？　学校があるのに？」

「何を言う？　今日の授業はもうあと1分で終わりだ。時計を見なよ」

あわててススムが視線を走らせると、なんとフクロウの言うとお

りだったではありませんか。

クラス全体にかかっていた呪文をフクロウがとくと同時に、授業の終わりを知らせるベルが鳴り始めたのです。

校舎の外へ出ると、すぐにフクロウが口を開きました。

「ようしススム、これを着るんだ」

クチバシの先で引っかけ、フクロウが翼の下からさっと取り出したのは、以前も見たことのある銀ギツネの毛皮でした。

「あっそれ……」

「前にも一度着たことがあるだろう？　まず忘れずにこの指輪をはめるんだ。そうしないと取り付かれて、おまえ自身が妖怪ギツネになってしまうからな。よし、それでいい」

毛皮の中へ体をもぐりこませると、とたんにおなかのボタンがパチンパチンととまってゆくのを感じながら、ススムは言いました。

「僕はどこを探せばいいの？」

「どこでもいいさ。妖怪ギツネの毛皮には、仲間を呼び寄せる力がある。それが勝手に働くから、適当に歩いているだけで、しだいしだいに目標へと近づいてゆくのだ」

「お母さんの家来たちも、みんなこの毛皮を着て、町の中を歩き回る予定なの？」

「だから今夜は、猫坂の町には妖怪ギツネがわんさか集まることになる。見かけたら、あいさつぐらいしろよ」

「うん、わかった」

こうしてススムの冒険が始まったのです。

体中の筋肉をバネのように使い、学校の塀を軽々と乗り越え、ススムは町の中へ飛び出してゆきました。

妖怪ギツネの目を通して見る町の風景は、普段とはまったく違っていました。

妖怪ギツネの視力は、どんなに小さな物も見逃さず、耳はどれほど小さな音でも聞き逃すことはなく、鼻はありとあらゆる匂いをかぎわける力がありました。

たとえば、通りのずっと向こうの家で調理されている料理の種類でさえ、ススムは知ることができたのです。

しかし遊んではいられません。お母さんの毛皮の行方を追わなくてはならないのです。食べ物匂いの誘惑を押しつけ、ススムは走り続けました。

といっても、道路を行ったわけではありません。お母さんがいつもやるように、ススムも電柱の頂上をジャンプして駆けていったのです。

だけど太陽が傾くころになっても、妖怪ギツネの姿どころか、手がかりさえつかむことはできませんでした。

体は疲れていましたが、ススムはそれ以上にあせりを感じ始めていました。もしもあの2冊を取り戻すことができれば、お母さんはどれほどがっかりすることでしょう。

ススムの目があるものを見つけたのは、太陽がすっかり沈み、あたりが暗くなるころのことでした。何百メートルも遠くですが、ススムと同じように、電柱の上を走っている者がいることに気がついたのです。

足に力を込め、ススムはスピードを上げました。相手はあまり速くはなく、だんだんと近づいてゆくことができました。

あちらも妖怪ギツネの姿をしています。

しかも大きさといい、毛の色や模様といい、お母さんのあの毛皮であることは明らかでした。いつも目にしているススムが見間違えるはずはありません。

足をゆるめ、少し距離をとって、ススムはあとをついてゆくことにしたのです。

あの毛皮の足取りや走り方が、どうも奇妙に思えたからです。きちんとしているとは、とても言えず、まるで酔っ払っているかのような走り方ではありませんか。

遠くから魔力であやつられている毛皮とは、ああいう走り方をするものかもしれません。

何分かの間、ススムは駆けつづけたのですが、やがてもう一つお

かしなことに気がつきました。あの毛皮を追跡しているのは彼一人ではなかったのです。

もう一人の追跡者も、同じように妖怪ギツネの姿をしていました。ススムがいるのよりも一本西の道路ですが、やはり電柱の上を走っているではありませんか。その視線は、ススムと同じように、あの毛皮を見すえているのです。

相手も同時にススムの存在に気がついたようでした。今度はチラチラとこちらに視線を向け始めたのです。

「あれはお母さんの家来の一人なんだろうか」とススムは思いました。

でも油断はできません。とにかく今は、まず毛皮の行き先を突き止めるべきでしょう。

もう一人の追跡者が突然進路を変え、こちらへ近づいてくる気配を見せたとき、ススムは少し驚きました。あっという間にこちらの道路へやってきて、ススムの隣に並んだではありませんか。

そしてススムに話しかけてきたのです。

「やあ、君はとても上等な毛皮を着ているじゃないか」

ススムにはよく意味がわかりませんでした。

「そうなの？　でもあんたの毛皮だって、僕と同じ銀色の毛だよ」

「もちろんさ。妖怪王国では、銀ギツネの毛皮は王子しか身につけることが許されていないからね」

「王子って？」

「王子といえば王子さ。僕は妖怪王国の王子ナユタだ。ラセツの息子さ。君は…、ススムだね」

驚いてススムは電柱の上から落ちてしまいそうになりましたが、なんとかバランスを取り戻すことができました。

「僕がススムだと、どうしてわかったの？」

「それぐらい簡単さ。その毛皮はヤマメから貸してもらったのかい？」

「ヤマメってだれ？」

「あれ知らなかったのかい？ 妖怪ギツネの毛皮を着て、君の家の柱の中に住んでいる女妖怪のことさ」

「ああ、お母さんのこと？ お母さんの名前って、ヤマメというのか」

「魔力を使って、ヤマメは君の母親の姿に化けているんだったね」

「うん、ちょっと事情があるんだ…」

「そうかい？ とにかくススム、君がいま着ている毛皮は、本当はヤマメの息子の所有物なんだよ。それを貸してもらえるなんて、君

はヤマメから相当気に入られているらしいね」

「へえ、そうなの」

「それはそうとススム、実は君に少し相談したいことがあるんだ」

「何さ？」

「もちろん例の本のことだ。あの3冊目だよ。あの本をめぐって、僕とヤマメは激しく争っているわけだ」

「うん」

「でもその争いを少しの間、休戦したいんだよ。足の引っ張り合いはやめて、本を手に入れることに専念したいんだ」

「どうして？」

「噂で聞いたのだが、3冊目の本を、妖怪王はとんでもなく困難な場所に隠したのだそうだ。一筋縄どころか、持てる魔力をすべてそいでも、おいそれとは近づけない所らしい」

「へえ」

「しかも本は、非常に強力な護衛によって守られてもいるらしい」

「護衛ってなんだろうね。呪文？ それとも怪物かなあ」

「それはわからない。その両方かもしれない。だからススム、本を手に入れるまでは、君と僕の二人で協力しないか？ 二人で力をあ

わせて、本を手に入れるんだ」

「そのあとはどうするの？ 君かヤマメの息子か、どちらが次の王になるのさ？」

「それはまたそのときに考えればいいじゃないか。本が手に入ったあとで、ジャンケンをして決めたっていい」

「そんなことでいいの？」

「ははは、かまやしないさ。母と違って、僕はあまり王位にこだわりはないんだよ。たとえ王になれなくたって、王の弟というだけで十分幸せな人生を送ることができるじゃないか。そうは思わないかい？」

「うーん、僕にはよくわからないや。僕は妖怪じゃないもん」

「そうだったね。それでススム、休戦の申し入れを受け入れてくれるかい？」

「だけとお母さんがどう言うかなあ」

額にしわを寄せてススムは考え始めたのですが、次の出来事が起こったのは、その瞬間のことでした。ナユタが声を上げたのです。

「おやススム、見てごらんよ。毛皮の動きが変わったぞ。それにほら、あれは一体なんだ？」

視線を向けて、ススムも目を丸くすることになりました。

あたりはすっかり暗くなっていました。空はまだ明るく光っています。

その光を受けて姿を現し、ある物が輝き始めていたのです。毛皮は、それに向かって一直線に進んでいるのです。

それは巨大な城だったのですが、それまで何もなかったところに突然現れたばかりでなく、そのあまりの光景に、ススムもナユタも思わず立ち止まってしまったのです。

この城はまるで幻のように高い空に浮かんでいたのですが、それが普通の向きではないのです。鏡に映った像のように上下逆になり、屋根を下へ向けて逆立ちをしているのでした。

あれではまるで、空に貼り付けられているかのような眺めではありませんか。そういう上下逆さまの奇妙な城が、二人の前に不意に姿を現したのです。

ふだんは魔力で姿を隠している城が、あの2冊を受け入れるために門を開いたのでしょうか。

城の姿を目撃して、ススムの声は少し震えていたかもしれません。

「ナユタ、あれは何なの？」

「なんと、真の猫坂城とはあれのことだったか」

「猫坂城って？」

「3冊目の本は猫坂城に隠されている。それは僕も知っていた。だ

から先日、僕は猫坂城へ行き、カワラを一枚一枚はがして探したのさ。そこへ君とヤマメがやってきて、最後は妖怪王まで姿を現す大騒ぎになってしまったじゃないか」

「うん」

「だが僕は間違っていたようだ。いま気がついたよ。3冊目の本が隠されているのは、地上にある猫坂城ではなく、空から逆さまに生えているあの城のことだったんだ」

「あっ、あの毛皮がジャンプしたよ。あの城の中へ入ってゆくみたいだ」

「あの毛皮に呪文をかけたのは僕さ。今朝、ヤマメがほんの少し目を離れたすきに、仮の魂を与えてやった。内部に隠されている2冊が毛皮をあやつって、3冊目が隠されている場所へ案内してくれることを期待してね」

「そうだったのか」

「それが図にあたったわけだ。僕はただ、毛皮のあとをついていけばいいと思っていた。しかし毛皮が、あの城の中へ入っていきこうとするとほね」

「あっ、毛皮がジャンプしたら、空中城の門が開いたよ」

「城は2冊を受け入れるつもりだな。しかしススム、急がないとあの門はすぐに閉まってしまうぞ。城内へ入るのなら今しかない。いいか？ 全力でジャンプするんだ」

ススムには考えている余裕などありませんでした。気がついたときには全身の筋肉をいっぱいに使い、ナユタのあとをついて、空中へ身をおどらせていたのです。

驚いたのは、空中城の内部には人っ子ひとりおらず、シーンと静まり返っていたことでした。

ススムはおそろるおそろる口を開きましたが、声はまわりの壁に吸い込まれるばかりだったのです。

「ねえナユタ、ここには誰もいないのかな」

「そうらしいね。それよりもおもしろいことがある。ススム、上を見てください」

言われたとおりにして、ススムは小さく悲鳴を上げてしまいました。

ここは、空の上に逆さまに浮かんだ城の庭なのです。見上げたススムの頭上に猫坂の町の風景がそっくりそのまま広がっていたのは、言ってみれば当たり前かもしれません。

町の様子はいつもと変わらず、道を行く人々や自動車、走る電車の姿だって見ることができました。

ススムは言いました。

「上下逆さまに見上げる町の風景って、奇妙なものだねえ」

「さあススム、早くあの毛皮を探そう。広い城だから、二人で手分

けをしたほうがいいな」

それはススムにはあまり気の進まないことでした。勢いでここまで来てしまったけれど、本当は薄気味悪く感じて仕方がなかったのです。

「だけど…」とススムは言いかけたのですが、なんということでしょう。気がつくとナユタはもう駆け出し、曲がり角を通過してサッと姿を消すところだったではありませんか。

あわてて追いかけてましたが、ススムはうまく追いつくことができず、姿を見失ってしまいました。

立ち止まり、ススムは途方にくれました。どんな敵がいるかも、何が隠れているかもわからない城に独りぼっちになってしまったのです。

だけどじつとしていても、どうにもなりません。ゆっくりと慎重にですが、とにかく歩き始めることにしたのです。

城の内部にはいろいろな部屋がありました。広い部屋、狭い部屋、今は何もなく空っぽだけれど、倉庫と思われるところ。

台所や食堂だって見つけることができました。でもやはり人っ子ひとりいないのです。

だけどそれも、いつまでも続くわけではありませんでした。

ある広間を通り抜けようとしたときでしたが、「しいっ」という声と共に突然しっぽを引っ張られ、ススムは驚いて振り返ることに

なりました。

誰かの手がススムのしっぽをつかんでいるのです。ススムは、太い柱の影へとそのまま引き入れられることになりました。

そこにいたのは、ナユタだったではありませんか。いつの間にか毛皮を脱ぎ、少年の姿に戻っていますが、その手がススムのしっぽをつかんでいたのです。

ナユタが言いました。

「ススム、これ以上は先へ行くんじゃない」

「どうしてさ？」

「あれをごらんよ」

柱の影から首を伸ばして、ススムはおそろおそろのぞき込むことになりました。

そしてなんと、まず目に入ったのが1冊の本だったのです。

お母さんが持っている2冊とよく似た形をしていますが、表紙の色はわずかに違うようです。3冊目であるのは間違いありません。

だけどそれが、すぐに手の届く場所にあるわけではないのです。

さっきのあの毛皮がそこにいるのですが、なんと本は、その口の中にしっかりとくわえられているではありませんか。巨大な妖怪ギツネの口の中というわけです。

妖怪ギツネは腹ばいになり、油断なくまわりを見回しています。

ススムはささやきました。

「ねえナユタ、あの毛皮はさつきよりも一回り大きくなったような気がしない？」

「君も気がついたかい？ 3冊の本が一ヶ所に集まったことで発生した魔力を吸いこみ、やつはより強い妖怪へと変化をとげてしまったようだ。普通の妖怪ギツネを相手にするようには、もはやいいぞいぞ」

「じゃあどうするの？」

「それは僕たち二人で考えるしかないのさ。助けてくれる人はどこにもいない」

柱の影に隠れたまま二人は悩みましたが、いい知恵はなかなか浮かびませんでした。面倒くさくなって、ススムはどうとう自分の毛皮を脱いでしまいました。

そのとき、ススムのポケットに入っていたある物がナユタの目にとまったのです。

「そうかススム、君も魔力の杖を持っているのだったね」

「お母さんが貸してくれたんだよ。近ごろは妖怪が多くて物騒だからって」

すぐにナユタも自分の杖を取り出しました。

「ススム、この2本の杖を用いれば、あの本を手に入れることができるかもしれないぞ」

「どうやって？」

「それがわからないから、杖に相談しようというのさ。君の杖を貸してくれるかい？ ほら、こうやって2本を並べて床に置いてみよう」

「そうしたらどうなるの？」

「まあ見ていてごらん。ほら、2本の杖が話し合いを始めた。本当に会話しているかのように、2本が交互にプルプル小さく震えているじゃないか」

本当にナユタの言うとおりだったのです。2本の杖はしばらくの間ふるえ、話し合いを続けました。

やがて結論が出たのでしよう。ピタリと動かなくなりました。

ススムが言いました。

「話し合いはすんだらしいね」

「どういう結論が出たのやら。さあススム、自分の杖を手取るんだ。ここからは杖の言う通りに行動することになる。何が起ころう、あわてるのではないよ」

「うん」とススムはうなずいたのですが、本当は胸がドキドキし始めていました。

魔力の杖が2本とも、ぼんやりと輝き始めたのは、そのときのことでした。

「これから何が起ころのだろう」と、ススムとナユタは息をのんで見つめたのです。

杖はどうやら、二人を何かに変身させるつもりのようにでした。光はやがて二人の体を包み始めたではありませんか。

光がついに消えたとき、目を丸くして、二人は互いの体を見つめ合うことになりました。続いて自分の姿にも気がつき、もう一度目を丸くしたのです。

なんと二人とも若い僧侶に姿を変えていたのです。どちらも頭は丸坊主で、黒い僧服を着ていました。

「ねえナユタ、この格好で何をすればいいのかな？」

「君も僕も肩からカバンをさげているね。中身を調べてみようよ。何かわかるかもしれないよ」

二人はカバンの中を調べました。そして少し相談をし、ついに立ち上がり、歩き始めたのです。

むかう先が、本をくわえている巨大な妖怪ギツネの目の前だったのは、いうまでもありません。

妖怪ギツネはすぐに二人に気がつきました。首を持ち上げてジロリと視線を走らせましたが、もちろん本は離しません。

二人は歩きました。妖怪ギツネまでの距離はどんどん近くなっています。

ススムは思わず冷や汗が出ましたが、体が震えるようなことはなく、恐ろしさを表情からなんとかうまく隠すことができました。

驚いたのは、ナユタがまるで、妖怪ギツネなどそこにはいないかのごとく行動することでした。ススムを連れ、相手のすぐ目の前に、当たり前のように座ったではありませんか。

向かい合って、二人はあぐらをかいたのです。最初に口を開いたのはナユタでした。

「ああススム、腹が減ったな。僕はリンゴを持ってるんだ。食うかい？」

カバンの中に手を入れ、新鮮で真っ赤なリンゴをナユタは取り出しました。

「うん」

手を伸ばし、ススムは受け取ろうとしました。ところがナユタは手渡してはくれなかったのです。

「やめた。やめたよ。リンゴ丸ごと一つやるのはもったいないな。ただもらうだけじゃなくて、何かと交換してくれよ」

「交換？ 何がいいかなあ」

自分のカバンの中をのぞき込み、ススムはゴソゴソと探し始めました。そして指先でつまんで取り出したのが、なんと1匹のカエルだったのです。

「そのリンゴ、このカエルとなら交換してもいいよ」

「カエルかい？ きれいな緑色をしているな。ペットによさそうだな。だけど、そんないいカエルをただでもらっては申し訳ない気もするな。僕は君にこれをやるよ」

そういつてナユタは、カバンの中から鉛筆を取り出したのです。

ススムが言いました。

「へえ、きれいな色の鉛筆だねえ。それに新品だ。とてもうれしいよ。じゃあお返しに、僕はこれをあげるよ」

その言葉と共にススムがカバンから取り出したのは、ほかほかと湯気の立つ作りたてのハンバーガーなのでした。

会話のはじめから、妖怪ギツネはじつと聞き耳を立てていました。最初はあまり興味もなかったのでしょうか。

だけどリンゴが現れ、それがカエルに変わったところで意外さに興味を引かれ、次に鉛筆が来て、最後にハンバーガーが現れたときには、見事に不意をつかれてしまったのです。

ハンバーガーのおいしそうな匂いは、妖怪ギツネの鼻を強烈に刺

激したに違いありません。もうどうにもあらがうことができず、大きく口を開け、妖怪ギツネは、ススムの手から思わず奪い取ってしまったのです。

するともちろん、本はパタンと床に落ちてしまうことになります。

この瞬間をナユタが見逃すはずはありませんでした。とっさに本をつかみ、大きな声で呪文をとなえたのです。

「本よ、僕とススムを安全な場所へ今すぐ連れていってくれ」

意味に気がつき、妖怪ギツネは目をむきましたが、もう遅かったのです。

ナユタが呪文をとなえ終わったかと思うと、空中城の風景も妖怪ギツネの姿も一瞬で消え、思いがけないまったく別の場所に自分がいることにススムは気がつきました。

この場所に見覚えがないのか、ナユタはキョロキョロしています。が、ススムは違いました。おなじみの場所だったのです。

ゼロ禅師の声が突然聞こえました。

「ススム君、これはこれは、いつの間にやってきたのだい？」

ススムは振り返りました。ここはゼロ禅師の寺の中だったのです。

「ああ禅師」

「いつの間にやってきたのか、わしはまったく気がつきなかったよ。」

「おや、隣にいるのはナユタ君かな？」

ナユタはにっこりと笑いました。

「やあゼロ禅師、今夜はネコマタもガゴジも一緒ではないから、気にすることはないよ」

「ああ、ガゴジとは、君の呪文の先生のことだったね。しかし君たち二人は、こんな時間にここで何をしているのかな？」

説明しようと唇を開きかけたのですが、言葉がススムの口から出ることはありませんでした。空中城から追ってきたに違いありません。窓を突き破り、あの妖怪ギツネが突然部屋の中におどりこんできたのです。

大きな音と共に窓ガラスが飛び散りましたが、すぐに立ち止まり、妖怪ギツネはススムたちをにらみつけることになりました。怒りと憎しみで、その目は蛍光灯のように輝いているではありませんか。

さすがのゼロ禅師も驚きを隠せない様子です。

「ススム君、これは君の家に住んでいる妖怪ギツネではないのかな？」

「それがちょっと事情があって、今は別の妖怪に変化しちゃってるんだよ」

「そうか。その妖怪がその本を追ってここへ来たわけだね」

ナユタが言いました。

「禪師、気をつけたほうがいい。こいつは並みの妖怪ギツネとは魔力の強さが違う」

「それはわしも感じていたよ。そばにいただけで、まるで静電気でも受けているかのように肌がチリチリする。ススム君、君は魔よけの指輪をしているのが見えるが、あの銀ギツネの毛皮はどこにあるのだい？」

「えっ？　しまった。空中城に忘れてきた」

ナユタが口を開きました。

「心配することはないさ、ススム。僕がすぐに呼び戻してやるよ」

そういう終わると同時に、ナユタは呪文をとなえたに違いありません。何秒も立たないうちに、まるで空飛ぶジュウタンのようにフワリと飛んで、銀ギツネの毛皮が窓から飛び込んできたではありませんか。

大急ぎでススムがそれを身につけたのは、いうまでもありません。

妖怪ギツネはキバを見せてうなっていますが、今はゼロ禪師とにらみ合っているだけです。ゼロ禪師の呪文の力に警戒しているのかもしれません。

そのすきに、ススムとナユタは大急ぎで言葉をかわしたのです。

「ススム、この本を持って、君はすぐにヤマメのところへ行くんだ。そうすればヤマメの息子が王になることができる」

「でもそんなことをして、君はどうなるのさ？」

ナユタはゆっくりと首を横に振りました。

「ヤマメの息子か僕のどちらが王になるとか、そんなことを言っている余裕はもうないんだよ。見てごらん。本の魔力を受けて、あいつはこんなに強力な妖怪に成長してしまった。

僕とゼロ禅師が力をあわせても、もはや退治できるかどうかかわからない」

「そんなにすごい妖怪なの？」

「だがその本を無駄にすることはできない。ヤマメのところへ持っていく、息子を王位につけてやってくれ」

「でも…」

「行くんだススム。ヤマメなら、本を安全に隠すことができる場所を知っているだろう。そのあと気が向いたら、僕とゼロ禅師の手伝いに来るよう頼んでみてくれ」

何か答えようと思ったのですが、もうススムはどんな言葉も思いつくことができませんでした。黙ってうなずき、本を口にくわえ、駆け出すほかなかったのです。

裏口から飛び出し、ススムはいつものように電柱の上へと駆け上がりました。足に力を込めてスピードを上げると、ゼロ禅師の寺はあっという間に小さく遠くなってしまいました。

ススムはもちろん全速力を出しました。ゼロ禅師の寺から家まで、
そう遠い距離ではありません。

だけどなんということでしょう。ちょうど電線の工事が行われて
いて、ススムは何百メートルか遠回りをしなくてはならなかったの
です。

一度ススムは、チラリと寺のあたりを振り返りました。ゼロ禅師
とナユタがどんな戦いをしているか気になったからです。

でもススムの期待は、大きく裏切られることになりました。妖怪
ギツネは、なんと彼のすぐ背後にいたではありませんか。

ススムには、口をポカンと開ける暇さえありませんでした。気が
つかなかっただけで、寺からずっとあとをつけられていたに違いあ
りません。

妖怪ギツネは、さっきよりもさらにひとまわり巨大化したように
見えます。牙をむき、ものすごい顔で追いかけてくるではありません
か。もう妖怪ギツネというよりも、怪物ギツネと呼ぶほうがふさ
わしいかもしれません。

それだけではありません。次の瞬間、ついにススムに攻撃を仕か
けてきたのです。

ススムの体に引っ掛け、ケガをさせようというのでしょうか。怪物
ギツネは、ツメの生えた長い前足を伸ばしてきます。

全力で走りながら、ススムは必死でよけるしかありませんでした。

それでも怪物ギツネは攻撃をくりかえします。ススムはなんとか攻撃をかわし続け、自分の家の屋根がやっと視界に入ってきました。

このころには、ススムの毛皮はもうかなりボロボロにされています。長いツメでいくつも傷をつけられ、引き裂かれていたのです。

それでも、かろうじてまだ走り続けることができました。ただ、次の瞬間、ススムは最後の致命的な攻撃を受けることになったのです。

ススムの毛皮は、とうとう完全に引き裂かれてしまいました。体が空中へポンと放り出され、それでもなんとか転落はまぬがれて、ススムはギリギリで電線からぶら下がることができました。

いまや、細い電線だけがススムの体を支えているのです。ぶら下がることで両手はふさがり、魔力の杖はポケットの中にあり、本はズボンのベルトに押し込んであるのです。

これでは反撃も何もできなかったものではありません。

怪物ギツネはいったんススムの頭の上を通り過ぎましたが、すぐにまた戻ってきました。あの大きな体なのに、電柱の頂上に器用に立ち止まり、うれしそうにニヤリと笑って見下ろすのでした。

もうこれまでかと、ススムも覚悟を決めるしかありませんでした。でもそこに味方が現れたのです。

その味方も妖怪ギツネの姿をしていました。ススムの家のある方向から地面の上を全速力で駆けてきましたが、前足を伸ばして本を

はたき落とそうとする憎い敵の鼻先をかすめて、ススムをサッと連れ去ったではありませんか。

気がついたときには、ススムはその妖怪ギツネの背中の上にいました。聞き覚えのある声が、すぐにススムの耳に届くことになりました。

「ススム、私の背中におつかまり。落ちないように、しっかりとつかまるのだよ」

お母さんの声だったのです。

「お母さんなの？ あれ？ この毛皮はどうしたの？」

「フクロウに命じて、新品を一つ取り寄せたのさ。それがようやく間に合ったというわけだ」

「怪物ギツネが追いかけてくるよ」

「あれが元は私の毛皮だったのかい？ よくも巨大化したものだな」

「本の魔力を吸い込んだからだよ。ほら、3冊目がここにあるよ」

電柱の上を駆けながらチラリと目を上げ、お母さんは満足そうに微笑みました。

「これで私の息子が王になったも同然というわけか。もつとも、その前にあの怪物ギツネをなんとか退治しなくてはならんが」

「退治するのはとても難しいとナユタが言ってたよ。魔力を吸い込

んで、まったく新しい妖怪に生まれ変わっているからだって」

「ああ、私の目にもそう見えるよ。とにかくまず、その本を父のところへ届けよう」

「お父さんって、妖怪王のこと？」

「もちろんさ。父の目の前にこの本を見せ、私の息子の即位を認めさせてやる。怪物ギツネ退治は、そのあとで考えよう」

「でもお母さん、この本は僕とナユタが協力して手に入れたんだよ。お母さんの息子とナユタのどちらが王になるかは、手に入れたあとで決めることにしていたんだ」

「それは私の知ったことではないね。いま私はその本を手に入れたのだ。おまえがなんと言おうと、私は父のところへ持っていく。邪魔するのならおまえでも容赦せぬし、もしもナユタが異議をとなえたら、頭からバリバリ食い殺してやるまでのこと」

「お母さん…」

「ススム、息子のこととなれば、母親とはこれほど必死で、おろかで恐ろしいものなのだよ。おまえも覚えておくがいい」

「僕の本当のお母さんはもう死んじゃったよ」

「ふん、そう思っているがいいさ。ところでススム、怪物ギツネはまだ追いかけてきているのだな？」

「もちろんそうだよ。お母さんに出し抜かれて、頭から湯気を出し

てる」

「いいぞいいぞ。もっと怒ればいい。怒れば怒るほど冷静さを失うのだから」

「これからどうするの？」

「今も言っただろう？ 私たちは妖怪王国へ向かうのだよ」

ところがお母さんのもくろみ通りにはいかなかったのです。恐れをなして王国の門番は、ススムたちの鼻先で入口を固く閉ざしてしまったのです。

怒り狂った怪物ギツネがススムたちのあとを追っているという知らせは、すでにここまで届いていたでしょう。門番は言いました。

「いくらヤマメ様であっても、今はお通しするわけにはいきません。あの怪物ギツネを王国へ一歩たりとも入れるわけにはいかないのです」

「私が妖怪王の娘であってもか？」

「ヤマメ様を入れるなどは、その妖怪王様の命令なのです。こうしている間にも、いつ怪物ギツネが姿を見せるかもしれません。その本を持って早くお逃げにならないと、つかまってしまいますぞ」

こうまで言われてしまうと、さすがのお母さんも返す言葉がありませんでした。身をひるがえし、猫坂へと続く道を取って返すほかなかったのです。

お母さんはとても機嫌を悪くしていました。

「なんということだススム、私たちは妖怪王国への立ち入りを拒否されたのだぞ」

「あの怪物ギツネが入ってきたら困るからでしょう？ 仕方がないよ」

「仕方がないですむものか。私はおまえのように物分りよくはなれぬ」

「これからどうするの？」

「まず第一に、怪物ギツネに追いつかれる前に猫坂へ戻ることだ」

「だけどお母さん、この道を走っていて怪物ギツネに出会うことはないの？ やつは僕たちを追いかけてくるんでしょう？」

「妖怪王国と猫坂の間には、2本の街道がある。私たちは行きは東街道を通り、今は西街道を走っているとこさ。だからやつと鉢合わせする心配はない」

「でも、いずれ追いついてくるよ」

「だからその前に、退治する方法を考え出さなくてはならないのさ」

「どうやって？」

「まあ見ておいで。私にアイディアがある」

ところがお母さんのアイディアもうまくはいきませんでした。

ススムを背中に乗せて走り続け、猫坂製鉄という会社の溶鉱炉の入口へ怪物ギツネをおびき寄せたまではよかったのです。

溶鉱炉というのは、高い温度でドロドロに溶けた鉄の入っている巨大な容器ですが、怪物ギツネをそこに突き落としてしまおうという作戦でした。

しかし怪物ギツネは予想以上に頭がよく、お母さんの期待通りに足を滑らせてはくれなかったのです。

結局、煙を吸い込んだススムがゲホゲホとせきをしただけに終わってしまい、二人はまったく成果なく製鉄所を離れるしかありませんでした。

ススムが言いました。

「お母さん、このあとどうするの？ 怪物ギツネはまだ追いかけてくるよ。僕はもう煙を吸い込むのはいやだからね」

「文句を言うのはおやめ。私も精一杯やっているのだよ」

「あっ、足の先に引っ掛けて、怪物ギツネがビルを一つぶっ壊したよ。うわあ、今度は街路樹を根こそぎにした」

「いちいち実況中継しなくてもよろしい。打っ手がなく、私はイライラしているのだ」

「本当にどうするの、お母さん」

「ええい仕方がない。こうなったら最後の手を使うことにする」

突然カーブして進む方向を変え、お母さんが違う進路を取り始めたのは、このときのことでした。

ススムは黙って目をこらしましたが、自分たちがゼロ禪師の寺へと向かっていることに気づくのに、時間はかかりませんでした。

数分後には、寺の屋根が視界に入ってきたのです。

それまでにススムは、お母さんとの間で相談を終えていました。怪物ギツネを迎え撃つためにこれから何をするか、作戦を教えられたのです。

そのとっぴな内容に、ススムは思わず目を丸くすることになりました。

「お母さん、本当にその作戦でいいの？ そんなことをしたら本が……」

「せっかく手に入れたのが無駄になってしまうと言いたいのだろう？ だが仕方がないではないか。怪物ギツネを退治しない限り、私たちは平穏に暮らせないし、妖怪王国へ帰ることもできないのだよ」

「でもお母さんの息子は？」

「あの子はわかってくれるだろう。なあに、これであの子の即位がなくなるわけではない。ナユタとまた対等の立場に戻ってしまうというだけさ。」

よいなススム？ 作戦は頭に入れたな？」

「うんわかった。じゃあ僕を寺の庭に降ろしてよ」

それは本当にギリギリで、一瞬の余裕しかありませんでした。本を手にしたススムを庭に降ろし、お母さんは再び怪物ギツネの鼻先に戻って走り続けたのです。

うまくやったので、お母さんがもはや本を持っていないことに怪物ギツネは気づかず、そのままあとを追いつけました。

その間に、ススムは寺の建物の中へ飛び込んでいったのです。

「禅師いる？ 大変なんだ。大急ぎで必要な道具があるんだよ」

ススムの口から話を聞いて、ゼロ禅師はひどく驚いた顔をしました。

「何だってススム君？ そんなものをどうするのだい？」

「もちろん使うんだよ。この本の中に隠して、怪物ギツネの腹の中へ押し込んでやるんだ」

「ヤマメがそれを承知したのかい？ 彼女の息子の即位はどうなるのだい？」

「怪物ギツネを退治するためには仕方ないとヤマメも言ってるよ。退治しないと、猫坂の町が壊されちゃうもん」

「それは確かにそうだね」

二人は耳をすませました。またどこかで建物の破壊される音が聞こえてきたのです。時間をかせぐために、ヤマメは必死になって町中を逃げ回っているに違いありません。

さすがのヤマメも、無限に体力が続くわけではありません。今に疲れ切ってしまうでしょう。ススムとゼロ禅師は準備を急がなくてはなりませんでした。

「さあススム君、ついておいで。君が求めている物はこの寺の物置にあるに違いないが、探すのに時間がかかりそうだ。手伝ってくれるかい？」

懐中電灯を手に、二人は地下へ続く階段を降りてゆきました。

物置は広く、ドアを開けてのぞき込んで、ススムは目を丸くしたのです。

「禅師、これは何なの？ 物がいっぱいあるね」

「代々の住職たちが何百年も用いてきたガラクタさ。さあ探し物を始めよう。手や体がホコリだらけになるが、我慢するほかないね」

そうやって二人は体を動かし始めたのですが、思いがけない声に背後から突然話しかけられ、驚いて振り返ることになるには、1分もかかりませんでした。

声はこういったのです。

「おい、そこのおまえたち二人」

相手の姿を見て、ススムは思わずゼロ禅師と顔を見合わせました。ゼロ禅師も同じように目を丸くしているではありませんか。

「これはこれは小鬼さんじゃないか」

ゼロ禅師のあいさつに、小鬼は不満そうに鼻を鳴らしました。

「ふん」

ススムには始めて目にするものでしたが、小鬼は身長40センチもない姿をしています。体が小さいだけで、頭に生えたツノや牛に似た顔、手足の長いツメは大きな鬼たちと変わりません。

だけどそこに、ずるそうな表情が加わっているぶん、一筋縄ではいかない相手かもしれません。

ゼロ禅師が意味ありげに目くばせをするので、ススムはしばらく口を閉じていることにしました。

ゼロ禅師は言葉を続けました。

「ところで小鬼さん、体は小さくとも、あんたはさぞかし名のある妖怪のようにお見受けするが」

もちろん小鬼は胸を張りました。

「おまえはなかなか目が高いじゃないか。オレの名はツヅラといって、鬼の世界じゃあちよつとした大物なんだぜ。そのツヅラ様がこ

の物置をすまいにしてるんだ。さっさと出てゆくか、探し物をしたきゃあ、うまい食い物でもよこしな」

「食い物だって？　どんなものが欲しいのかな」

「そうさなあ。新鮮なニワトリ2羽で手を打とうじゃないか」

「ニワトリだって？　こんな貧乏寺にはインスタントラーメンしかないよ」

「それでは話にならねえ。探し物をするのはあきらめな。オレは一寝入りしたいんだ。さっさと出てけ」

ゼロ禅師とススムはあきれた表情で、もう一度顔を見合わせるようになりました。

とうとうススムが口を開きました。

「ねえツヅラ、僕の友達にナユタというのがいてね。このナユタが……」

ところがツヅラは、突然鼻でせせら笑ったのです。

「そんな名前を出したって、怖くなんかないぜ。ナユタの後ろ盾だったラセツはもう死んだじゃないか。ラセツのいないナユタなんて、ただのガキに過ぎないね」

「じゃああんたは、怖い物なんてないの？」

「ナユタじゃなくて、ヤマメの息子と知り合いなのだとおまえが言

えば、オレも少しは怖がるかもな」

「どうして？」

「ヤマメっていやあ、恐ろしく腕のいい魔力使いとして有名じゃねえか。あのラセツを倒した女でもあるしな」

「あんたはヤマメに会ったことがあるの？」

「あるわけねえよ。いつも隠しているから、ヤマメの顔を見たことのあるやつは一人もない。妖怪王でさえ、自分の娘の素顔を見たことがないんじゃないかという噂だけ」

「へえ」

「それだけじゃねえぞ。ヤマメの息子ってのが、これまた薄気味悪いときたもんだ」

「息子の顔も、誰も見たことがないの？」

「誰も知らないのは顔だけじゃないさ。ヤマメの息子については、どこに住んでいるのかも、それどころか名前だって不明なんだぜ」

「なぜ？」

「そもそもは王位争いで、ラセツに見つかって暗殺されないようにするためだったらしい。だから顔も名前も、居場所も内緒にしていたんだな。それが噂に噂を呼んで、今では妖怪王国全体が疑心暗鬼になってる」

「疑心暗鬼って？」

「ヤマメの息子の正体がわからなくて、みんな不安でたまらなくなっている、ということさ。ナユタが次の王になればいいが、もしナユタが負けたら、どこのどんな怪物が王になるかもわからないわけだからな」

「へえ」

ここで思いがけず、ゼロ禅師が口をはさんだのです。

「ススム君、その小鬼に、君の魔力の杖を見せてやったらどうかな？」

よく意味はわかりませんでした。が、ポケットから取り出し、ススムはゼロ禅師の言う通りにしたのです。

小鬼の反応は、びっくりするようなものでした。

カメレオンのように両目を飛び出させ、ススムの杖に見入ったのです。特に注目したのが杖の根元にある王の紋章だったのは、いうまでもありません。

「げげっ、それはヤマメの杖じゃないか」

「うん、ヤマメが僕に貸してくれたんだよ」

「なんでおまえに……。そうか、おまえとヤマメの間には何かかわりがあるんだな」

「ねえ小鬼さん、お願いだから僕と禪師の探し物を邪魔しないでね」

「邪魔だど？ とんでもない。あとでヤマメにはよろしく言っとい
てくれ。オレが邪魔をしただなんて、冗談でも言うんじゃないぜ」

「うふふ、わかったよ。それで探し物なんだけど…」

「ああ何でも言ってくれ。オレも手伝うよ。この物置に100年住
んでるんだ。どこに何が置いてあるか、すみずみまで知っているよ」

こうやって、ススムとゼロ禪師は目的の物を手に入れることがで
きました。

あまり大きな道具ではありません。手のひらに乗るほどのガラス
びんだったのです。

ビンの口はかたく閉じられ、封がされています。中身は黒い粉が
ぎっしりと詰まっていますが、正体はわかりません。

「禪師、この黒い粉は一体なんなの？」

「うんススム君、それはね…」

お母さんが寺に姿を現したのは、ちょうどこのときのことでした。
ものすごい勢いで窓から飛び込んできたのです。

ススムは目を丸くして迎えました。

「ヤマメさん、怪物ギツネはどうなったの？」

「ときどき足先で引っ掛けて建物を壊しながら、今も町の中を走り続けているよ。ついさっきナユタがやってきて、追われる役を私と代わってくれた。ナユタに本を渡すふりをしたら、怪物ギツネはすぐに信じてだまされてくれた」

「それはいいけど、これはどう使うの？ 目当ての道具は見つけたよ。ほら」

「おお、あったのか。ではススム、私の背にお乗り。ポケットにそっと入れ、そのビンは壊さないように気をつけるのだよ。中身は大変に危険なものだからね」

「うん、わかった」

ゼロ禅師に見送られ、ススムとお母さんは寺を離れたのでした。

お母さんの背中の上で、ススムが声を上げました。

「うわあ、怪物ギツネが電車をひっくり返したよ」

「どこだススム？」

「あそこの駅のところ。今ナユタは線路ぞいを走っているんだね」

「あの線路はこの先、左へカーブしているのだったな。うまく近道ができそうだなぞ」

「ねえお母さん、このガラスびんの使い方を説明してよ」

「おまえのポケットの中にはヒモがあるか？」

「うんあるよ。いつも持っておくようにとお母さんが言ってるじゃないか」

「それはこういうことがあるからさ。そのヒモで、ガラスびんと本をしっかりとしぼり合わせるのだよ」

「本はもったいないね」

「仕方がないさ、妖怪王国の王になろうという者が、猫坂の町を見殺しにしたなどと言われては評判が下がるからね」

「どうして？」

「妖怪王国と猫坂は、大昔から兄弟のように付き合ってきたからさ。猫坂の町に今でもたくさん妖怪が住んでいるのは、それが理由なのだよ」

「へえ」

「さあススム、用意はできたかい？　しっかりとしぼって、ああそれでいい」

「この黒い粉の正体は何なの？」

「カビの胞子さ」

「胞子って？」

「カビの種のようなものだよ。そのカビは紙が好物なんだ。特に

何百年もたって、古くて乾ききった紙がね」

「じゃあカビはこの本を食べるんだね」

「その本だけじゃないさ。怪物ギツネの体内にあと2冊入っていることをお忘れでないよ」

「ああそうか。でも本がカビに食べられて、後はどうなるの？」

「怪物ギツネは、本の魔力のおかげで生きていることができるのだよ。それがなくなるのだから、ただではすまないさ。」

さあススム、線路に着いた。怪物ギツネがこちらへやってくるぞ。ああ、その目の前をナユタが必死で走っている姿も見える。いけないガキだが、今回だけは協力するしかないな」

「お母さんって、本当にラセツやナユタが嫌いなんだね。実の妹や『おい』なのに」

「それは余計なお世話さ、ススム。さあ私におつかまり。ついに怪物ギツネと一騎打ちだ」

武者ぶるいどころか、ススムは怖くて怖くて仕方ありませんでした。でもお母さんと一緒だから、なんとかやることができたのかもしれない。

物影から突然現れたススムたちの姿に怪物ギツネは驚いたようでしたが、すぐに表情を変え、進路を変えて迫ってきたのです。ススムの手の中に本を見ることができたからでしょう。

目を緑色に輝かせ、怪物ギツネは足に力を込めたのです。お母さんの声がススムの耳に届きました。

「ススム、油断をするのではないよ。あと数秒で私たちはやつとすれ違う。私たちはやつの体の下をくぐり抜けるから、うまくタイミングを計って、おまえはその本をやつの鼻先にポンと放り投げるんだ」

「それで大丈夫なの？」

「やつの目には本しか見えていないさ。あのでかい口でパクンとのみこむことだろう」

「そのあとはどうするの？」

「ふふふ、あとは明日のお楽しみということさ」

お母さんの言うことは正しかったようです。猛烈なスピードで迫ってくる怪物ギツネに向かって、お母さんは言葉どおりの走り方をし、ススムもうまく作戦を実行することができました。

放り投げられた本とビンを、作戦通り怪物ギツネがパクリとのみ込んでしまったときには胸がすつとしましたし、ススムはうれしさのあまり、お母さんの背中の上でこおどриしたほどです。

作戦が効果を発揮するには、お母さんの言うとおり一晩かかってしまいました。

3冊の本をすべて手に入れて満足した怪物ギツネはおとなしくなり、町の一角に立ち止まったのです。

一日中走り回って、さすがに疲れていたのでしょう。腹ばいになって目を閉じ、いつの間にか眠ってしまいました。

しかしそのまま、怪物ギツネは二度と目を覚ますことはなかったのです。

翌日、朝日が差し始めるころ、猫坂の人々が驚いたのは、昨夜の同じ場所に、なぜか怪物ギツネの姿がもはやないことでした。そこには怪物ではなく、岩山が一つあるだけだったではありませんか。

学校帰りにわざわざ遠回りをして、友達と一緒に岩山見物をしてから家へ帰ってきたススムは、もちろんお母さんに質問しました。

お母さんはすぐに答えてくれました。

「ああ、あれかい？ 体の内部からカビに食われて、怪物ギツネは化石になった。つまり石に変わってしまったのだよ。あの岩山は、どこかギツネに似た形をしていただろう？」

「うん、みんな不思議がってた」

「元がギツネなのだから当然のことさ」

「あの岩山の内部では何が起きているの？」

「本を食べたカビは、猛烈な勢いで繁殖したに違いない。すぐに怪物ギツネの体全体をおおいつくしたさ」

「でも、どうしてそれが化石になったの？」

「そこが魔力というものの不思議なところさ。理由は誰も知らないが、魔力はときどきああいう化石現象を引き起こすのだよ。しかしおかげで怪物ギツネを退治できたのだから、よかったではないか。」

今朝の新聞にも出ていたが、あの岩山を開発して遊園地を作ろうという計画が、猫坂の町ではさっそく持ち上がっているそうだ。私にはカビの繁殖力よりも、人間の金銭欲や凶太さのほうがよっぽど怖いと感じられることがあるよ……」

本を見つけた（後書き）

次回の投稿は10月12日（水）を予定しています

2人の王子

ある山奥に『塩塚』と呼ばれるものがありました。

何十トンもの塩がまるで山のように積み上げてあるのですが、「これには絶対に手を触れてはいけない」と昔から言い伝えられていて、近寄る者もなかったのです。

しかしそれも、この日までのことでしかありませんでした。

ある不心得者がこの塩塚に興味を持ち、なんとスコップを持ち出したではありませんか。

「この塩を売れば、金になるに違いない」

この男は、そんなことを考えたのかもしれませんが。

ガシッ、ガシッ。

スコップの先は塩塚へと食い込んでゆきました。表面は少し汚れていましたが、内側からは雪のように白い塩が顔を出したのです。

男が売り歩く塩は、かなりの評判になりました。それなりに味がよかったのです。

しかもスコップで掘り出しているのだから元手はゼロ。男はたちまち大もうけをすることができたに違いありません。

ゼロ禅師の仕事の中には、大昔から妖怪を封じ込めてある場所に

異常はないかと、見てまわることも含まれていました。

寺を離れ、年に1度、猫坂市のまわりをひとまわりするのです。

だけど今回はススムも一緒でした。ちょうど学校が休みだったので、おもしろがってついてきたのです。

塩を盗まれ、大きく穴の開いた塩塚の前で、ゼロ禅師は立ちつくしてしまいました。

「禅師どうしたの？　大きな穴だねえ」

「ススム君、誰かがこの塩を盗み、そのせいで、中に閉じ込められていた妖怪が逃げ出してしまったようじゃ。ごらん。塩の表面にスコップの跡がある」

「本当だ。でも穴の奥のほうには跡がないよ」

「あれは、塩がなくなって重しのなくなった妖怪が抜け出していった跡だからさ。大変なことになったぞ」

「どうして？　ここにはどんな妖怪が封じ込めてあったの？」

「ああススム君、それはね…」

ところが二人の会話は、激しい羽音と、けたたましい声でかき消されてしまったのです。

「おーい禅師禅師、妖怪禅師」

見上げると、空から一羽のフクロウが舞い降りてくるところでした。

ススムが声を上げました。

「あっフクロウだ。禅師、あれは僕の家に住んでいる妖怪ギツネの家来なんだよ」

木の枝にとまり、フクロウは不満そうな顔をしました。

「オレは家来じゃないぜ、ススム。弟子と言ってくれ。しかしそんなことより、猫坂の町でいま大事件が起こってるんだぞ」

ゼロ禅師は顔色を変えました。

「どんな事件なのかな？」

「市民たちが何の前触れもなく、突然ハトに変身するという異変が相次いでいるんだ」

「ハト？ ハトだって？」

「被害者はもう何十人も出てる。早くなんとかしないと、今に猫坂中の人間がハトになっちまうかもしれないぞ」

ゼロ禅師とススムが大急ぎで町へ帰ったのは、いうまでもありません。

そして町ではまさしく、フクロウの言う通りのことが起こっていたのです。

被害者の数はすでに100人を超えていました。そしてなんと、その中にはススムの姉のミチコも含まれていたのです。

ゼロ禅師は調査を始めましたが、手がかりはありません。夕方になって、疲れた表情でススムの家を訪ねたのです。

「こんばんは、ススム君はいるかな？」

「ああ禅師、お姉ちゃんやその他の人たちの行方はわかったの？」

「いや、それがまだ何もつかめないのだよ。みんなあつという間にハトに変わり、パタパタと羽ばたき、どこかへ飛んでいってしまった。行方はまったくわからない」

「ふうん」

「ミチコさんは何をしていたハトになったのか、詳しく教えてくれるかい？」

「こっちへおいでよ。お姉ちゃんの部屋で説明するよ。そのほうがわかりやすいでしょう？」

「そうだねススム君……。ああ、これがミチコさんの部屋だね」

「この机の前に座って、お姉ちゃんはマンガの本を読んでいたんだ。暑いから、この窓は開けてあった」

「ほう、ちょうど机のまん前にあるね。何の本を読んでいたのかな？」

「月刊のマンガ雑誌だよ。でも日本中で何万部も売れている本だから、手がかりにはならないと思う。ハト変身事件が起きているのは、猫坂の町だけなんでしょう？」

「そのとおりだよ、ススム君。おや？ 机の上に皿が置いてあるね。マンガを読みながら、ミチコさんは何か食べていたのかい？」

「たぶんホットケーキだと思う。お姉ちゃんの好物なんだ。いつも自分で作って食べてるよ」

「ホットケーキというと、ハチミツをかけて食べるあれだね」

「でもお姉ちゃんは変わってるよ。ハチミツじゃなくて、いつも塩をかけて食べるんだ。そのほうがおいしいんだって。珍しいよね」

「塩だって？ はあ、机の上のこの小ビンに入っている白い粉だね」

「うん、たぶんそうだと思う。ちょっとなめてみようか？」

「いやいやススム君、やめたほうがいい。それがミチコさんのハト化の原因かもしれないよ」

「どうして？ この塩が？」

「この家の柱には妖怪ギツネが住み着いていたね。すまないが呼んできてくれるかい？」

ススムが言われた通りにしたのは、いうまでもありません。スス

ムのあとをついて、妖怪ギツネは機嫌よくミチコの部屋までやってきてくれました。

「なんだ禅師、私に用とは珍しいな」

「ああギツネさん、少し手を貸してもらいたくてね」

「手だと？ 私には足が4本あるだけだぞ」

「これからわしは、この塩を少しなめてみようと思う。するとある変事が起こるだろうが、そうなったとき、ススム君と共にわしのあとをついてきてくれるかい？」

きつと翼が生えて、わしは空を飛んでゆくことだろうと思うが」

「ふうむ、なんだか知らんがおもしろそうな話だな。ちょうど退屈していたところだ。何でもやってみせるがいいさ」

そしてゼロ禅師は言葉どおりにしたのでした。

口の中に塩を入れ、ビンを机の上に戻した瞬間、ゼロ禅師の小柄な体が一面の羽毛におおわれ、両腕が翼に変化してしまったのも、驚くことではないのかもしれない。

ポップと一声鳴いたかと思うとゼロ禅師は羽ばたき、窓から飛び出していったではありませんか。

あまりのことにススムは呆然としていましたが、妖怪ギツネはぼんやりなどしてはいませんでした。

「さあススム、早く私の背中にお乗り。今からあのハトを追いかけてゆくのだから」

ススムの体重を背中に感じると妖怪ギツネは全身の力を使ってジャンプし、窓から外へ飛び出したのです。

ギツネの鋭い眼は、ハトの姿を見失うことなどありませんでした。距離をとりながらも、きちんと着いてゆくことができました。

ススムが口を開きました。

「ねえお母さん、ゼロ禅師はどこまで飛んでゆくのだろうか」

「それは私にもわからないよ。しかし、そこにミチコや他の人々もいるのは確かだろうね」

「お母さんの弟子のフクロウはどこへ行ったの？ 僕と禅師にこの事件のことを知らせるために、山の中まで来てくれたんだよ」

「あれは私が行かせたのさ。それにフクロウは今、ほらおまえの肩の上にいるじゃないか」

そう言われてやっと、ススムは気がついたのです。

「あれ本当だ。フクロウさん、いつの間に来たんだい？」

大きな目玉をギョロリと動かし、フクロウはススムを見つめました。

「すこし前からおまえの肩にいたさ。それはそうとお師匠様、これ

からどうなさるおつもりで？」

「それは敵の出方しだいだな。そもそも敵の正体すらまだわからぬというのに」

ススムが声を上げました。

「あつ、何か見えてきたよ。禪師はあそこへ向かっているみたいだ」

お母さんとフクロウが顔を上げると、ススムの言うとおりでした。

ここはもう猫坂をかなりはずれた場所なのですが、月の光に照らされて、見たこともない建物が目の前にそびえているではありませんか。

「ねえお母さん、あれは何なの？ おかしな形の建物だねえ」

フクロウがクチバシを開きました。

「あれはなススム、アメリカの1870年代にはやった様式をそっくりそのままマネた建物だ。時代は南北戦争の直後で……」

お母さんが口を開きました。

「黙れフクロウ。おまえの物知りぶりはもうわかった。問題はあの建物の建築様式ではなく、内部に何者がひそんでいるのかということだ」

「あつお母さん、あの建物の一番上の階は、大きな鳥小屋になっているみたいだよ。窓にはぜんぶ金網が張っている」

フクロウがあきれた声を出しました。

「そして金網のむこうはハトがいっぱいときたもんだ。ねえお師匠様、ご存知ですか？　ハトとフクロウは大昔からたいそう仲が悪いんですぜ。オレはもうハトを見ただけで寒気がして、背中がぞくぞくしてきました」

「背中がぞくぞくするのなら、あとでカゼ薬を飲んでおけ。残念ながら、私は弟子に甘い顔をする趣味はないのでな。いやなら今すぐ妖怪王国へ帰れ。私は新しい弟子をとるさ」

「いやだなあ、お師匠様。ただの冗談ですよ」

「なら下らんことを言っていないで、あの屋敷の様子を探ってこい。呼び集められたハトは最上階に閉じ込めてあるのだろうか？　他の階を見てこい。屋敷の主人が誰なのか、それが知りたいのだ」

お母さんに命令されて、いかにも気のすすまないふうに、フクロウはパタパタと姿を消しました。

でもフクロウはなかなか帰ってこなかったのです。5分たっても10分たっても、戻ってくる様子はありませんでした。とうとうススムもお母さんも待ちくたびれてしまったのです。

「ねえお母さん、フクロウは一体何をしてるんだろうね。まさか敵に捕まったのかな」

「そこそこの呪文が使えるから、そんなことはないと思うがね。しかしそれにしても遅すぎる。私たちが見にくいしかないね」

「ねえ、禪師が敵に食べられたりしてないだろうね」

「ほうススム、なかなか楽しみなことを言ってくれるではないか。それが事実なら、どれだけうれしいか」

「お母さん…」

「そんな非難がましい顔をするものではないよ。お忘れかい？ 私はいいつのせいで、ワサビを口いっぱい食べさせられたのだよ」

「あれはもともとお母さんが悪いんじゃないか」

「ふん、そんな話は聞きたくないね。とにかく一緒においで。おまえはゼロ禪師が気になるのだろうが、あんな頼りにならぬ弟子でも、私はフクロウの面倒を見てやらねばならん。」

おまえも大人になったら気をおつけ。弟子を持つとは面倒なものだよ」

「そう？ 僕の目には、息子を持つことのほうがよっぽど面倒が多いように見えるけどなあ」

「子供のくせに、生意気なことを言うのはおやめ。さあ屋敷が近づいてきた。そこにドアがある。ススム、私の背中から降りて、ノックをしてごらん」

もちろんススムは、言われた通りにしたのです。

少し待つと返事があり、執事がドアを開けてくれました。

頭のはげた老人で、きちんとネクタイをして正装しています。ススムは古い映画のシーンを思い出してしまいました。

口を開こうと思ったのですが、ススムはうまいセリフを思いつくことができませんでした。助けを求めて振り返ったのですが、なんということでしょう。もうススムの背後にお母さんの姿はなかったではありませんか。

「あれれお母さ…」

ススムのポケットの中から小さな声が聞こえてきたのは、このときのことでした。

「私はここにいるよ、ススム。魔力を使って、うんと小さく変身しているのさ。私のことは気にせず行動おし。いざというときには、必ず飛び出して助けよう」

それを聞いて安心し、もう一度執事のほうを向いて、ススムは微笑むことができたのです。

「ええと、このお屋敷のご主人はいらっしゃいます？」

「はい。先ほどからあなたをお待ちしております。お話があつてみえたのでしょうか？」

屋敷の主人というのは、若い少年でした。ススムとほとんど同じ年頃だったのです。

書斎なのでしょうか。大きな机があり、壁のまわりを囲んでいる

本棚には本が何十冊も並んでいる部屋にススムを迎えてくれたのです。

部屋の中で香をたいているので、その匂いが強くただよっているのが鼻につきはしますが、それ以外におかしなところはありませんでした。

さっそくススムは口を開きました。

「君がこのお屋敷の主人なの？」

「そうさ。そして君は、あのお坊さんを追いかけてやってきたのだね」

「お坊さんって、ゼロ禪師のこと？ もう一人フクロウが来なかった？」

「いや、それは知らないな。ここには来ていないようだよ」

「本当に？ どこへ行っちゃったのかなあ」

「あのお坊さんはゼロ禪師というのかい？ 今はこの屋敷の3階に、他の人々と一緒にいるはずだよ。実はある作戦を考えて実行したんだが、うまくいかなくてね」

「作戦？」

「もちろん塩塚から塩を盗み、妖怪を野放しにしてしまった憎い犯人を見つけ出す作戦さ」

「ははあ。でもうまくいかなかったって、どういふことなの？」

「あの塩塚は、僕の一族が代々所有してきた山の中にある。実は、先祖がカシャという妖怪をあの中に封じ込めてね」

「それはどんな妖怪なの？　あまり名前を聞いたことがないけど」

「形は僕も知らないよ。でも人の死体を盗んでゆく悪いやつだそう
だ」

「人の死体って？」

「文字通りの意味さ。盗んでどうするのかは知らないが、葬式がす
んで墓地へ運ぼうとすると現れ、力づくで奪ってゆくのだよ」

「へえ」

「それをやめさせるために、僕の先祖がなんとか捕まえ、あの塩塚
の下に封じ込めたんだ」

「それが塩泥棒のせいで外へ出てしまったんだね」

「だから協力してくれるかい？　なんとかカシャをおびき寄せて、
捕まえなくちゃならないんだ」

「もう一度塩塚に閉じ込めるんだね。でも僕のお姉さんやゼロ禅師
は、どうしてハトになっちゃったの？」

「塩を盗んだ犯人を捕まえるためだったのさ。盗んだ塩を、犯人も
自分で食べるだろうと思ったからね。塩塚の塩には、食べるとハト

に変身する呪文をあらかじめかけておいた。

でも無駄だった。ハトになり、帰巢本能でこの屋敷へやってきた人々の中に犯人はいなかったよ。

だから全員、いずれ釈放するつもりだが、とにかく今はカシヤを捕まえるのが先だ。ススム、君も手伝ってくれるだろう？」

ススムはもちろん首を縦に振りました。さっそく準備が始まったのです。

死体を盗む妖怪をおびき寄せるのだから、まず死人が必要です。その役は執事にやってもらうことにしました。

いかにも年寄りで、写真を撮ってひつぎの上に飾るのに似つかわしかったのです。

他の召使いたちの手も借りて、屋敷のおもても葬式にふさわしく飾り付けることができました。

屋敷の中で一番広い部屋に集まり、お葬式をするマネをしました。あとはひつぎを荷車に乗せて、丘の上の墓地まで運ぶだけです。

この荷車は小型で、人の力で引くほかなかったのですが、墓地へと通じる山道はとても細く、トラックや自動車は通ることができなかったのです。

葬列が墓地に着いたのは、もう真夜中近い時間でした。

都会と違って、田舎の空は真っ暗で、一面に星が輝いています。

その中央にまん丸な月が光っているのですが、興奮しているせいか、ススムは疲れなどまったく感じませんでした。

この地方には、お葬式のとくに変わった習慣がありました。死者を墓地にほうむった後、親族の若者が翌朝まで墓地で寝ずの番をするのです。

だからススムたちが墓地にとどまっていたても、おかしい眺めではないのでした。屋敷の主人だという少年は、すでにススムに自己紹介をすませていました。

「僕の名はタマオというのだよ。そう呼んでくれ」

「じゃあタマオ、カシヤはいつごろ死体を取りにやってくると思う？」

「それはわからない。だが僕は、カシヤには背後からあやつっている黒幕がいるのではないか、という気がして仕方がないんだ」

「黒幕って？」

そうやってタマオと話しながらも、実はススムは、ポケットの中から小声でささやくお母さんの指示にもちゃんと耳を傾けていたのです。

「いいかいススム、私の言うことをよくお聞き。このタマオという少年はどうも怪しい。人間をハトに変える呪文など、ただの子供に使えるはずがない……」

なかば上の空のススムの様子に、タマオが気づかないわけがあり

ません。

「どうしたんだいススム？ 急にかがんで足元の小枝を拾って、ポケットの中に入れたりして。何か理由があるのかい？」

「ううん、なんでもないんだよ。気にしないでいいよ」

「そうかい？ 今も言ったけど黒幕とはつまり…、しいつ、何か音が聞こえたぞ」

「どこから？」

「あの茂みの影さ。ついにカシヤが現れたのかもしれないぞ」

タマオの言うとおりでした。茂みの枝や葉が大きく揺れ、何かの姿を見せようとしているのです。

思わず息をのんだのですが、現れた敵の姿は、ススムをひどく驚かせることになりました。

カシヤとはなんと、猫と鬼の中間のような形をしていたのです。まるで巨大なトラネコを二本足で歩かせ、頭に鬼の角を乗せたような姿だったではありませんか。

これにはススムも意表を突かれてしまいました。

「タマオ、あれはなんだい？」

「あれがカシヤだよ。ススム、僕たちは少し下がったほうがいいね。カシヤはひつぎをねらっているよ」

ススムとタマオは、さっそく数メートル後ずさりすることになりました。ススムたちの存在など気にする様子もなく、ドスドスとやってきて、すぐにカシヤが墓をあばき始めたのは、いうまでもありません。

それは恐ろしい力だったのです。墓石はあっという間に倒され、ひつぎがあらわになってしまいました。

カシヤがそのフタを引きちぎるのを、二人は息をのんで見つめることになりました。

ひつぎには仕掛けがしてありました。

内部には死体など入っていません。その代わりに、勢いよく飛び出す火薬仕掛けの大きなアミがセットしてありました。これはワナだったのです。

突然、バンという大きな音があたりに響きました。それと同時に、目にもとまらない速さで広がったアミが、カシヤへと飛びかかっていったのです。

普通のアミではありません。特別製のとても頑丈なものです。

ところがなんということでしょう。

その強いアミも、妖怪の腕力の前にはまったく無力だったのです。あっという間に引き裂かれ、カシヤは自由の身になってしまいました。

タマオが叫び声を上げました。

「これはまずい。ススム、すぐに逃げるんだ」

もちろんススムはその言葉に従ったのですが、うまくゆきませんでした。

カシャの体は、人間よりもふたまわりは大きいのです。そのぶん速く走ることができるに違いなく、ススムとタマオはすぐに追いつかれてしまいました。

おまけに二人は、気がつくとも巨大な岩壁の前にいたではありませんか。通せんぼをされてしまい、しかも岩壁は垂直で高く、手をかけて登ることができるようなデコボコはまったくありませんでした。

「タマオどうしよう」

「ポケットの中に何か持っていないかい？　小さなナイフでも何でもいいんだ。武器にできそうなものなら」

「うーん、こんなものならあるけど…」

そういつてススムが見せたのが、魔力の杖だったのです。

「なんだススム、そんなものを持っているのなら、最初からお見せよ。どれ、僕が使ってカシャを退治してやる」

気がついたときには、ススムは魔力の杖を取り上げられていました。手の中に握り、タマオはうれしそうに振り回すのです。

ススムは声を上げないではいられませんでした。

「タマオ、遊んでいる暇なんかないよ。早くカシヤをやっつけないと」

「ああススム、忘れていたよ。カシヤというのは、そのつのことかい？」

次に起こった出来事は、ススムを驚かせるどころか、呆然とさせるのに十分でした。

とがった牙の見える口を動かし、ゴニョゴニョと呪文をとねえたかと思うと、カシヤの形は突然変化し、まったく別のものになってしまったではありませんか。

目の前に見えているものを信じることができず、ススムは口をポカンと開けるしかなかったのです。

なんとカシヤは、ガゴジの姿へと変わっていたのです。

「ガゴジ？ あんたはナユタの家庭教師だね。どうして？」

それに答えたのはタマオでした。

「カシヤの姿に変身するようにと、僕が命じておいたからさ」

そして呪文をとねえ、今度はタマオ自身も姿を変え、本来の姿を見せたのです。それがナユタだったのは、いうまでもありません。

もうススムは本当に何を言っているのか、見当もつきませんでした。

「ナユタ：」

「そうさススム、これで僕は、君の『魔力の杖』を手に入れたわけだ。杖のない君など、もう怖くはないね」

「杖がなくなたって、僕にはお母さんとゼロ禅師がついているよ」

「お母さん？ ヤマメのことかい？ 姿が見えないが、どこにいるのだね？ ゼロ禅師は屋敷の中に閉じ込めてあるがね。ハトの姿では、何の呪文もとなえることができないよ」

「すべて計画してあったことなんだね」

「その通り。塩塚から塩を盗んだのは僕さ」

「カシヤはどうなったの？」

「閉じ込められていた年月が長すぎたのだろう。さすがの妖怪ももう死んでいたから、別の場所にほうむってやったさ。それはそうとこの杖だ。」

「この杖はほら、こうしてやるのさ」

次にナユタは、とても信じられないような行動を取ったではありませんか。力を込めたかと思うと、手の中の杖をポキンと折ってしまったのです。

ススムには「あっ」と声を上げることしかできませんでした。

あれはお母さんから借りた大切な物です。折られると魔力が完全になくなってしまうことも、ススムは知っていました。

「あはははは」

ところがこのとき、大きな笑い声があたりに響いたのでした。

女の声でした。次の瞬間、ススムのポケットから飛び出し、お母さんが姿を現したのです。

でもナユタは、顔色ひとつ変えるわけではありませんでした。それどころか、うれしそうに笑い始めたではありませんか。

「やあ親愛なる伯母上。いずれ顔を見せると思っていたよ。だが一足遅かった。あんたの大切な杖は、このとおり真っ二つになってしまったよ」

だけとお母さんもニヤリと笑うのです。

「ナユタ、自分の手の中にある物をよくごらん。それが私の杖だというのかい？」

今度こそナユタは顔色を変えることになりました。ヤマメの杖だと思っていたものは、なんとただの木の枝でしかなかったのです。

「くそっ、いつの間にすり替えたのだ」

「かがんで、ススムに小枝を拾わせたときさ。ススム、ポケットの中にもう一度手を入れてごらん」

ヤマメの言葉に従い、ススムはパツと顔を輝かせました。彼の指は、キズ一つない完全な杖をつかみ出すことができたのです。

ナユタの声があたりに響きました。

「ええい、失敗だったか」

ガゴジも声を上げました。

「坊ちゃま、どうなさいます?」

「どうもこうも、こうなればヤマメと戦うしかないさ」

「わしもお手伝いいたします」

「ああ、すまん」

そう答えながら、服の下からナユタが自分の杖を取り出したのは、このときのことでした。

ナユタとヤマメは向かい合い、今にも呪文をとなえあうかと思われました。ところがここで、また思いがけないことが起こったのです。

2本の杖が、突然強い光を発し始めたではありませんか。そして2本とも、あっという間にナユタやススムの手を離れ、まるで意思を持っているかのように空中へ飛び上がったのです。

それを見上げ、思いがけなさに全員が呆然としてしまったのは事実です。でもとっさに自分を取り戻したのは、ヤマメが最初でした。

意外な出来事に驚いて、まるで隙だらけのナユタとガゴジを見て、ヤマメはほくそえむことになりました。すかさず二人に飛びかかったではありませんか。

いくら魔力を使うことができて、不意を突かれてはどうすることもできません。ヤマメの長い足にガツンガツンと見る間になぐり倒され、ナユタもガゴジも気を失ってしまったのでした。

棒切れのように地面に伸びてしまった二人を満足そうに見下ろしていましたが、ヤマメはやがてススムを振り返りました。

「ススム、2本の杖はどうなった？」

「空のかなたへ飛んで、両方とも見えなくなってしまったよ」

「2本並んで、仲良く飛んでいったのだな。方向はどっちだった？北か？するとその方角に、杖をあやつって飛ばせた者がいるというわけだ」

「杖は盗まれちゃったの？」

「そうさ。どちらも強い力を持ったすばらしい杖だからね。この世の妖怪という妖怪がみな欲しがっている。私たちは、まんまと隙を突かれたというわけさ」

「これからどうするの？」

「この伸びている二人を、まずなんとかしなくてはな。うん？あれはなんだ？」

「どうしたの？」

「ススムごらん。ガゴジの服のポケットがいま動いたのだよ。中に何か入っているのではないか？」

身構えるススムたちの目の前で、ついにポケットの中身が姿を現しました。

でも敵ではなかったのです。なんとフクロウだったではありませんか。

パタパタと羽ばたいてススムの肩にとまり、フクロウはクチバシを動かしました。

「ああひどい目にあった。お師匠様、こんな目にあうのは、もう二度とごめんですよ」

「おまえは今までどこにいたのだ？ 私たちは大変だったのだぞ」

「オレもそれなりに大変だったんですよ。屋敷を偵察に出て、窓かドアか、壊れた壁の穴か、とにかく入口を探していたんです。」

ところがそんなものは見つからず、ウロウロしていたら突然誰か後ろからガツンと殴られて、気絶してしまいました。気がついたらこのポケットの中にいて、今やっと、はい出してきたというわけでした」

「おまえが頭を殴られたカタキは、私が取ってやったさ。それでフクロウ、おまえに頼みたいことがある」

「はい、お師匠様。なんでもお申し付けください」

「まずナユタとガゴジだ。体をしぼり、どこかに閉じ込めておけ。呪文を口にすることができないように、猿ぐつわをすることも忘れるな」

「はい」

「屋敷に閉じ込められているハトたちは呪文をといて、全員解放してやれ。ゼロ禅師には、ここで起こったことを説明してやってよい。あの男は今後も多少の役に立とう。わかったか？」

「はい、お師匠様。お任せください」

「では私とススムは出かけるぞ」

「どこへ行かれるので？」

「飛び去った2本の杖を追いかけるのさ。なんとしても取り戻さなくてはならん。さあススム、出かけよう。私の背にお乗り」

「うん、お母さん」

フクロウに見送られながら、ススムとヤマメの旅が始まったのです。

新王の誕生

この旅は長く続くように思えました。だからススムは口を開いたのです。

「ねえお母さん、もう夜が明けようとしているよ。長い旅になるのなら、家へ連絡しないと、お父さんやお姉ちゃんが心配するよ」

「それは大丈夫さ、ススム」

「どうして？」

「私たちはついさっき川を渡っただろう？」

「うん、大きな川だったね。呪文をとнаえて、お母さんはいつものように水面を歩いて渡った」

「あの川をすぎて、私たちは『死者の国』へと入ったところさ」

「えっ？」

「そんな驚いた声を出すものではないよ。あの川は、人間世界と死者の国をへだてているものでね」

ススムは思わず振り返りましたが、川はすでに遠く、もう水面がわずかに光っているだけでした。

「あれは『さんずの川』だったの？」

「そうとも言うね」

「じゃあ僕たちは死んじゃったの？」

「ふふふ、そうではないさ。生きたまま死者の国へ足を踏み入れることができる呪文を、私は自分自身とおまえにかけておいたのだよ」

「まさか本当に？」

「本当さ。私にしか用いることのできない高度な呪文でね。ススム、私は妖怪王国でも1、2を争う呪文家なのだよ。そのことを、おまえはもっと誇りに思ってよい」

「もう思ってるよ」

「おやおや、それは光栄なことだな。ナユタやガゴジですら、こんな呪文は用いることができぬ」

「それはいいけど、僕たちは元の世界へ帰ることができるの？」

「もちろんさ。だが前をごらん。2本の杖は光を発しながら、はるかかなたを飛んでいる。あとを追うには、あの川を越えるしかないかったのさ」

「だけど荒れ果てた風景だねえ。まるで砂漠みたいで、とがった背の高い山がいくつもある」

「油断をするのではないよ。ここは私ですらまだ来たことのない世界だからね」

こうやって二人は、死者の国を駆け続けたのです。

やがて前方に小さな店が見えてきたとき、意外さのあまり、ススムは目を丸くすることになりました。

「お母さん、こんなところにも店があるよ」

「ああ、あそこで少し休もう。私もいささか疲れた」

「杖はどうするの？ もうとっくに見えなくなったよ」

「心配はないさ。杖たちは、きっかり北を目ざして飛んでいた。明日の朝、また北を目ざして出発しよう」

「ねえ、本当にお父さんやお姉ちゃんに連絡しなくていいの？」

「人間の世界と死者の世界では時間の流れ方が違うのだよ。たとえば私たちがこちらで一週間過ごしたとしても、人間の世界では5分とたっではおらぬさ」

「へえ」

「だからミチコたちのことは心配ない。さあ店に入ろう。何か食べる物があればよいが」

外から見るほど店の中は狭苦しくはなく、ランプの光で照らされていて、見回しながらススムはほっとすることができました。

ただ店の中は空っぽで、主人らしい女が一人いるだけだったのです。

「あとう、おばあさん…」

ススムは話しかけようと思いました。

ところがススムの言葉は途中で止まってしまったのです。女がヤマメの姿に気づいたからでした。

「これはこれは、ヤマメお嬢様ではありませんか」

ヤマメも表情を変えました。

「おやオウナ、おまえはオウナなのか？」

「お嬢様、おなつかしゅうございます」

「ふふふ、元気だったかという質問は変だな。ここは死者の国であるから」

「まさかヤマメ様も亡くなられたので？」

「そうではない」

ヤマメは事情を説明し始めたのですが、2本の杖のことに話がおよぶとオウナが目を丸くしたのは、いうまでもありません。

「そのようなことがあったのですか。それはまさしくラセツの仕業に違いありません」

ここでススムは口を開いてしまいました。

「ねえオウナさん、どうしてラセツがここにいるの？」

ところがオウナは、不思議そうな顔をするばかりなのです。

「ヤマメ様、いま口をきいたのは誰です？ ヤマメ様は誰かをお連れなのですか？ 私の目には誰も見えませぬが」

「ああオウナ、私にはまさしく連れがいるのだよ。ススムという名で、生きた人間の子供だ」

「人間の子供ですと？ なぜそのような者をお連れなのですか？」

「事情はいろいろとな。ススム、おまえはもう気がついておろう？ 死者の国の住人たちは、生者であるおまえの姿を見ることができないのさ」

「僕の姿は、透明人間みたいに透明になっているの？ どうして？」

「それが死者と生者の関係だからさ。人間の世界へやってきた死者は幽霊と呼ばれ、よほど暗い月の夜でないと姿を見ることができないだろう？」

「ふうん。生者である僕は、この国では幽霊みたいな存在なんだね」

「しかもこの国には月がない。だからおまえが姿を見られることは、まずないと思っていいい」

「へえ」

オウナが口を開きました。

「声から察するに、ススムとはまだ本当に子供のようなですな。おお、それで思い出しました。ヤマメ様、息子様はお元気になっておられますか？」

息子様の名前も存じ上げず、私はお顔を見たこともないが」

「ああ、私の息子は元気になっているよ」

「息子様は、妖怪王国にお戻りになりましたか？」

「いや、まだだ」

「すると、今もどこかに姿を隠したままで……。ああ、おいたわしや」

ススムが言いました。

「ねえオウナさん、ヤマメの息子って、なぜ妖怪王国から逃げ出さなくてはならなかったの？」

「ああ、それはススム、ヤマメ様の息子様かナユタのどちらが次の王になるかで王国全体の意見が割れて、とうとう戦争になってしまったからさ」

「戦争？」

「それはそれは激しい戦いだったのだよ。国土は荒れ果て、ラセツ軍の攻撃により、王宮まで破壊される始末。ついにヤマメ様は、息子を国の外へ逃がすしかなかった」

「どうやって？」

「王宮にはメイドが一人いてな。これを信用できるものと見込んで、まだ赤ん坊だった息子をヤマメ様はお預けになった。息子様を連れて妖怪王国を出、いずれかの国に落ち着き、メイドは自分の子として育て始めたそうな。」

ヤマメ様、このメイドは今でも達者にしておりますのか？」

「いや、先日死んだ」

「おお、なんとヤマメ様」

「だが心配はないのだ、オウナ。すかさず、別の者が息子の面倒を見る役目を引き継いだのでな」

「ほほう、さようでございますか。ヤマメ様もいろいろご苦労がおりで」

「こういう時代だからな。仕方がないさ」

「いやいや、仕方がないではすみませぬ。ああヤマメ様、すぐにお食事を用意いたしました。また明日は早朝から、杖を追って旅をされるのでしょうか？」

翌朝、ヤマメの背に乗って再び荒地を駆けてゆきながら、オウナの言った言葉をススムは思い返していました。

「このまままっすぐ北へ向かいなされ。やがて、ひととき巨大な岩

山に行き当たりましょう。その頂上には城があり、これがラセツ一味が根城にしている場所なのです。

元は『死者国王』の城でしたが、やってきたラセツにあつという間に占領されてしまいました。今では死者国は、ラセツによって支配されているのですぞ」

ただ残念なことに、オウナも城内の様子までは知らなかったのです。

オウナの言葉どおり、岩山と城が見えてきたのは、もう夕方近くのことでした。

城壁の上に立つ見張りに見つからないように注意して、丘の影や大きな岩の後ろをたどって、二人は近寄ってゆきました。

やがて安全な場所で立ち止まり、ヤマメはススムを背中から降ろしたのです。

「ススム、あの城をごらん。何か様子がおかしいとは思わないか？」

「うん、兵士がたくさん出て、たいまつを手歩き回ってるね。誰かを探しているのかな？ 僕たちがここへ来ていることを知っていると思う？」

「それはどうかな。しかし連中が殺気立っているのは事実のようだ。おやおや、ごらんススム、ラセツのやつが塔の上にいるのが見えるよ」

「本当だ。あつ、兵の一人を殴り倒したよ」

「生前から妹は気が短かったが、まるで変わっておらぬな。死んでも直らん性格というやつか」

「あの兵士は、何かラセツの機嫌を悪くすることを報告したんだろうね。あつ、もう1回殴られた」

「さあススム、見物はそのくらいにして、私のほうをござらん」

「どうしたのお母さん」

ススムを手近な岩の上に座らせ、ヤマメはその瞳をまっすぐに見つめたのです。

「これからおまえに、少し面倒なことを頼まなければならない」

「何を？」

「この国では、誰もおまえの姿を見ることができない。おまえは空気のように透明なのさ」

「うん、わかってるよ」

「今からあの城へ忍び込んで、中の様子を探っておいで。ラセツや兵たちが何を話しているのか、何が連中をいらだたせて、これほどの警戒をさせているのか、その理由が知りたい」

「僕が行くの？」

「今のおまえは完全に透明なのだよ。足音に気をつけさえすれば、

誰にも見つかることはないさ。さあ行っておいで」

気はまったく進まなかったのですが、ヤマメにさとされ、ついにススムは腰を上げるしなくなってしまうました。

立ち上がり、何度も何度も振り返りながら、敵の城を目ざして歩き始めたのです。ススムが振り返るたびに、しっぽを振ってヤマメは答えてくれましたが、岩の陰になって、やがてそれも見えなくなってしまうました。

ススムはつぶやきました。

「お母さんのバカ」

こんなに危険な役目をいつけられたことで、ススムはひどく腹を立てていました。でもそれを面と向かって口にする勇気がなかったのです。

とうとうススムは、高い城壁のふもとまでやってきてしまいました。いくら姿が見えないといっても、ここから先へ進むには、かなりの危険をともしなうに違いありません。

城には城門があります。それがうまい具合にちょうど開いたのは、このときのことでした。

ガラガラと音を立てて、荷馬車が入ってゆこうとしたのです。サツと駆け出し、あとをついて、ススムが城内へ入っていったのは、いうまでもありません。

岩陰に潜んで、ヤマメはススムの帰りを待ち続けました。よほど

気になるのか、城の方角へ何度も目を向けますが、そのたびにため息をついているではありませんか。

ススムの姿がやっとヤマメの視界に入ったのは、なんと2時間もたつてからのことでした。息をはずませながら、ススムは駆け戻ってきたのです。

「ああお母さん、やっとわかったよ」

「どうだった？」

「ラセツたちは、魔力の杖を探しているんだ。城の中に井戸があつて、そのそばで水を飲みながら兵たちが立ち話をしているのを聞いた。杖が光りながら飛んできたことは、国境の見張りから知らせを受けて、ラセツも知っているらしい」

「杖はどこへ飛んでいった？」

「それがお母さん、もつとすごいことがあるんだよ。見張りの兵が偶然目撃したらしい。」

2本の杖は輝きながら空を飛び、だけど突然、その兵の目の前で溶け合い、合わさって、新しい1本の杖に変わってしまったというんだ。

まるで2つのロケットが合体するときのような眺めだったらしいよ」

「2本の杖が合わさり、1本になった？」

「ラセツたちが大騒ぎをしているのは、それが理由なんだよ。溶け合った杖は、魔力が元の2倍に強くなるんでしょ？」

「その通りさ。その杖を持つ者は、もはや誰にも引けを取らぬ魔力使いとなろう」

「その杖が、この岩山のどこかに墜落したことも目撃されているんだよ」

「なんと本当かい？ ススム」

「本当だよ。兵たちがそう言っているのを聞いたもん。だからラセツは兵たちにたいまつを持たせ、岩山中を探させているんだって」

「なあススム、もしもラセツがその杖を見つけたら、どうなると思う？」

「ものすごく強い魔力使いが誕生するね」

「それだけではないさ。非常に危険な魔力使いとなろう。杖の力を用いて、あの川を越え、人間世界へだって攻め込んでくるかもしれない」

「まさか」

「まさかではないよ。ラセツとは、強くなることと、権力を得ることとにしか興味の無い女だ。ラセツに杖を持たせると、本当に困ったことになる」

「姉妹なのに、お母さんとラセツはあまり似てないんだね」

「似ていてたまるか。私は父親似で、ラセツは母親似なのさ」

「じゃあお母さんの母親って、ラセツに似た姿をしていたの？」

「そうだよススム。とにかく偵察はご苦労だったね。とても助かったよ。危ない目にはあわなかったかい？」

「ううん、結構おもしろかったよ」

「それはよかった。ではススム、私たちも杖を探しに出かけよう」

「どうして？」

「もちろん、ラセツに杖を渡すわけにはいかないからさ」

「そんなことを言っても、岩山は広いんだよ。あのたくさん兵たちよりも先に、僕たちたった二人で見つけることができるはずだよ」

「それはわからないぞ」

「どうしてさ？」

「考えてごらん。ラセツが杖を探しているのはなぜだと思う？ 杖がもはや光を発していないからさ。杖は光るのをやめてしまったに違いない」

「なぜなの？」

「さあな。持ち主の手を遠く離れてしまったからかもしれない」

「持ち主であるお母さんが近くへ行けば、また光り始めるかもしれないというの？」

「まあね」

「ふうん」

あまり納得してはいませんでした。ススムはお母さんの言う通りにするしかありませんでした。いくらいやでも、お母さんと一緒にでないと、人間世界へ帰ることだってできないのです。

ススムを背中に乗せ、お母さんは再び歩き始めました。

「ああそうだ、お母さん。ラセツの城の中で、僕はナユタの姿を見たよ」

「なんだって？」

「ナユタだよ。ラセツの隣にいて、一緒になって兵たちに指示を出してた。いつの間にこっちへ来たんだろうね」

「それは本当なのかい？ ナユタはどんな様子だった？」

「どうって、いつもと同じだったよ。どうかしたの、お母さん？ 気分でも悪いの？」

「いや、なんでもないのだよ。しかしラセツめ、思い切ったことをしたものだ」

「どうして？」

「おまえにはわからないかい？ 私のように呪文が使えるわけではないラセツが、ナユタをこちら側へ呼び寄せるには…、おや？ あれは何だろう？」

お母さんが立ち止まったので、ススムも耳をすませることになりました。ゴロゴロと突然、空からカミナリの音が聞こえてきたではありませんか。

見上げると、西の空から真っ黒な雲が近づいてくるところだったのです。

「お母さん、あれ…」

「雷雲か？」

城の方角から兵たちの大きな叫び声が聞こえてきたのは、この瞬間のことだったのです。

ススムもヤマメもとっさに振り返ることになりました。二人とも同時に気がついたのです。

「お母さん、塔の上で光っているのは、あの杖じゃないかな？」

「ああ、そのようだ。屋根の頂上に立っているね」

「あそこにずっとあったのかな？」

「ふん。とんだ『灯台下暗し』というやつか」

「ほらお母さん、ラセツもあの杖に気がついたよ。ナユタを連れて塔を登ってゆく。屋根へ上がるつもりだよ。どうするの？ このまま杖を取られちゃうよ」

「いやススム、もはやどうしようもないね。杖がラセツの手に落ちるのは時間の問題さ。しかし私は、少し気になることがある」

「なにが？」

「あの黒い雲さ。ずんずんこちらへ近づいてくるではないか」

「それがどうしたの？」

「雲の中からカミナリの音が聞こえるであろう？ 雲はもうすぐ塔の真上に達する。杖は、あの屋根の頂上に立っているのだよ」

「あっ」

ススムが声を上げるのと、稲妻が塔を襲うのとはほとんど同時でした。

このとき、ラセツとナユタは共に杖に手をかけていたのです。

稲妻のせいで真っ白な光があたりをいっぱいに照らし、ススムは何も見ることができなくなってしまいました。

やっと光が消えたとき、兵たちもいったんはどよめきを上げました。しかし奇妙なことに、すぐにそれも静かになってしまったので

す。

兵たちは、ラセツとナユタの死体に気がついたのです。カミナリに打たれ、屋根から転落し、二人とも大地に横たわっているのです。

死者の国でも人は死ぬものなのか、とススムは不思議な気持ちになりましたが、目の前の光景を否定しても仕方ありません。ラセツもナユタも、もはやピクリともしないのです。

「ねえお母さん……」

ススムは何か言おうとしましたが、言葉が続きませんでした。ヤマメの口から次に出たセリフが、ススムをひどく驚かせたのです。

「父め、はかったな」

「どうして？ 父って、妖怪王のこと？」

「ススム、あの黒い雲に見覚えはないか？ 父がいつも身にまとっているものではないか」

「そうか」

「さあススムおいで。二人で城へ乗り込もう。今さら私に逆らう者はおるまい」

ススムを背に乗せて、ヤマメが城に達するころには、妖怪王も兵たちの前に姿を見せていました。といっても、いつもの黒い雲で身を隠したままです。

そこへススムたちが合流し、兵たちが急いで開いた門を通して、城内へと入ってゆくことになったのです。

もちろんすぐにヤマメは口を開きました。

「父上は、自分で自分の娘を殺したのですね」

妖怪王は答えました。

「ラセツのような者を生んだのはわしの責任だ。だから自分で始末をつけたのさ」

「だがここは死者国。いつときは動かなくなっても、死者が二度死ぬことはありません。ラセツも、いずれまたよみがえってきましよう」

「だがそのときにはヤマメ、おまえの息子が王となっていよう」

ここでススムは口をはさんでしまいました。

「ねえ王様は、どうしてここにいるの？」

「ははは、わからないかいススム君？ 君とナユタの手の中から杖を奪い、ここまで飛ばせてきたのは、わしなのだよ」

「じゃあヤマメと僕は、王様の手のひらであやつられていたんだね」
ヤマメが言いました。

「私たちだけではない。あやつられていたのはナユタも同じさ」

「どうしてなの、お母さん？」

「ススム、ラセツはどうやってナユタを死者国へ呼び寄せたのだと思う？」

「さあ？ 呪文でも使ったのかな」

「ラセツには無理な呪文さ。そのように高度な呪文は、父や私のような者しか使うことができない」

「じゃあ？」

「わからないかい？ 幽霊の姿をとって人間世界へ行き、ラセツはみずからナユタを殺したのだよ」

「まさか……」

「そうするしか、ナユタを死者国へ連れてくる方法はないではないか。なんて母親だ」

黒い雲の中から王の手が伸び、ススムの肩に軽く触れたのは、このときのことでした。

「ああススム君、塔の上から、わしの家来が杖を取って戻ってきたよ」

振り返るとその通りでした。ヨロイを身につけた鬼が一匹、うやうやしくささげもって近づいてくるのです。

サイズも見かけも以前と変わらない杖ですが、表面の黒さはより深くなり、つややかさも増したようではありませんか。もちろん、カミナリによってキズ一つついていゐるわけではありません。

「ススム君、それを受け取りたまえ」

言われた通りにしましたが、すぐにススムは不思議そうな表情を浮かべるようになりました。

「でも王様、これはヤマメの息子が受け取るべき物なんじゃないの？ ヤマメの息子が次の王になるんでしょう？ 僕じゃないよ」

「いや君が受け取るのさ」

「どうして？」

「それはススム君、君がヤマメの本当の息子だからさ。そうだろう、ヤマメ？」

その言葉に、ヤマメはすっかり目を丸くしています。

「ご存知だったのですか、父上？」

「ははは、知らいでか」

「やれやれ、私は一人芝居をしていたのかもしれない」

「そうでもないさ。どうだいススム君、びっくりしたかい？」

ところがススムは、ゆっくりと首を横に振るではありませんか。

「ううん、そうでもない。実を言うとな、ゼロ禪師から少し耳打ちをされていたんだ。もしかしたら、僕の正体はそうなのかもしれないって」

「ほう」

妖怪王は感心した顔をしています、ヤマメは違いました。

「あのジジイめ、余計なことをしおって」

妖怪王が振り返ります。

「まあよいではないかヤマメよ。害はなかったのだ。ゼロ禪師のことは許してやるのだな」

「はい、父上がそうおっしゃるのでしたら」

「さて、これでわしの仕事はすんだようだ。自分の城へ帰ることにするよ。あとは頼むぞ、ヤマメ」

「はい、みなの方によりしくお伝えください」

「ああわかった。しかしヤマメ、おまえもたまには城に顔を見せるがいい。みなも会いたがっている。そのときはススム君を同伴することを忘れるな。王国の妖怪たちも、新王の顔を見たがっているのだな」

「はい父上」

王の前でヤマメが深く頭を下げてお辞儀するので、ススムは目を丸くしたものでした。

ラセツとナユタのいない今、死者国の妖怪たちも、もはやヤマメに敵対することはありませんでした。ラセツとナユタをほうむった後、新しい杖をポケットに入れたススムとヤマメを、手を振って見送ってくれたのです。

ススムを背に寄せ、今度はあまり急ぐことなく、ヤマメは荒地を駆けてゆきました。またあの川を目指し、再び渡って、人間世界へと帰るのです。

店を訪ねると、もちろんオウナは歓迎してくれました。ススムが妖怪王国の跡継ぎに決まったことを伝え、姿は見えなくとも手を取り、喜んでくれたのです。

オウナの店を出て、再び二人は荒地を進み始めました。ヤマメが口を開いたのは、このときのことでした。

「ススム、妖怪王国の王になることを、おまえは本当に承知してくれたのだね？　不満に思っていないのだね？」

「それが気になるの、お母さん？」

「それでも母親だからな。子の将来は気にかかるさ」

「うふふ、まるで人間の母親と同じだねえ」

「笑いたければ笑え。おまえは自分の運命をのろってはいないのだ

ね？ 父が死ぬとおまえは人間世界を離れ、妖怪王国の住人となるのだよ」

「運命をのろってはいないけれど、心残りのことがなくはないよ」

「それは何か？」

「お母さんのことだよ」

「私？」

「うん、僕はお母さんの素顔を一度も見ることがないんだもん」

立ち止まり、ヤマメは笑い始めました。

「なんだ、そんなことか。おまえはいいときにこの話題を出したぞ。人間世界は目が多く、いつどこで誰に目撃されるともわからん。人間でなくても、野鳥や野良猫に私の真の姿を見られるのもまずいでな」

「どうして？」

「前方をごらん。あの川が見えているね。私たちはまだ死者国にいるということだ。ここでなら、私の姿を見せてやっても問題はない」

「なぜ？」

「それは見ればわかる。さあ毛皮を脱ぐことにしよう。よくごらんススム。これが私の素顔さ」

ススムの目の前で、ヤマメはするすると毛皮を脱いでいったのです。

それはどういう姿だったのでしょうか。ヤマメはどんな顔をしているのでしょうか。

「お母さん」

なつかしさのあまり、ススムは声を上げてしまいました。ヤマメの顔とは、彼を思わずそうさせてしまうものだったのです。

ススムの目の前にはあのなつかしい顔。赤ん坊のころからずっと一緒だった人。病気で死んでしまったと聞かされていた人の顔があったのです。

もう二度と会うことはないと思っていた本当のお母さんが、そこにいたではありませんか。

ススムは叫びました。

「やっぱりお母さんは、僕の本当のお母さんだったんだね。そうじゃないかという気がずつとしてた。妖怪王国から逃がすときに僕をメイドに預けたというのは、ウソだったんだね」

「そうさ。おまえを連れ、私自身が王国を抜け出したのだよ。人間たちの間に隠れて生き延び、ラセツを倒すことができる日 wait 待っていたのさ」

「お母さん…」

「さあススム、泣くのはそのくらいにおし。将来のために、おまえにはまだたくさんすることがあるのだよ。まず、呪文や魔力をもつと覚えなくてはならん。おまえには家来も必要になろう」

「お母さんのフクロウみたいなやつ？」

「あんなできの悪いのではなく、もっとちゃんとした家来をつけてやるさ。おまえには呪文の教師も必要だが、それはゼロ禅師にやらせればよからう」

「禅師が引き受けてくれるかな？」

「引き受けるさ。あいつはすっかりおまえに情が移っている。断るはずがない」

「本当に？ 自信があるの？」

「あるともさ。私の手並みを見ておいで…」

こうしてススムの物語は終わるのです。彼がいかにして新しい妖怪王へと成長していったかは、また機会があればお話しできるかもしれません。

見えず猫

ススムのお姉さんは、名前をミチコといいます。

弟の口からゼロ禅師のことをいろいろと聞かされ、相談をする気になったようでした。ある日、ミチコは寺を訪れたのです。

セーラー服姿の訪問に少し驚いたようでしたが、ゼロ禅師は親切に応対しました。

「それでお嬢さん、いったい何の御用かな？」

「ええ、あの…」

最初は遠慮していましたが、いかにも人のよさそうな禅師の様子に安心したのでしょう。ミチコは話し始めました。

「別に妖怪を退治してほしいというわけじゃないんです。だけど奇妙なことだから、ぜひ調べてほしいんです」

「では何が奇妙なのかな？」

「今すぐ私の学校へ来てください。そのつもりでクラスの間みんなも待っています」

さっそくゼロ禅師が出発したのは、いうまでもありません。路地を抜けてバス道に出て、ミチコと一緒にバスに乗ったのです。

下車したバス停は、校門のまん前にありました。

教室では、本当にクラス全員がゼロ禪師を待っていました。ゼロ禪師を招き入れ、さっそくミチコが口を開いたのです。

「来てもらったのは、実は『見えず猫』のことなんです」

「それは一体どんな猫なのかな？」

「動物ではなくて、『見えず猫』は妖怪なんです」

ミチコが語り始めたのは、この学校にかかわる奇妙な物語でした。

『見えず猫』がいつからこの学校にいるのか、詳しいことは誰も知りませんでした。一番年寄りの先生にきいても、「とにかく何十年も昔からいる」という答えしか返ってこないのです。

この妖怪を生徒たちは代々、教室の中で飼ってきたのです。

ではどんな妖怪なのかというと、その姿は誰も見たことがないのです。

姿は見えず完全に透明なのですが、大きな猫ではなく、授業中でも休み時間でも、ずっと女の子たちのひざの上に乗っているのが好きなのです。

この妖怪の世話をするのは、難しい仕事ではありませんでした。

女の子たちは当番を決め、交代で毎日、ひざの上に座らせてやってだけです。悪さなどしないし、ふんわりとした手触りを感じることはありましたが、いつもじっとして、勉強の邪魔になることだっ

てありませんでした。

クラスの中で、その日の当番の胸には、黄色いリボンをつけておくことが決まっていました。

教室の中を見回し、ゼロ禅師が口を開きました。

「しかし見るところ、お嬢さん方の中にリボンをつけている人はいないようじゃが」

「一昨日から、見えず猫は突然いなくなってしまったんです」

「いなくなった？」

ミチコは、ある女の子を指さしました。肌が白く小柄な生徒で、最初はおずおずとしていましたが、立ち上がって口を開いたのです。名前は洋子といいました。

「一昨日は私が当番だったんです。お昼ごろまでは確かにひぎの上にいました。でも昼休みになったところには、もういなかったんです」

「それ以後は何の手がかりもないのかな？」

「はい」

ゼロ禅師は、すでに何かを考えている様子です。この後ももう少し話し合いは続きましたが、会話の最後は、ミチコが締めくくるところになりました。

「『見えず猫』がどこへ行ってしまったのか、私たちには見当もつ

きません。でもなんとか呼び戻したいんです。

もう何十年もこの学校にいる妖怪なんです。それを私たちの代でサヨナラなんて、なんだか悲しいではありませんか」

寺へ戻り、さっそくゼロ禅師が調査を始めたのは、いうまでもありません。まず書庫にこもり、古い書物を調べることにしたのです。

でも成果は得られませんでした。

その次は古い友人を何人か当たってみたのですが、それでも何もわかりませんでした。そんな妖怪のことは誰も知らないというのです。

しかしゼロ禅師はある予感を感じていたのです。『見えず猫』とその失踪が気にかかり、普段の仕事まで手につかなくなってくるほどでした。

それほどの不安をゼロ禅師は感じていたのです。そして、ミチコの学校へもう一度行ってみようと思い立ったのでした。

やがてバスの窓の外にミチコの学校が見えてきたのですが、その光景がゼロ禅師をどれほどがっかりさせたことか。

なんと校舎の窓からは、黒い煙がもくもくと噴き出しているではありませんか。火事に違いありません。

バスを降りて、ゼロ禅師が校門を飛び込んでいったのはもちろんですが、すぐにほっと息をつくことができました。すでに避難は完了し、生徒たちは運動場に集まっていたのです。

すぐにミチコが気づき、こちらへ駆け寄ってくるのが見えました。

「禅師さん、火事が起こったんです」

「そのようじゃな。わしも胸騒ぎがしたのじゃが遅かった」

「でもケガ人はなかったんですよ」

「あまり大きな火事でもなさそうだ。校舎全体に火がまわることはなからうよ」

消防車がやってきて、火がすぐに消し止められたのは、いうまでもありません。

学校が再開されたのは三日後のことでしたが、ミチコから伝言を受け、放課後には禅師も顔を出すことになっていました。

ミチコと同級生たちが校門の前で待っていて、すぐに禅師を校舎の中へ案内してくれました。連れていかれた先は階段をトントンと上がった3階、先日の火災現場でした。

火事の原因は、古くなって漏電した電気設備であることがすでにわかっていて、それは特別奇妙なことではありませんでした。

でもミチコたちが禅師に見せたがったのは、燃えてススまみれになった部屋の中の様子だったのです。

ただの物置なので、広い部屋ではありません。

こげくさい匂いに、ゼロ禅師は思わず顔をしかめることになりました。女の子たちも同じ表情をしています。ミチコだけは別で、真剣な顔つきで壁の一ヶ所を指さすではありませんか。

燃える炎は大量のススを出します。このススが部屋の内側を真っ黒に染めているのです。

壁に顔を近づけ、ゼロ禅師が詳しく観察をはじめようとしたとき、ミチコが言いました。

「消防署の人の話では、もっと大きな火事になっても不思議はなかったそうです」

「この部屋だけでなく、校舎全体が焼け落ちたかもしれないというのだね。だがなぜか、これほど小さな火事ですんでしまった」

「そうなんです」

「消防署は、その理由をなんだと言っているのだね？」

「火元は漏電なんです。まるで出火直後に、誰かが電気のスイッチを切ってくれたとしか思えないそうです」

でも不思議なのは、スイッチには誰も手を触れていないことです。それなのに、なぜか電気が切れているんです」

「その理由はこれじゃよ」

ゼロ禅師が指さすので女の子たちは近寄り、目をこらしました。太い電線が、壁の表面をへびのように走っています。

ミチコが声を上げました。

「あつ、そのところで電線が切断されているんですね」

「だから電気が止まり、火事は小さくすんだのじゃな」

「でも一体誰が切断したんですか？」

「それはこの足跡の主だろうね。見えるかな？ 壁にそって、ここをこう歩いて、電線に近寄ったことがわかるじゃろう？」

女の子たちは息をのみました。本当にその通りだったからです。小さな猫の足跡が壁の表面を歩き、おかげでススが乱れ、点々とするしがついているのです。

ゼロ禅師は説明を続けました。

「その誰かさんが電線をかみ、電気を切ってくれたのだろう。よくごらん。これは猫の歯の跡ではないかな？」

目を丸くするどころか、女の子たちがあつと声を上げたのは、いふまでもありません。電線に残されていた歯の形は、まったくゼロ禅師が言うとおりであったからです。

「じゃあこれは、見えず猫がしてくれたことなんですか？」

「そうだろうね。妖怪の本能で火災を予知し、この部屋の中で待ちかまえていたのだろう。教室からいなくなったのは、それが理由さ。

そしてついに火事が起こったとき、電線をかじって電気を止め、被害を最小限にいくいとめてくれたのだね」

「でも見えず猫はどこにいますか？ まさか焼け死んでしまったんじゃない？」

「ははは、妖怪がそう簡単に死ぬものですか。そのうちにひょっこりと戻ってくるじゃろう。百年近く住んでいるのだから、この学校はもうやつの家なのじゃよ」

ゼロ禅師の言うことは正しかったようです。数日後、寺へ、ススムの手で手紙が届けられました。手紙を託したのはもちろんミチコです。

前略、ゼロ禅師さま

おっしゃったとおり、昨日のお昼ごろ、『見えず猫』はひょっこりと教室へ帰ってきてくれました。

数学の授業中、洋子が突然悲鳴を上げたのでみんな驚いたのですが、「見えず猫が戻ってきた」との彼女の一言ですべて決着がつかしました。

火事を小さく防いでくれたお礼を込めて、みんなで背中をたくさんなでてあげました。

これからもずっと、『見えず猫』は私たちの学校で暮らし続けることでしょう。禅師のご尽力に感謝しています。

かしこ

不思議そうな顔でこちらを見ているので、ゼロ禪師はススムに事情を話すことにしました。

話を聞き終えたとき、ススムが興味深そうに目を丸くしたのは、
いうまでもありません。

転人生

きっかけは、ススムの何気ない言葉をゼロ禅師が耳にしたことでした。

「竜子さんと一緒に登校する日には、普段よりも5分早く学校へ着くことができるんだよ」

仕事の手を休め、ゼロ禅師は顔を上げました。

「それはどういことなんだね？」

「朝、電車で駅に着くとするでしょう。駅から学校まで歩いて15分。ところが竜子さんと一緒だと、たった10分しかかからないんだ。何回も計ったから間違いないよ」

「竜子さんとは誰なんだね？」

「上級生の女の子。3年生だよ」

「その子がどうしたって？」

「とても美人だから、学校中で評判なんだ。転校生なんだけど、あんな美女は見たことがないって、最初のうちは休み時間のたびに教室の前が黒山の人だかりになった」

「他の女の子たちはおもしろくないじゃろうな」

「でもアイドルをいじめて男子の反感を買うのが怖いから、意地悪

はしていないみたいだよ。それでこの竜子さんはね…」

「うん」

「学校の行き帰りが、よく僕と一緒にになるんだ」

「ほう」

「そのとき気がついたんだ。竜子さんと一緒に歩くと、いつもの道がとても短くなる」

「そんな美少女と一緒にでは、そうだろうな」

「そういう意味じゃなくて、本当に道中が短くなるんだよ。何回も計ったんだから。いつもは15分かかる道が、竜子さんと一緒の日はたったの10分しかかからない。」

駆け足をしたり、早足で歩いてるんじゃないんだよ。交差点の信号機がいつもすぐに青に変わるから、途中で立ち止まる必要がなくなるんだ」

「なんだって？」

「僕の通学路には大きな交差点があるでしょう？　普段なら、その信号待ちで手間取っちゃう。」

「だけど竜子さんと一緒だとそれが無い。赤でも黄色でも、竜子さんが近づくとすぐに信号が青に変わるんだ。自動車が驚いて、急ブレーキを踏むこともあるくらいだよ」

「それはなかなか面白い話じゃな」

「どうして？ 禅師は修行したお坊さんなんでしょう？ 美人にも女の人にも興味はないんじゃないの？」

「おやおや、わしが竜子さんに興味を感じてはいかんかね？」

「だってさ…」

「中学3年といえば15歳か。来年にはもう結婚できる年齢じゃな。どうだろう。この寺へ嫁に来てはくれんかな？」

「何をバカなこと言ってるのさ」

「ははは、冗談としても出来が悪かったかな」

この一言で二人は顔を見合わせてケタケタと笑い、この日の会話はこれで終わったのです。

だけど翌朝、駅のホームで、ススムは口をあぐりと開けることになりました。なんとそこにはゼロ禅師が立っているではありませんか。

「やあススム君、おはよう」

「禅師、こんなところで何をしてるの？」

「いつか君は、毎朝8時ちょうどにこの駅に着くと言っていたじゃないか。竜子さんとはどんな美人なのか、お顔を拝ませてもらうと思うてね」

「スケベじい！」

だけどゼロ禅師は笑っているのです。ススムに何ができるというのでしょうか。そのまま歩き始めるしかなかったのです。

いつもの通り、童子の姿はすぐに見つけることができました。ススムを見て微笑みましたが、ゼロ禅師の姿にも気づいたようです。

ゼロ禅師が口を開きました。

「お久しゅうございます。あの日のお社での出来事は、今でも昨日のこのように覚えております」

ススムは思わず目を丸くしたのですが、両手を胸の前で合わせ、童子にむかってゼロ禅師は深くお辞儀をしているではありませんか。

童子はこう答えたのです。

「供え物のまんじゅうを盗みに忍び込んできたときのことか？」

「おっしゃってくださいますな。供え物を盗むなど、われながらなんという悪さであることか。その罪深さには、今でも深く恥じ入っております」

「気にするな。あれは私が与えたも同じだ。私は笑って眺めていたのだぞ。腹をすかせた小さな子供に、誰が盗みをとがめだてしよう」

「恐れ入ります」

「それはそうと野良猫たちの話では、私の石像は先ほど例のトラッ
クに積み込まれたそうだ」

「おお、それは本当によい知らせでございますな」

ここでやっと、ススムは口を開くことができました。

「何がどうなってるの？」

ゼロ禅師が説明してくれました。

「ススム君、恐れ多くも君はいま、この町を治めている竜神のお嬢
様とお話ししているのだよ」

「お嬢様？ 竜神？ 竜子さんは神様なの？」

「いやそうではなく、むしろ妖怪に近いお方だ」

「えっ？」

次の瞬間、セーラー服を着た少女の姿はまるで風に吹き散らされ
る雲のように消え去り、まったく別のものが姿を現したではありま
せんか。

それはあまりにもまばゆく、ススムは心臓をグイと強くつかまれ
たような気がしたのです。

胸の動悸がおさまり、やっとススムが口を開くことができるよう
になったのは、何秒もたってからのことでした。神々しい竜神の娘
は、いつの間にか竜子の姿に戻っていました。

「ねえ禅師、その野良猫って、いったい何の話なの？」

「ススム君、わしがこの童子様と出会ったのは、君が生まれるよりもずっと前のことだ。わしの家の近所にお社があり、そこにまつられていた。

ところがあるとき、困ったことが起きた。泥棒が入り、なんと童子様をかたどった石像を盗み出していったのだよ」

「へえ」

「警察は捜査をしたが、犯人はようとして知れず、もちろん石像の行方もわからなかった」

「どこかへ売られたんじゃないの？」

次に口を開いたのは童子でした。

「石像を買い取ったのは、ある金持ちの男だった」

「へえ」

「身寄りのない孤独な老人であった。社で私の像を見かけたおり、死んだ自分の娘の面影を見つけ、そばに置きたくなったらしい。それで賊に金をやり、盗み出させたというわけだ」

「悪い奴だね」

「私はそうは思わなかった。古い先短い者だ。ほんの数年、その老

人の屋敷の中に飾られることになっても、どうということはないではないか。だが何週間か前、老人はどうとう死んだ」

「うん」

「すると賊たちが再び動き始めたではないか。私の像を屋敷から持ち出し、また誰かに売りつけようという魂胆らしい。だから私は、猫たちに屋敷の見張りを頼んだのだよ」

「それでどうとう、その返事があったということなの？」

「そのとおり。像を積んだトラックが、間もなくこの道路を通過するということさ」

「どうやって像を取り戻すの？」

「これをごらん」

竜子は腕を差し出したのですが、その手の中には何もないので、ススムはきよとした表情で見つめ返すことになりました。

「何も見えないよ」

「人の目には見えぬが、鋼よりも強い糸を私はこの指につまんでいるのだよ。さあススム、手におとり。糸のはしを私はあの街路樹に結び付けておいた。あそこにある背の高い木が見えるだろう？」

「あの木？」

「そうさ。さあ糸をおとり」

吹き飛ばしてしまわないように気をつけながら、ススムはそつと指につまんだのです。

「さあトラックが来るぞ」

その言葉どおり、黄色い車体が近づいてくるのが見えています。箱のように四角い形をして、あの中に像がおさめられているのです。よう。

「さあススム、糸を引くのだ」

ススムが言われたとおりにしたのは、いうまでもありません。

メキメキメキ。

大きな音を立てて、街路樹が突然倒れ始めたではありませんか。

力を込めたわけではなく、ススムはただ軽く手を引いただけです。でも竜神が使う道具には、不思議な魔力があるのかもしれません。

トラックの運転手はひどく驚いたに違いありません。倒れる木に行く手をはばまれ、やむなく急ブレーキをかけたのです。

だけど間に合いませんでした。トラックは衝突し、幹の上に乗り上げてしまったのです。

ススムが声を上げました。

「やったあ」

トラックを捨て、運転手はもう逃げ出そうとしています。誰が連絡したのか、遠くからもうパトカーのサイレンが聞こえてくるではありませんか。

ススムは思わずため息をつきました。朝っぱらから経験する出来事としては、スリルがありすぎたかもしれません。

「ねえ竜子さん…」

だけど彼女の姿は、もうどこにもなかったのです。いくらキヨロキヨロしても、目に入るのはゼロ禅師の姿だけなのです。あの不思議な糸も、いつの間にか彼の手を離れたようです。

ゼロ禅師が口を開きました。

「ススム君、急がないと学校に遅刻してしまうのではないかな？」

「ああ、そうだった」

カバンをかかえて、ススムが駆け出したのはいうまでもありません。

竜子に会うことはもう二度とないだろうということは、なんとなく理解していました。あれは石像を取り返すために、ここ数日の間、竜神の娘が仮に取っていた姿にすぎないのです。

大変な美少女ではありませんでした。道路の信号機までが敬意を表して進路を譲ったほどののです。

学校に着いたススムを、もう一つの驚きが待っていました。

校内で誰に話しかけて『竜子』という名を出しても、「それは誰のことだい？」という答えしか、もはや返ってこなかったのです。

人々の記憶から、竜子の存在はすでに完全に消し去られていたのです。

竜子が存在していたことを知っているのは、今ではススムとゼロ禅師だけなのに違いありませんでした。

白い服

ある日、一人の女の子がゼロ禅師の寺を訪ねてきました。

ススムもその場で話を聞くことになったのですが、名前を久美子といました。

久美子は一週間後に、ススムが通っている学校へと転校することが決まっていたのですが、彼女の相談はそれに関わる内容だったのです。

「ススムさんと同じ学校へ通うようになって、私は制服を着ることができないんです」

意外な言葉だったので、ススムとゼロ禅師は思わず顔を見合わせました。

「どうしてなの？」

久美子は説明を始めたのですが、どうにも信じられない内容だったので、二人とももう一度顔を見合わせないではいられませんでした。

ゼロ禅師が口を開きました。

「お嬢さん、疑うわけではないが、すぐには信じられない話なのじゃが」

「そうおっしゃるだろうと思って、実験するために白い服を持って

きました。どこかに着替える場所はありませんか？」

いったん小部屋に消えた久美子がまた戻ってくるには、2分もかかりませんでした。あっさりとした真っ白なワンピースに着替えています。

「本当に私は、5分間と白い服装をしていることができないんです」

ゴトンゴトンと天井裏から小さな音が聞こえてきたのは、このときのことでした。ゼロ禅師がつぶやきました。

「またネズミが天井裏で遊んでおるな」

そして、そのときそれが起こったのです。

ボタンという音とともに板が外れて天井に穴が開き、ネズミが落ちてきたのです。

真下にいたのは久美子でした。キャツと飛びのこうとしたのが一瞬遅く、ネズミは彼女の肩に着地してしまいました。

ネズミはすぐに姿を消したのですが、久美子の洋服には肩から背中にかけて、真っ黒な足跡が残されたではありませんか。これでは服が台無しです。

ため息をつきながら、久美子が言いました。

「だから私は、白い服を着ることができないんです。着るといつも何かが起きて、ひどく汚されてしまいます。」

ススムさんの学校では、女の子は真っ白な制服を着るのでしょうか？ 転入したその日から私がどんな目にあうか、想像するのは簡単でしょう？」

ゼロ禅師が言いました。

「これまでも白い服を着たときに、どんなことが起こったのか、よかったら聞かせてくださらんか」

「走ってきた自動車にドロ水をかけられるなんて、まだいいほうです。なんでもない場所ですまずいて水たまりに落ちてしまったり、チヨウが卵を生みつけていったことだってありました。」

一番ひどかったのはカキの木の下を通ったときで、突然実が何十個も落ちてきて、体中が真っ赤に染まってしまったほどです」

「だから白い服を着ることができないというのかな？」

「はい」

話を終え、汚れていない服に着替えて久美子が帰っていったあと、ススムは口を開きました。

「ねえ禅師、女の子の服を汚してしまう妖怪なんて存在するの？」

「わからん。わしも聞いたことがないよ」

そうやって日が過ぎていったのですが、ゼロ禅師は何の手がかりもつかむことができませんでした。そしてとうとう、久美子が転入する日が来てしまったのです。

その姿を見て、ススムは目を丸くしないではいられませんでした。白い制服姿の久美子の指には、小さな指輪が光っていたのです。

ススムはすぐに思い出すことができました。あれは『魔よけの指輪』なのです。いつぞやゼロ禅師が見せて、使い方を説明してくれたことがありました。

あの指輪は、ゼロ禅師が久美子に与えたものなのでしょう。

確かに強力な指輪なのかもしれません。久美子が転入してから数日すぎても、何も起こりませんでした。彼女の白い制服が汚されてしまうことはなかったのです。

しかしそれも、お調子者の同級生が指輪に興味を持つまでのことでした。

ある退屈な授業中、その生徒は気がついたのです。

「あら？ 久美子の指に光っているあのきれいな指輪は何かしら」

自分の指に指輪がないことに久美子が気づいたのは、数秒後のことでした。

隣の席の生徒が手に取り、しげしげと眺めているのが目に入りましたが、後の祭りでした。

もう何年も前から、悪霊は学校の地下に潜んでいました。そして地上へ現れるチャンスをねらっていたのです。そのチャンスが、このとき訪れたわけでした。

突然、地震のように大きく教室が揺れ始め、先生も生徒も悲鳴を上げることになりました。

壁からはがれ、黒板が崩れ落ちてしまうのに時間はかかりませんでした。

そのあとには、むき出しの壁が姿を現すことになりました。しかしそこになかば埋もれている者の姿を目にしたとき、教室から逃げ出さないでいられる人は一人もいなかったのです。

しかし逃げ遅れた人もありました。

それがススムと久美子で、あと少しというところで長い腕がサツと伸びてきて、鼻先でドアを閉められてしまったではありませんか。

ドアを閉めたのは、もうほとんど骨しか残っていない腕でした。死んで長い年月のうちに、皮膚や筋肉はなくなっていたのです。

崩れ落ちた壁の中から姿を現し、ススムと久美子の前に立ちはだかったのは、なんと全身が骨ばかりのガイコツ女だったのです。

その顔に目や鼻はなく、ただの暗い穴になってしまった目で、ススムたちを憎々しげににらみつけているのです。

「ススム君、あの妖怪は何なの？」

「そんなの僕も知らないよ」

とうとう久美子はガイコツ女に捕まってしまいました。手首を強

くつかまれ、いくら暴れても逃げ出すことができません。

ススムにも、この妖怪に飛びかかってゆく勇氣はありませんでした。その姿はそれほど恐ろしく、かなうような気はともしなかったのです。

でも何もしないわけにはいきません。ススムは掃除道具入れの中をあさり、長いホウキを剣の代わりにし、手近にあったイスを盾の代わりに手にとることにしたのです。

ところが次の瞬間、とても奇妙なことが起こりました。

「なかなか勇ましい格好じゃないか。男の子はそうじゃなくちゃ」

突然、聞き覚えのない声が教室の中に響いたではありませんか。ススムは驚いて振り返りました。

いつの間に入ってきたのか、机の上に腰かけて、楽しそうに足をぶらぶらさせている男の子と目が合うことになりました。

「君はだれ？」

「オイラはザシキワラシといってね。この学校に何十年も前から住み着いているのさ。いいことをするわけじゃないから守り神ではないが、悪いこともしないから疫病神でもないな」

ザシキワラシは6、7歳に見えますが、昔風の服装をしています。模様のある紺色の着物姿で、ワラのぞうりをはいているところなど、江戸時代の感じではありませんか。

ザシキワラシはガイコツ女を振り返り、口を開きました。

「なあハナよ。オイラは今までに何回も言ったじゃないか。昔のうらみなど忘れて、その女の子は放してやりなよ。もう十分怖がらせただろう?」

「いや、まだだ。この娘を八つ裂きにするまで、私のうらみが晴れることはない」

「おまえもしつこいねえ。家宝の皿を割った罪でおまえが切り殺されたのは、もう300年も昔のことだろう? 死体は屋敷の庭に埋められたのだったな。屋敷の跡地に建てられたのがこの学校なのかい?」

「私はずっと待っていたのだ。そして今、憎いあの男の子孫が転入してきた。この機会を逃すことなどできるものか」

「やれやれ。ススムよ、聞いてのとおりだ。ハナはうらみに凝り固まっているのだよ。」

白い服を着ないようにと、オイラは久美子に何回も警告してやったじゃないか。あれは、この学校の制服は絶対に着るなという意味だったんだよ。気がつかないそっちが悪いのさ」

恐ろしさのあまり、すでに久美子は氣を失っているようです。ガイコツ女はしびれを切りました。

「なんだザシキワラシ、何のために出てきた? 言いたいことがあるれば早く言え」

ザシキワラシの口から次に出た言葉は、ススムをひどく驚かせることになりました。

「なあススムよ、今こそあの杖を使うべき時なんじゃないかねえ」

「えっ、僕が魔力の杖を持っていることをどうして知ってるの？」

「猫坂に住む妖怪ならみんな知っているさ。おまえは妖怪王の跡継ぎなんだろう？」

ポケットの中から、ススムは魔力の杖を取り出しました。ガイコツ女は目を丸くしましたが、怖がる様子はありません。

「なんだそれは？　ほう魔力の杖か。だがおまえに使うことが出来るのかね？」

しばらく手の中に握っていましたが、ススムもどうしていいかわかりません。

「ねえザシキワラシさん、僕はどうすればいいの？」

「オイラが知るもんか。まず『悪霊退散の呪文』でもとなえてみたらどうだい？」

「そんな呪文、僕は知らないよ」

「なんとまあ、そんな初歩も習っていないのかい？　ヤマメはどんな教育をしているのやら。じゃあ仕方ない。ガイコツ女に向けて、とりあえずその杖を振ってみろよ。何か起こるだろうさ」

苦しまぎれに、ススムはその言葉に従ったのです。それがあんな結果になるとは、予想もしていませんでした。

杖の先から、突然とんでもない大風が吹き始めたではありませんか。

もちろんススムは安全でした。

でもガイコツ女と久美子は、それをまともに食らってしまったのです。風に乗って久美子の体は空中高く放り出されたのですが、ザシキワラシがとっさに受け取り、助けてくれました。

久美子は、かすり傷ひとつ負うことはなかったのです。

でもガイコツ女はそうはいきませんでした。風を受け、あつという間に吹き飛ばされてしまいました。

ガイコツ女の背後には教室の壁がありました。だけど、体がそれにたたきつけられることはなかったのです。

あまりの不思議な眺めに、ススムは思わず目を丸くすることになりました。

ガイコツ女の体は、まるで幻のように壁を突き抜けていったではありませんか。

しかしそれも一瞬のことにすぎず、壁を通り抜けてその体はドンドンと遠ざかり、かすかな悲鳴だけを残して、あっという間に見えなくなってしまったのです。

当惑した顔で、ススムは杖を眺めなおすことになりました。

「ザシキワラシさん、これは一体どういうことなの？」

「ああススム、話には聞いていたが、オイラも実際に見るのは初めてだな」

「何を？」

「おまえが使った魔力さ。妖怪を次元のかなたへ吹き飛ばしてしまっただ」

「次元のかなたって？」

「この宇宙は3次元の空間だ。わかるか？」

「うん」

「次元のかなたとは、その外側に広がっている別の空間のことさ」

「それとこれと、どう関係があるの？」

「おまえはガイコツ女を、そこへ追放してしまったのだよ。これほどえらい魔力の使い方なんだぞ」

「どうして？」

「そんな魔力はヤマメだって、妖怪王だって持っていないからさ。ナユタとおまえの杖が合体したときに、とんでもない道具へと生まれ変わったらしいな」

「それはどういうことなの？」とススムはたずね返したかったのですが、口を閉じるしかなかったてしまいました。

「うーん」と小さくうなりながら、久美子が目を覚ましたからです。ザシキワラシが指さしました。

「ススム、久美子を介抱してやれよ。ガイコツ女はいなくなっただ。彼女の悩みは終わったんだよ。もうどんな服を着ても大丈夫だ」

ススムはもつと杖の話が聞きたかったのですが、不可能なようにした。廊下に足音が聞こえ、先生たちが集まる気配があったのです。

久美子を助け起こしたときには、ザシキワラシもすでに姿を消していました。

自分の目の前で一体何が起こったのか、次元のかなたとはどういうことなのか。頭の中を疑問でいっぱいにしながら、ススムは学校を終え、家路に着くほかなかったのです。

見えない場所

ある人の思いがけない姿を突然見つけ、ススムは目を丸くしてしまいました。そばへ行き、話しかけたのです。

「ねえブタ八おじさん、こんな空っぱの空き地の真ん中で、ハシゴなんか立てて何をしているの？」

「やあススム君か。このハシゴの上には何が見えるね？」

「何も見えないよ。ただ空へ向かって、垂直に立っているだけじゃないか」

「実はゼロ禅師に頼まれてね」

「そこでハシゴを持っているように頼まれたの？ 禅師はどこ？」

「あまり大きな声を出すもんじゃないよ。ゼロ禅師はいま、敵の隠れ家を偵察に行ってるんだ」

「隠れ家？ そんなものがどこにあるの？ 僕には何も見えないよ」

「それはもちろんこのハシゴの上さ。透明な建物だから、誰の目にも見ることができないのだよ。これは悪い妖怪を退治するための大切な作戦なんだ」

ススムにはますます理解できませんでした。ブタ八にはすぐに別れを言い、空き地を離れました。ゼロ禅師の寺へと急いだのです。

ススムの話聞き、もちろんゼロ禅師も目を丸くすることになりました。

「ススム君、それは少し心配な話じゃな」

「ブタ八おじさんはお人よしだから？」

「そうだね。おそらく誰かにだまされているのだろう」

空き地へ戻ってきてても、先ほどと変わった様子はありませんでした。近づいてくるゼロ禅師の姿にブタ八が驚いた顔をしたのは、いうまでもありません。

「あれあれ禅師、いつの間にハシゴの上から降りてきたんですか？」

「ブタ八君、わしはそのハシゴを登ってなどいないよ。まして、目に見えない妖怪の隠れ家のことなど何一つ知らないのだよ」

「じゃあ、さっきの禅師は一体誰だったんです？」

「それが問題だね。その人は本当にわしにそっくりだったのかな？」

「そっくりもそっくり、疑う気一つ起きないほどでしたよ。ちくしように、あれこそ妖怪の化けた偽者だったんだな…」

「その人はどうやってハシゴを登っていったのか、詳しいことを話してくれるかい？」

するとブタ八は、奇妙な物語を語り始めたではありませんか。ゼロ禅師とそっくりなその人物がブタ八の家を訪れたのは、その日の

昼過ぎのことだったのです。

「やあブタ八君、いるかね？」

「ああ禅師、いらっしゃい」

「ブタ八君、すまないがわしと一緒にちよっと来てくれないかな。頼みたい仕事があるのじゃよ。なあに、すぐそこさ」

そして連れてこられたのがこの空き地で、その中央でハシゴを支えるという仕事が始まったのです。

ススムは質問しました。

「ブタ八おじさん、そのニセ禅師がハシゴを登っていったのは、何分ぐらい前のことなの？」

「40分か、もう45分にもなるかな」

「おじさんはもう手が痛くなったんじゃない？」

「ずっとハシゴを持ち続けているからね。少しぐらい休憩してもいいのかな」

ところがブタ八は、すぐに表情を変えたではありませんか。

「おやどうしてだか、ハシゴから手が離れないのだよ。まるで接着剤で貼り付けられたかのようにになっている」

ススムとゼロ禅師は思わず顔を見合わせたのですが、本当にその

通りだったのです。

すぐに二人で手をそえ、引きはがそうとしたのですが、ブタ八の手はピクリともしません。何度試しても、まるで離れる気配がないのです。

それどころか、さらに悪いことが起こってしまいました。ゼロ禅師が声を上げたのです。

「おやススム君、ハシゴにかけられている魔力が、どうやらわしにも働いてしまったようだ。ブタ八君だけでなく、わしの手もハシゴから離れなくなった」

「本当なの？」

「やれやれ、とんでもないことになったぞ」

「だけど禅師、同じようにハシゴに手を触れたけど、僕の手は大丈夫だよ。ほら、くつついたりしてないもん」

そういつて、ススムは両手を振って見せたのでした。

「ははあススム君、それはきつと、君が持っている魔力の杖のおかげだよ。わしの偽者がかけた魔力も、君に対しては無効なようだ。すまないがハシゴを登って、この上がどうなっているのか、様子を見てきてくれるかい？」

「うん、わかった」

ススムは身軽に、するするとハシゴを登ってゆきました。何か透

明な壁を通り抜けたかのように、その姿はあっという間に消え、見えなくなっていました。

ススムが再び姿を見せたのは、数分後のことでした。

「禅師、この上には小さな部屋があるよ。狭くて窓もなくて、きつと酒蔵だと思う」

「酒蔵？」

「だって酒ビンが散らばってるもん。みんな空っぽだけどね」

「それはどんな酒ビンなのかな？ 一つ持ってきてくれるかい？」

「うん：ほら」

「ほほう。これはブタ八君、妖怪たちが使っている酒ビンではないかね」

「そうですね、禅師。オイラも見たことがあります。するとこのハシゴの上には、本当に妖怪の酒蔵があるんですね」

「どこかの妖怪が作り上げ、魔力で透明にして隠していたのだろう。そこへ泥棒が入ったようじゃな」

「その泥棒にだまされて、オイラは知らずに手助けをしていたというわけなんですか？」

「残念ながらそうらしいね。しかし困ったな。ハシゴにくっついたまま、そろそろ日まで暮れ始めたじゃないか。すまないがススム君、

何か手がかりはないか、もう一度酒蔵の中をよく調べてくれるかい？」

「うん、わかった」

酒蔵の内部の様子は、さっきとは変わっていませんでした。窓がなく暗いので、壁際に何者かがひそんでいても、まず気づかれることはないでしょう。

そして本当に、そこには誰かが身を隠していたのです。

「あっ」

気がついたときには遅く、ススムは太い腕に捕まえられてしまいました。

相手を見上げ、ススムはぞっとしないではいられませんでした。イノシシにそっくりな顔をした妖怪だったのです。背が高く、筋肉は隆々として、ススムをひよいと持ち上げるなど簡単なことでした。

そして事実、ススムはそうやってつかまり、どこかへ連れていかれようとしているのです。

「禪師、助けて」と悲鳴を上げましたが、ゼロ禪師にはどうすることもできませんでした。

いままで気がつきませんでしたでしたが、酒蔵の壁にはドアがありました。それを開け、妖怪はススムを外へと連れ出したのです。

妖怪の目つきは鋭く、怒りに満ちています。ススムのことを酒蔵

泥棒と思っているのでしょうか。恐ろしさのあまり、ススムは口をきくこともできませんでした。

酒蔵の外は廊下につながっていました。

ここは城の内部のようです。廊下は長く続きましたが、ついにススムは広間まで連れていかれてしまいました。

明るく照明された大きな部屋で、天井は高く、テーブルがいくつも並んでいます。その上には色とりどりの料理の皿が並べられています。宴会の最中ようです。

テーブルの前に座っている者たちの姿に、ススムは目を丸くすることになりました。あるとあらゆる種類の妖怪たちだったからです。

口には猿ぐつわをされ、ススムの体はすでに丈夫なナワでしばられていました。逃げることもできません。

イノシシの頭をした妖怪は広間の正面へ進み、一番大きなテーブルの前へと出て、やっとススムを床に降ろしたのでした。

ドスンという音に、ざわざわと騒がしかった部屋の中は、ピタリと静かになってしまいました。

宴会の主催者は、この城の主人であるに違いありません。家来と同じようにイノシシの頭を持っていますが、一段と太って体が大きいのです。ススムを連れてきた家来は歩み寄り、城主の耳に何かをささやきました。

城主の顔つきが一瞬で変化したのは、いうまでもありません。

「なんとその人間の小僧が、酒蔵の酒をみんな盗んだというのか」

「はい」と家来はうなずきました。

「本当に一本も残っておらぬのか？」

「すべて運び出され、残っているのは空きビンだけでした」

城主は向き直り、客のほうへと体を向けました。この場で一番大切な客は、先ほどから城主と同じテーブルにしていたのです。

客が口を開きました。

「ご城主、どうなされたのです？」

「いやあお恥ずかしい。とっておきの名酒を差し上げたいと思っておりましたが、だめになりました。お聞きの通り、泥棒に入られてしまいましたな」

「その子供が泥棒なのですか？」

「他にも仲間はいたが、こいつ一人を残して逃げ去ったのでしょう。泥棒同士のつながりなど、その程度です」

「なるほど」

「盗まれたのは本当によい酒だったのですぞ。あの酒蔵でもう400年も寝かせてあったのです」

「しかし泥棒に入られたのでは仕方ありますまい。ところで、その子供の処分はどうなさる？」

いかにも軽蔑した視線を向け、城主はススムを見下ろしました。

「ふん、こそドロの処分は決まっております。首をはねて、城門の上さらしものにしてやりますよ」

「いやいやご城主、それではあまりにもつたいない。その小僧を私にくださいませんか。私はトラを一匹飼っております。このトラが人間の肉が大好きなので、みやげに持って帰りたいのです」

「ほうほう、トラのえさにされるか。これはおもしろい。つかぬ事をうかがうが、トラのオリには生きたまま放り込むので？」

「もちろん」

「すると悲鳴を上げ、泣き叫びながら逃げ回るさまを見物できるというわけですね。これはメシがうまくなりそうだ」

「まあ、そんなところですか」

「しかしお客人、私は今忙しく、この城を離れることができないのです。お客人の城まで同行し、このガキが食われるさまを見物できればよろしいのだが」

「それは残念ですね。ではこの小僧は私がいただきましたぞ。おお、もうこんな時間だ。家来たちを連れ、私はおいとませねばなりません」

「なんとお客人、まだまだゆっくりされればよいではありませんか」

「いやいや、トラも腹をすかせておりましょう。早くみやげを見せ、喜ばせてやりたくてね」

「そうですか。では残念だが、城門までお見送りいたしましょう。さあみなの方、立ち上がるのじゃ」

こうして家来とススムを連れ、客は城門へと案内されたのです。ススムは口もきけず、引き立てられてゆくしかありませんでした。

すでに城門は大きく開かれ、出発する客たちを待っています。その外には、いかにも妖怪の国らしい荒地が広がっているではありませんか。

城門からは白い土の道が伸びているのですが、曲がり角をすぎて、城からはもう見えなくなってから、やっとススムは猿ぐつわを外し、ナワを解いてもらうことができました。

「ああお母さん、本当に助かったよ。ありがとう」

その言葉に、ヤマメはじろりと振り返ったのです。

「ススム、偶然私が客であったからよかったようなものの、そうでなければ、どうするつもりだったのだ？」

「知らないよ、そんなこと」

「そもそもおまえは、なぜ酒蔵の中にいたのだね？」

ススムはすぐに事情を説明しました。ヤマメが目を丸くしたのは、
いうまでもありません。

「するとススム、ゼロ禪師とおまえの叔父は、まだハシゴにくっつ
いたままにいるということか？」

「ねえお母さん、二人を助けてあげてよ」

「私は知らんね。明日の朝までくっついていればいいさ」

「でも…」

「ええいススム、私の背にお乗り。その空き地まで連れて行ってや
る。魔力の杖を使えば、おまえでも簡単に助けてやることができる
のさ」

「どうやって？」

「よい機会だから、呪文を一つ覚えるのだね。実地に学んでゆくのが一番さ。」

妖怪王に即位するまでに、おまえは何百という呪文を知らなくてはならないのだよ。これがその第1号なのさ…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4058i/>

妖怪禅師

2011年11月4日10時47分発行